

---

# インフィニット・ストラトス ~運命の悪魔と変革者(いちか)~

リアルではおぜうタイプ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス ～運命の悪魔と変革者いちか～

### 【Nコード】

N1322T

### 【作者名】

リアルではおぜうタイプ

### 【あらすじ】

IS学園に運命を操る悪魔が降り立つ。

ISという存在によって歪められた運命、歪められた世界。  
変革者いちかと共に運命を、変える。

という建前の元IS世界にトリップしたおぜうさまが一夏ハーレムを弄繰り回すお話。

になるはずだった。

Stage0 ー待て、私は聞いていないぞ。いきなり送られるだなんてー(前)  
おぜうさまとISが好きすぎて書いた。  
反省はしているが後悔はしていない。

はず。

ちなみに終始おぜうさま視点なので色々突然です。気をつけてください。

関係ないけど作者はシャルロット党です。

Stage 0 ー待て、私は聞いていないぞ。いきなり送られるだなんてー

運命とは、とても不安定なものである。

些細なきっかけで歪められるものでもあれば、いくらあがいても逆らう事ができないものでもある。

ならば、この世界はどうだろう。

IS、インフイニット・ストラトスによって歪められた世界。

既存兵器はほぼ全て役立たずとされ、戦争を生業とする人間は職を追われる。

【女性にしか扱えない】という欠点のお陰で女の地位が急激に高騰。男は下僕にするもの（キリツ）なんて思考もザラにある世界。

それでも運命を司る悪魔である私が、そんな歪んだ運命を許せるか。答えは否。

ならば、私を変えずにどうするか。

「と、言うわけよ。」

「何がというわけよこのアホ吸血鬼が」

私が考えたことをありのまま説明したら阿呆扱いされた。

どういふこと・・・

妖怪の楽園、幻想郷の一角に存在する紅き館、紅魔館。

その巨大図書室で本（らのべというらしい）を読み耽っていた私はとてもいい提案を思いついた。

【そうだ、物語の中、いこう。】  
である。

そんな提案を親友に吹っかけた私、永遠に紅い幼い月ことレミリア・スカーレットは親友、動かない大図書館ことパチュリー・ノーレッツ

ジに一蹴されてしまった。

「大体、どうやってラノベの中に入るってのよ。スキマぐらいでしか無理よそんなの？」

「そんな訳でもないでしょうさ。パチエに不可能は無いと信じているよ」

「微妙な信頼はいらなから現実を見て」

「幻想郷で現実を見るとは滑稽ね。ありもしない幻想を抱いてこそ幻想郷じゃないかい？」

「ありもしない幻想よりはマシよきつと。」

「さて、どうだかね。」

パチエと談笑する私が手に持つ本の題名は【インフィニット・ストラトス】の一卷。かの八雲紫が外から仕入れたもの。

私はこれにとても興味を引かれ、冒頭のような考えを思いついたのである。

「・・・はあ。で、仮にレミイがラノベの世界に行ったとして、その間にごどうするのよ。」

「そのためのフランへの教育よ。それなりに進んでるんでしょう？」

「とは言っても、まだまだ姉離れからは遠いわよ？」

「死神でも使って引き寄せればいいさ。」

「・・・梃子でも諦めない気ね？」

「勿論。」

私は面白そうなことがあれば如何にしても成す。そして楽しむがモットー。紅魔館の住人は全員それを知っているため、もう諦めるしかない。

「・・・はあ。わかったわ。とりあえず準備」

「

「どうしたのパチエ？」

「よかったわねレミイ。今すぐいけるみたいよ。」

「は、それってどう？」

突然、私の真下が空洞になる。

私は寝転がっていたため急に飛ぶ事もできず

「によわああああ！！??？」

そのまま空洞 スキマ に落下することになった。

「……………知ってるような知らないような……………なにここ。永遠亭？」

目を覚ますと、永遠亭のような真っ白な部屋だった。

少なくとも紅魔館にこんな白い部屋はない。

「少なくとも、永遠亭という場所ではないことだけは確かだ。」

私の独り言に対する答えが返る。

その方向を向くと、黒い服、黒い髪と黒尽くめの女性が立っていた。

「……………誰？」

「私の名は織斑千冬……………チフユ・オリムラと言った方がいいか？」

「いいえ。日本式で結構……………ん？」

今、目の前の女は織斑千冬と名乗った。

私に思い当たる名前は一つ。

先ほどまで私が呼んでいたインフィニット・ストラトスの登場人物  
……まさか、あの紫でもそんなことはできまい。同姓同名  
ね、きつと。

「で、貴様は誰だ。」

「……レミリア・スカーレット。」

「何が目的だ」

「さて、私にもわからないわ。」

「……ふざけているのか」

「本気よ。私をここに送った張本人の思惑は誰にもわからない。」

「送った？ どういうことだ。お前は突然教室に落ちてきたのだぞ。」

「さいですか……ん？ 教室？ 待つて、ここ何処？」

「……お前頭など打っていないだろうな？ IS学園だ。」

……訂正。あのスキマ妖怪は本当に不可能を可能にしやがりました。

「あんのババア……わざわざ直接送って来なくてもいいじゃないの……」

「……で、お前は何者だ。IS、それも専用機を所持しているよ  
うだが」

……は？ 今なんつった？

「私はただの平凡なお嬢様。ISなんか持って無いわよ。」

「……無自覚に着けていたというのか？ お前のその髪飾りだ。」

「……は、これが？」

千冬が言っているのは、私の顔の両側にある赤い髪飾り。

私が霊夢からもらった宝物。



「これは私が愛するひとからもらったものよ。ISだとは聞いて無いけど」

「・・・そうか。」

「そうよ。」

「・・・で、今後のお前の処遇だが、ここに入学してもらう。」

「・・・は？」

「専用機を持っているということはそれなりに腕が立つのだろう。」

それにここにいる以上ただで帰れるとは思っていないだろう・・・？」

千冬が物凄く悪い笑みを浮かべて私に語りかける。

うむむ・・・こうなったら腹を括るしかない。

実際私はここに来る事を望んでいた。ならば楽しむしかないだろう。こうして、私の学園生活が

「その前に一応入試試験を受けてもらう。IS専用機持ちならば健闘できるだろう。」

始まるまでにはもう少しかかるようだ。

Stage0 ー待て、私は聞いていないぞ。いきなり送られるだなんてー（後  
こんなノリで始めましたおぜうさまがIS入り。

ISに関しては処女作なので色々酷くても許してくださいあ……  
あと、基本的に前書きに誰視点かを書くつもりなので参考にしてく  
ださい。

今回はおぜうさまの入試試験。無双……ではないかも。

Stage 1 くあんなの着てたらスマートに動く事もできないわ。時代は巫女

さっそくの第二(一)というか(一)話。しかし今だ一夏さんは出てこない予定。

ちなみに身体能力的にはおぜう 千冬姉。

吸血鬼に対して>じゃなくて を付けさせる千冬姉は本当に人間か・  
・・?

今回も基本おぜうさま視点。

「何ここ……こんなメカメカしいところ来た事ないんだけど……」

私がいる部屋はなんかもう……メカメカしいとしか言えないような場所。河童の巣窟にもあるかどうか。

「ここはISの出撃ピットだ。これからお前はISを展開、このアリーナで試験官と戦ってもらう。それなりに戦うことができれば合格だ。勝つ必要はない。」

「勝つ必要はない？ふざけたことを言うわね千冬。」

私の一言にどういうことだ？とも言いたそうな顔をする千冬、私はさらに続ける。

「相手は何であろうと潰し、決り、滅するのがスカーレット流よ。全ての戦いにおいて私は楽しみ、そして勝つ。こっちは私の信条。」

「……そうか。ではISを展開しろ」

「いらないわ」

「………は？」

「あんな無粋な鎧はいらなと言ったの。別にあんなものがなくても飛べるし。私が屋外で戦うには日傘一本あれば十分よ」

「……待て、今何と言った？【ISが無くて飛べる】だと？」

信じられないという顔の千冬。そっぴや生身で飛んでるような場面は書いてなかったわね……

「私のいたところじゃあ強い連中は大体飛べるわ。人間だろうと、ね。」

「……一体何者、いや【何】だお前は。」

「さっきも言ったでしょう。普通のお嬢様よ。」

「……自信があるのはわかった。しかしこれはISの試験だ。ISを使わねば試験にもならない。」

「というわけでISを展開しろ。」

「……」

「どうした、早くしろ。」

突然黙り込んだ私を怪しんだか千冬が少しだけ声を荒げる。

そんなことは関係ない。もっと重大な件が一つある。

それは

「ねえ千冬。ISの展開って、どうやんの？」

「……はあ？」

ピット内に千冬の気の抜けた声が響いた。

「……というわけだ、わかったか？」

急遽展開の仕方を教えられた私は、千冬の言う【鎧を纏う感覚】を頼りにIS、私の髪飾りに意識を集中させる。すると突如、私の体が光、一瞬で消える。

「なんだこれは……IS、か？」

私は、何故か腋巫女服を身にまとっていた。

らのべの表紙で見たなんかゴテゴテしたものでなく、ただの腋巫

女服。

どういうことなの・・・

「ISの反応は出している・・・つまりそれがお前のISか、レミア。」

「みたいね。私が知っているISっぱさは0だけど」

「私もそれがISだとは思えんが反応を出しているということとはISだ。試験を開始するからさっさと出撃しろ。」

「はいはい、わかったわよ・・・」

千冬に急かされ小さい二つの足場に足を乗せる。

「試験官は山田真耶先生。機体はラファール・リヴァイヴだ。自分の武装は自分で確認しろ。出るはずだ。」

突然私の目前に現れる複数の板。

絵と文字がだらだらと書いてある中、私はひとつの武器を見た。

全距離対応高出力エネルギー投擲槍【スピア・ザ・グングニル】

それは紛れも無い、私の愛用の妖力槍、グングニルだ。

これさえあれば生半可な妖怪には負ける気はしない。実際無くても負ける気はしない。

「レミア・スカーレット。行くわよ！」

私の掛け声とともに足を乗せている足場が急速に前に進み私を引っ張る。

崖に差し掛かると私を放り投げた。とりあえず必死に体勢を立て直し、空を飛ぶ。

・・・あれ、日光が大丈夫だ・・・

「よし。では試験を開始する。山田先生、頼む。」

「は、はい！では、よろしくお願いします！」

別のピットから出てくる機体。挿絵で見たことがある。打鉄うちがねだっけ。  
・ラファール・リヴァイヴだっけ？

「山田先生つつたっけ？一ついい？」

「あ、はい。なんでしよう？」

「そのISだっけ？それをぶっ壊すつもりでいてもいいのよね？」

「いいわけがあるか馬鹿者！」

「とは言っても、今使えそうな武装がえらく高出力なのしかないんだけど。」

「・・・とりあえず全力でやれ。山田先生、嫌な予感がするから気をつける。では試験開始！」

千冬の一言で試験とやらが始まり、山田先生が手に・・・何あれ？何かを持って私に弾幕を向ける。

「兎の弾幕・・・の割りには早いし弾も小さい・・・」

少し横に移動すれば外れる自機狙い。

少し身を捻り弾を避ける。

「何だ、こんなも・・・ええ！？」

バリア貫通 シールドダメージ16 物理的損害 無 戦闘  
影響 無 残エネルギー584

今チヨン避けのグレイズ狙いで避けた。現に当たっていない。なにエネルギーは削られている。  
周囲にシールドがあつてそれに当たつたつて事？  
だつたら・・・

「シールドを最大限に収縮。私の体を覆うぐらいよ。」

### シールド収縮

よし、これでグレイズもできる。

そして再度迫る自機狙いの正確な弾幕。

同じ要領で避ける。ダメージは無い。私に当たらなければ大丈夫、  
つてことね。

「あの手に持つものが弾幕の発生源。使えるのはグングニルのみ・・・」

あちらは延々と手に持つもので弾幕を張るが、私は弾幕をはれるよ  
うなものを持っていない。

私自身から弾幕を張ることもできない。

「さて・・・一か八か！神槍【スピア・ザ・グングニル】！」

とりあえず私にある武装はグングニルのみ。宣言してグングニルを  
生成。あとはいつ投げるか・・・

「グングニルに追尾なんてものはないし・・・せめてミゼラブルフ  
ェイトがあれば・・・ええいままよ！」



思いっきりグングニルを振りかぶり、相手に狙いをつけてぶん投げる。

グングニルは相手の弾幕を掻き消しながら  
山田先生をISごと飲み込んだ。

「……………スペルブレイク。」

一応決め台詞。相手のスペルカードを破ったならこれが礼儀……  
だと思ってる。

「おいレミリア！誰がISを破壊しろといった！山田先生を回収後  
ピットへ戻れ！」

「とは言っても、これしか見つからなかったんだけどね……………」

地上には何やら色っぽい服装（ですらないわよね）の山田先生とや  
らが気絶していた。

とりあえず拾って私が出たピットに

「……………どれだっけ、私が出たの」

「ハア……………お前の真正面のピットだ。」

「了解。」

「この馬鹿者が……！」

「戻ってきて最初にかけられる言葉が馬鹿者ってどついつことよ。」

私がピットに戻ると、物凄く不機嫌そうな千冬が仁王立ちしていた。

怖い。

「今解析したが、山田先生のISダメージレベルはB！集中修理しなければ使えないほどのダメージだ！必要以上の故意の攻撃は規定で禁止されていると教えただろうが！」

「とは言ってもねえ。私がやったのはグングニル一発よ。」

「何……？一撃でシールドエネルギーや絶対防御を消し去り、ダメージレベルBまで破壊した、ということか？」

「絶対防御とかダメージレベルとかは知らないけどそうなるわ。」

「ハア……まあ、一応試験官撃破ということで合格だ。」

よかつたな、山田君が手加減してくれていて。」

「まったく、そんなのいらなかったわよ。」

「そうか。で、いつまでISを起動しているつもりだ？」

「外し方がわからないのよ」

「……ハア」

何度目かわからない千冬のため息が響いた。

Stage 1 くあんなの着てたらスマートに動く事もできないわ。時代は巫女

山田先生の武装ってアニメだとライフルとグレネードだけだったよ  
うな・・・違ったかな？

ともかく、大体が自機狙いなのでチョン避けでおk。

次にはおぜうさまのISSの説明予定。

さうて、武装どうしよう・・・

設定資料集その1 ～おぜうさまのIS～（前書き）

今回はおぜうさまのIS説明。

え？IS成分0じゃないかって？

フルスキン  
全身装甲があるなら装甲無ノースキンがあったっていいじゃない、ISだもの。

・・・すいまえんでした；；

## 設定資料集その1 ～おせうさまのISS～

ISS名：幻想の巫女（イマジン・オブ・オラクル）

搭乗者名：レミリア・スカーレット

コア：内蔵型陰陽玉

待機形状：一对の髪飾り（霊夢の元愛用品）

展開形状：腋巫女服。

初期武装（プリセット）

全距離対応高出力エネルギー投擲槍【スピア・ザ・グングニル】  
レミリアのスペルカードからの派生武装。

いくら近くてもいくら遠くても何故か同じタイミング（一瞬）で  
着弾する謎の槍。

振りかぶるのに少し時間がかかるためそのときに止めなければほぼ  
必中。

威力は直撃すればエネルギー6000になる上悪くてダメージレ  
ベルC。良くてもBは免れない。

ただ燃費は頗る悪く一発で200は使う。

多種類対応防御型ビット【賢者の石】\*7

水晶型のビットを七つ展開する。七つ合わせて虹色。

レミリアの親友、パチュリーのスペルカードからの派生武装。本来  
は5つだが七曜の魔女に準えて七つ存在する。

全てのビットが個別に防御できるものが違っている。

実弾、エネルギー弾、打撃、斬撃、エネルギー斬撃、爆発、単一能力の七つ。

対応するのは赤、青、黄、緑、橙、藍、紫。

それぞれ対応する攻撃に関しては絶対とも言える防御性能があるが、対応していない場合素通りする。

使用エネルギーも少なく零落白夜ぐらいでしか破壊できない（紫はさらに無効化されるが）ため、展開し得である。だが扱うには圧倒的な技術が必要。

しかしレミアは防御を基本的に考えないため賢者の石の出番は必然的に少なくなる。

遠距離対応砲撃型ビット【スターボウブレイク】

レミアの妹、フランドールのスペルカードからの派生武装。

背後に二つのビットを射出。レミアの左右の後ろに常駐し砲撃を放つ。

多少ホーミングするがミサイル程度。つまりは打ち落とせないミサイルを発射するビット。

燃費はとっても悪い。

特殊兵装【ザ・ワールド】

レミアのメイド、十六夜咲夜のスペルカードからの派生武装。

時間を止めることができる。その間動けるのはレミアのみ。

時間そのものが止まるため喰らうと何が起きたかもわからずに負けることになる。

無防備な状態で3秒以上のものを発動されるとグングニルが確定する。

時間は1〜10秒まで止めることができる。（一秒単位で指定可能）

燃費は恐ろしすぎるほど悪い。1秒につき50のエネルギーを消費するため、最大（10秒）で500消費する。

燃費も悪い上に発動に3秒必要のためぶっちゃけ浪漫武装。

拡張装備（リコライザ）

中距離対応エネルギー砲【夢想封印】

レミリアの恋人（レミリア談）、博麗霊夢のスペルカードからの派生武装。

周囲に相手を追尾する八つのエネルギー弾を展開後、纏めて撃ち出す。

八つあるが別に標的を分けることはできない。

スターボウブレイクより追尾性能は高いが威力は微妙。燃費はスターボウブレイクに比べればいい方。

単一能力：無し

特殊能力：射撃をかなり当てにくくなる程度の能力

本機における単一能力のようなもの。

原理は不明だがこの機体に射撃を直撃させるとは何故か非常に難しい。

打撃や斬撃なら普通に当たるが、射撃が当たる場所はレミリアの心臓の部分しかない。

このため生半可な射撃機体に対しては圧倒的なアドバンテージがある。

が、レミリア型に薄らシールドは張られているため少しずつだがシールドダメージはある。

レミリア・スカーレットの専用機。どこからどうみても腋巫女服。ISのような装甲は一切無く、防御を度外視、回避を最優先とされている。

また、服そのもののためISスーツを必要としない。

高出力エネルギー武器しかないと燃費が頗る悪い。迂闊な攻撃は自滅の元。

ザ・ワールドや賢者の石など技術が必要な武装からグングニル、夢想封印等シンプルな武装まで幅広い。

が、やっぱり燃費は悪い。

しかも殆どが射撃武装の為、使わずに近接戦闘することの方が多いかもしれない。

近接の際は自前の爪を使う。

まだ拡張領域はあるようだが……………



## 設定資料集その1 ～おぜうさまのISS～（後書き）

今回はおぜうさまのISS説明。

若干チートすぎたかな・・・？でも燃費酷いしなあ・・・

賢者の石は使いこなせばチートですがISSでは基本的に防御は甘えなので防げれば運が良い方、とおぜうさまは考えています。というか射撃は避ければいいんですね。

**S t a g e 2** 織斑一夏。あの店主みたいな優男ね。まああの店主に比べれば

ついに原作介入。あれ、こっちが本当のS t a g e 1じゃね？

そしておぜうさまの一夏サポ開始。

作者がシャルロット党员+おぜうさま介入タイミングの問題上幕の出番がほぼありません。

あしからず。

そして今回はALL一夏視点。

Stage 2 織斑一夏。あの店主みたいな優男ね。まああの店主に比べれば

インフィニット・ストラトスは女性で適正のある人が動かすことができない妙な欠陥を持つのだが、それを差し引いてなお圧倒的な性能を誇る。

男女間で戦争が起これば男は三日と持たないとさえ言われるほどだ。なのでもし、男でISを使える人間がいたりすれば大騒ぎになるだろう。

それはある種男の希望共言えるのだから。

「これは………想像以上に………」

そしてIS学園に男が入れたりしたら、それは完全にハーレムと言えるだろう。事実そういつている奴もいる。

だが、考えてほしい。

周りが女のみということとは、頼れる、気の置けるのは自分のみということだ。

そしてISが普及して十数年。男をロクに知らずにIS学園に通う女子も多いだろう。

そんな中に男を入れてみる。餌を求める鯉かピラニアの如く群がるぞ。

……ここまで言うておいてなんだが、結論を言えばこういうことになる。

「キツいな………」

ハーレムって、そこまでいいもんでもない。



(そ、そうだ！ 篤………)

俺の右側にいる幼馴染、篠ノ之篤にアイコンタクトを送る。気づいてくれ……！

「……………」

視線に気づかれたと思ったら視線そらされました。

それが六年ぶりに再開する幼馴染に対する態度かよ……！？ 俺嫌われてるよな……きつと。

「……君、織斑一夏君！」

「あ、は、はい！？」

突然呼ばれ、勢いで立ち上がる。

周りからクスクスと笑い声が聞こえる。あーもういい晒し者だよチキショウ。

「あの、大声だしちゃってごめんね。でも【あ】から始まって今【お】なんだよね。じ、自己紹介してくれるかな？ だめかな？」

俺の驚きの声に対して突然平謝りしだす先生。

正直言つて罪悪感抜群……。

「大丈夫です、ちゃんとやりますから。……………えー、織斑一夏です。よろしくお願いします。」

周囲から期待の視線を感じる。『え、それで終わりじゃないよね！？』といわんばかりの視線が。

「あ……えー……以上です！」

渾身の声で言う。が、直後教室のほぼ全員が（椅子に座っているのに）ずっこける。

あれ、俺なんかまずい事言った？

「あれ！？ダメでした！？であう!?」

突如俺の頭に物凄い衝撃が走る。こっ、殴られたような……

「つてえく……!?げえ！本多忠勝！」

再度俺の頭に鉄拳炸裂。うおおお……

「誰が戦場で一度も傷を負う事がなかった戦国武将だ馬鹿者。」

そう俺にお叱りを飛ばすのは……え？

「織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ山田君。クラスへの会議を押し付けてしまってますまなかったな。」

そこにいたのは世界最強の俺の姉、織斑千冬だった。

職業不詳で月1・2回しか帰ってこなかった俺の姉が、何だっこんなところになんか？

「諸君。私が担任の織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物にするの

が仕事だ。」

「「「「「きゃあああああああああ!!!」「」「」「」

突然、教室全体からの大喝采。

黄色い歓声つて真後ろから来るとキツイ・・・鼓膜が死ぬ・・・!

「千冬さま!本物の千冬さまよ!」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです!北九州から!」

「私、お姉さまのためなら死ねます!」

最後なんか危ない発言があっただけど気のせいだ。そう思いたい。

「よくもまあ毎年これだけ馬鹿者が集まるものだ。私のクラスにだけ集中させているのか?」

面倒臭そうに頭を抱える千冬姉。その気持ちは察せ無いけどな。

「お姉さま!もっと叱って罵ってえ!」

「でも時にはやさしくしてえ!そして付け上がらないように調教して!!」

訂正。危ない発言ばかりだった。

女子の人気者つてこわい。色々と。

「・・・で、挨拶も満足にできないのかお前は」

突然俺に拳を構える千冬姉。ちよ、怖い怖い!

「いや、千冬ね」

ガツ（千冬姉が俺の頭を掴む音）

ガン！（千冬姉が俺の頭を机にたたきつける音）

「学校では織斑先生だ」

「・・・はい、織斑先生」

「ねえ、まさか織斑君ってあの千冬さまの弟？」

「じゃあ、世界で唯一男でISを使えるってのもそれが関係してるのかな？」

周りから噂話つばいのが聞こえる。そりゃまそうだろうな。

あの世界最強の織斑千冬の弟がこんなところにいりゃあ噂にもなる。それぐらいは自覚している。

「静かに！諸君等にはこれからISの基礎知識を半年で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいな、良いなら返事をしろ。良くななくても返事をしろ。私の指示には全て返事をしろ！」

「・・・はい！！！！！！！！！！」

千冬姉の一言で静まり、一瞬で統率の取れた返事を返すクラスメイ卜達。

俺は未だ、目の前の千冬姉に呆然とするしかなかった。

その後一つ授業を挟み、休み時間。

周りからは奇異の視線とかすかに聞こえる小話。

居心地が悪いつてレベルじゃないぜ・・・

誰かこの状態から助けてくれ・・・



「織斑一夏。少しいいかしら？」  
「ん……？」

突然声がかけられて、向くと小学生みたいな小さな子がいた。制服は着てるからクラスメートなんだろう。

「私はレミア・スカーレット。少し話があるのだけどいい？」  
「ああ、いいぜ。」

俺は二つ返事で答え、その子、レミア・スカーレットについていった。

周りの視線が物凄く痛かったが慣れないと……いけないんだろうなあ。

そうして着いた場所は校舎の屋上。

何故かずっと目の前にいたレミアさんは日傘を差していた。いつものまに……

「体質的に日光が苦手なのよ。ISを起動していれば話は別だけど。」

「あ、そう……」  
「さて本題よ。世界で唯一ISを使える男性、織斑一夏。貴方はこの時代をどう思う？」

突然雰囲気が変わる。何か、威圧されているような……

「どう思う……って、どういうことだよ？」

「IS、インフィニット・ストラトスによって世界は大きく歪めら

れてしまった。それは偶然か、必然か、運命か。あなたはどれだと思っ？」

「そりゃ・・・必然とかそういうもんなんだろ？東さんのことだし、運命だったんだろ。」

「そう。篠ノ之束。一人のイレギュラーにより大幅に運命は歪められた。多くの人間は人生を崩されることとなってしまった。そして多くの女性は地位が高騰。さて、損をした人間と得をした人間、どっちが多いと思う？」

「世界の男女比は大体6：4だろ？てことは男、つまり損をした人間のほうが多いってことだよな？」

「そうね。世界情勢・・・いえ、男女情勢が反転したことは世界と共にその運命を大きく歪める。私はそれが気に食わないよ。」

「運命が歪められるのが気に食わない？君、一体何者なんだ？」

「まあもう少し聞きなさい。」

しかし、【ISは女性にしか使えない】という前提条件は貴方によって崩された。それは男性にとって、そして運命にとっての希望よ。私は貴方に一つの運命を見た。詳しくは話せないけど、つまり貴方は変革者。このISの時代を変革させる者よ。」

「変革者・・・？俺が？俺は千冬姉みたいになんかすげえ才能とかはないぞ？」

「才能？いいえ。運命よ。貴方は変革者になる運命。貴方が敵対するのはこの時代。運命の申し子である私が保証するのよ。少しは自覚しなさいな。」

「運命の申し子だとか、変革者とか・・・もうわけわかんねえ！結局君は何なんだよ！？」

「私・・・？ククク、協力者よ。変革者。」

「協力者・・・？」

「そう。私は貴方に協力するためにいるの。この女尊男卑の時代、ISの時代を終わらせる協力をね。」

「ISの時代が終わる！？どうやって！？」

「んなこと私を知るわけないでしょ。変革するのは貴方なんだから。」  
「そんな無茶苦茶な・・・大体、女尊男卑の時代を何で女の子の君が終わらせようとするんだ？」

「私はそんな時代風景には興味ないわ。私は私の興味のままに生きることが信条だからね。」

「それ、15歳の考えることじゃ」

キーンコーンカーンコーン。

突然のチャイム。つまりは休み時間が終わったということ。

「とにかく今は強くなることよ変革者。龍は伏す時。<sup>いちか</sup>つまりはそういうこと。じゃあ先に戻ってるわ。」

ククク・・・と薄ら笑いを浮かべながら彼女は教室に戻っていった。

「・・・あーもう、意味がわからん！」

俺の頭では一切理解できなかつたが今わかることは急がなければ千冬姉の鉄拳を喰らうこと。

俺も続いて教室に戻っていった。

余談だが急いで走ったため間に合ったが走っているところを千冬姉に見られたため結局鉄拳は喰らったのだった。

そして何故か横からの筈の視線が物凄く痛かった。何故だ・・・

Stage 2 織斑一夏。あの店主みたいな優男ね。まああの店主に比べれば

篠ノ之博士、お許してください！（挨拶）

今回からやっと学園生活。

ちなみにおぜうさまは霊夢にボコられて改心（？）したため大分丸  
いです。

えーと、次はラッキースケベか……



Stage 3 ーあーいるいる。ああいう偉そうな奴。私みたいに実力が伴えば

一夏にそれなりに挨拶をして、その後の時間。  
ISの基礎理論らしいけど、まず問題が一つ。

「意味・・・わかんない・・・」

教科書つぼいには絶対防御だとかなんだとか意味わからない言葉  
が延々と陳列されている。

辛うじて日本語。多分、きつと。

「・・・・・・・・」

ふと一夏を見ていると、後ろからでも苦戦しているのがわかる。  
首筋に冷や汗あるし。

「さて、織斑君、何かありますか？」

先生からの名指しの要求。頑張れ一夏。

「あ、えつと・・・・・・・・」

「何かあればすぐ質問してくださいね。なんたって私は先生ですか  
らー！」

「・・・・・・・・先生。」

観念したかの如く手を上げる一夏。

「はい、織村君！」

待っていましたといわんばかりに満面の笑みを浮かべる先生。

「殆ど全部わかりません……………！」

で、しょうね。

「あ、えっと……………他にわからない人はいませんかあ〜!?」

さすがに予想外だったのか困惑する先生。

別に嘘をついても得は無いので一応私も手を挙げておく。

「えーっと…………スカーレットさんの他にわからない人は…………い  
ませんね。」

「織村。スカーレット。入学前の参考書は読んだか？」

「えーっと、あの分厚い奴ですか？」

「そつだ。必読と書いてあっただろう。」

「えー、間違えて棄てまっしてえ!?!」

出席簿が一夏に炸裂。まだ面なのが幸いか。

「それでスカーレット。お前はどうした」

「大体意味がわからなかつたんで流し読みしただけ。中身は覚えて  
ない。」

「…………ハア。織斑、あとで再発行してやる。一週間以内で  
覚える。いいな」

「ええいや、一週間あの厚さは

「やれと言っている」

「…………はい。」

必死の反論も出来ずに言い負かされる一夏。

姉には本当に頭が上がらないのね。物理的にも。

休み時間。私は協力者として出来る限り一夏の傍にすることにした。

「災難ね一夏。」

「ああ、全くだ。あの厚さを一週間って・・・」

「まあ流し読みして面白そうなところを覚えればいいんだし。戦いなんて結局はセンスよセンス。」

「レミリアのその思考が俺には理解できない・・・」

「ちよつとよろしくて?」

「よろしくないわ。それで一夏。決心はついた?」

「決心も何も、意味がわからん。何だよ運命の申し子って。」

「その言葉の通りなのだから仕方が無いわ。運命の悪魔でもいいわよ?」

「大して変わってないじゃないか・・・」

「ちよつとよろしくて!?!」

「よろしくないわ。大分変わるわよ?申し子は力を与えられた者。悪魔は力を持つ者だもの。」

「その違いがどう関係するかは知らないけどな」

「まあ追々わかるわよ。【強制的】にね。」

「そうですね・・・」

「ちよつとよろしくて!?!?!」



「よろしくないつつつてんでしょうが聴力無いかお前は！」

さすがに三度も同じ声をかけられるとウザくなってきたので一応怒鳴っておく。

さつきから声をかけてきていたのは金髪ツインドリルの見るからに偉そうな小娘。

「まあ！何ですのそのお返事！わたくしに話しかけられた【だけ】でも光栄なのですから、

それ相応の態度というものがあるのではなくって？」

「よろしくないって何度も言ってるのに無理やり会話に入ろうとする奴に対する態度ってのは

これでいいのよ。私はそう思ってる。」

「いや、それに俺君の事知らないし。相応って言っても……」

「わたくしのことを知らない！？セシリア・オルコットを！？」

イギリスの代表候補生にして入試主席のこのわたくしを！？」

「セルビア・モンテネグロとか知らないからさっさとあっち行きなさい。私ら今ちよつとした会議中なんだから」

「セシリア・オルコットですわ！」

「あーはいはい。エミリア・モルモットね。」

「ぬぬぬぬぬ……！」

恨めしそうに私を睨むセシリア。こういうお嬢様系は適当にあしらうが吉。霊夢にそうやられたから間違いない。

「代表候補生……ってことは、イギリスの代表になるのか？」

「ハッ、そ、そうですね！つまりこのわたくしは専用機持ちのエリート！  
そんなわたくしとクラスを同じくするだけでもまさに奇跡！幸運な  
のですわよ！？」

その現実をもう少し理解してくださる！？」

「・・・そうか、それは、ラッキーだ。」

一夏ナイス棒読み。まあ呆けてるだけなんでしょうけど。

「わたくしを馬鹿にしていますの？」

「お前が幸運だつて言ったんじゃないか。」

「まあ口が達者な連中はえてして腕はそれほどでもないし。

それに大体エリートって奴は物語じゃあ基本的に口ほどでも無いわ。  
言わば雑魚。一夏、あまり相手にすると付け上がるから」

「んなつ・・・このわたくしが雑魚ですつてえ！？」

貴女！さつきから何ですの！一体どこのどなたか教えてくださる！  
？」

「レミリア・スカーレット。専用機持ち。以上」

「以上つて・・・所属は何処の国ですの！？」

「さて、自分で考えなさい。で、何の用？雑魚さん。」

びっっ、という音が聞こえた。恐らくキレたわねこいつ。

「このわたくしに・・・入試主席のこのわたくしを二度も雑魚と・・・  
・・・！！」

入試試験で唯一教官を倒したこのわたくしを・・・！！」

「あ、教官なら俺も倒したぞ。」

「ああ、私も。」

「……………へ？」

突然素つ頓狂な声を出すセシリア。どこまで自信過剰なんだか。

「何かいきなり突っ込んできたのを避けたら壁に当たって動かなくなった。レミリアは？」

「一発で教官とやらのISをぶっ壊したわ。千冬がだめーじれべるBって言うってたわね。」

「わ、わたくしだけと聞きましたが……」

「ああ、私の試験は特例で急遽行なわれたから多分そんな報告されてないんですよ。」

「つまり、【通常例で尚且つ女子】の中で一人だけ、ってことだな？」

「あ……貴方方も教官を倒したって言うの!？」

突然声を荒げるセシリア。あーあーうるさいうるさい。

「まあまあ、落ち着けよ。」

「これが落ち着いていらね」

キンコーンカンコーン。

毎度毎度絶妙なタイミングで鳴るわね、このチャイム。

「くつ……話の続きはまた改めて！よろしいですわね！」

「よろしくないわ」

時間をすっ飛ばして放課後。

私は一夏と共に寮に向かう途中・・・なんだけど・・・

「一夏、後ろの愚民共はなんとかならないの・・・？」

「そんなこと言われても・・・一応全寮制だから全員寮に行くんだしさ・・・」

「ねえ、あの子結局何者なの？」

「レミリア・スカーレットなんて聞いたことないわよ？」

「でも専用機持ちつてことは政府から援助を受けているってことよね。」

「それに織斑君とあんな仲良さそうに・・・！暫くネタには困らないわ・・・！」

後ろからひそひそと小話が若干鬱陶しい。しかも最後何ネタって。

「一夏、一夏の部屋は何番だっけ？」

「え〜と・・・1025番だな。レミリアは？」

「1027。ちょうど近い部屋でよかったわね。」

「まあ、そうだな。しかし寮つつつても二人部屋だろ？女子の誰かと鉢合わせすることは確実なんだし・・・」

「初心ねえ。少しすれば女性耐性も付くでしょ。それと同時にあの愚民共も慣れるでしょうさ。」

「だといいけど・・・」

一夏と別れ（まあ一部屋跨ぐ程度なんだけど）、自分の部屋に入る。さっつて・・・

「うわぁ……………」

思わず声が出てしまうほどだった。  
何がおかしいって、片方だけ天蓋ベッドだったこと。  
片方だけかよ。つか寮でしょこ。何で片方だけ天蓋付きなの、私  
が占領してやるうか。

「あら、来ましたのね。わたくしと部屋を同じくする幸運な方はど  
な……………」

…その部屋にいたのは、まさかのセシリアだった。

「な、ななな何で貴女がこの部屋なんですか！？」

「知らないわよそんなの。部屋わけした奴に聞けば？」

聞く限りには、許可されたインテリア等は部屋に入れてもいいいらし  
い。

あー、天蓋いいな……………」

「まさかこんな雑魚と同室とは……………」

「ぬぐ……………」まだ雑魚扱いますのね……………」

「雑魚を雑魚と呼んで何か問題でも？」

若干涙目になりながらも私に噛み付こうとするセシリア。そして軽  
く受け流す私。

ああ、何だろっこの既視感。

「……………」

「な、何ですか？」

一瞬感じた不快感。

そう、あのスキマの中に飛び込んだ時のような……

「はろろくん。」

「……………」

突然私の目の前に現れた女性。

それは私をこんな場所に叩き落とした張本人、大妖怪八雲紫やくも ゆかり、  
あまりの突然の登場にセシリアと私、絶句。

「あら、折角様子を見に来たのにつれないわねお嬢さん。」

「ったく……何の用よ紫。私をこんなところに叩き落しておいて

「そりゃあ、こんなところに行きたいと言ったのは貴女ですもの」

「まあそうだけどさ……ん、どうしたのセルビア。」

「う、うううう浮いてる……ISも使っていないのに……!？」

虚ろな目でおびえるように言うセシリア。

恐らくは紫の妖気に本能的に怯えているのでしょう。

「ああ、自己紹介していませんでしたわね。私、八雲紫と申します。  
以後お見知りおきを。」

「せ、セシリア・オルコットですわ……………」

「んで紫？本題は何よ」

「本題も何も、様子を見に来ただけつつたでしょう。」

「うさんくさ……………」

「ああ、それともう一つ。この世界に、【もう一人別の外の世界からこの世界に迷い込んでいる】わ。私の遠い親戚のだけどね。」

「・・・あなたの親戚ねえ。なら大丈夫じゃないの？」

「それがそうでもないのよ。親戚つつつてもまだ人間だからね。ちよつと間違えば死んじゃってタイムパラドックスが起こり私がいなくなっちゃうわ。」

「・・・まさか」

「ついでに捜しといて」

「ふざけんなババア！私をこんなところに叩き落して尚且つ帰る目処も無いのにさらに追加するっての!？」

「帰る目処もなにも、変革するまで帰る気など無いのでしょうか？」

「・・・チツ」

何もかも見透かされている。私の数倍は生きているであろうこのババア、胡散の塊である。本当に。

「わかったわよ。ついでに目を凝らしておく。で名前は？」

「さあ？私も知らない。とりあえず私に似た外見だとは言っておくわ。」

「・・・さいですか。だつたらさつさと帰れ。」

「はいはい。ああそうそう。着替えや輸血パックは貴女の鞆に入れておいたわ。何かあれば呼んでね。」

手を振りながらスキマで消えて行く紫。本当に脈絡もなく現れる奴よ。

「・・・で、いつまで怯えてるのかしらセシリア？」

ベッドの布団に潜って震えているセシリアに声をかけると、一度ビクツと大きく反応した後、セシリアが出てくる。

「れ、レミリアさん、今の方は一体何者なんですの・・・!？」

「あれは八雲紫。胡散臭いことに定評のあるババアよ。」

「それに、あの方を見ると体の震えが止まらなくなつて・・・！」

「それはあのババアの年の功の所為よ。年をとると妙な威圧感を覚えるのね。」

とりあえずセシリアは適当に言いくるめる。

こんな世界で妖怪が信じられるわけもないし、ね。

「さて、私は寝とくわ。邪魔するとぶっ殺すからそのつもりで。」

一応釘を刺しておき、天蓋の無い普通のベッドに横になる。

どうやら昼に動きすぎたようで一気に眠気に襲われ、私意識を手放した。







一つ、吸血鬼としての必需品（着替え・輸血パック）は定期的に鞆の中に入れておくということ。

二つ、この世界に迷い込んだ紫の遠い親戚を探し出すということ。

前者はまあありがたいけど後者が面倒というレベルではない。難易度ルナティック。

ぶっちゃけガン無視してもいいんだけどあの紫のこと。『嫌ならやめてもいいんだけどお〜？』とか物凄いいい笑顔で言い出すに違いない。

とりあえず私は輸血パックを取り出し、部屋を出る。問題は一夏がどこにいるのかけど……部屋にはいないでしょうね。食堂つてとこに行きましょう。

……学校中にある案内がこれほど役に立つものとは思わなかったわ。

広い食堂では色々な生徒が食事を取っていた。

少し捜せば、すぐに見つかった。

さすがに女子ばかりの中で一人だけ男子というのは目立つようだ。

「御機嫌よう一夏。」

「ああ、おはようレミリア。」

「……一夏、随分と親しいようだが何者だ」

「今一夏がいったでしょ、レミリアよ。ただのお嬢様。」

「あはは……レミリア、こっちは俺の幼馴染の筈」名前と呼ぶな

「……篠ノ之、さんです。」

意気揚々と紹介しようとしたが途中に怒鳴られうなだれる一夏。  
可哀想に。

「あらら、嫌われてるわね一夏。幼馴染だというのに名前を呼ぶことすら許されないなんて。」

「みただいな……俺に味方はいないのか……」

「あら、私がいるけど?」

「そうだな……ありがとうレミリア……」

「……」

「……」

篠ノ之さんが私をジト目で睨みつける。どうやら一夏を取られたのが気に食わないみたいだけど……  
そんな態度じゃあ一夏は気づかないわね。当分は。

「そういえばレミリア、お前飯はどうするんだ?」

「私は専らこれよこれ。」

私は手に持つ輸血パック（B型）を見せる。大好物。

「輸血パック……?」

「B型。」

「いやそういう問題じゃなくて。それだけでいいのか?」

「これ1パックだと一食には多すぎるわ。これで一日持つし。」

「いやそうじゃないだろ!?ちゃんと食わないと身体壊すぞ!」

「大丈夫よ、ちゃんと飲んでるから。」

「いや……ああ、もういい。」

「納得してくれてなによりよ。」

「あのー……織斑君。隣、いいかな？」  
「ん？ああ、別にいいけど。」

談笑していると横から話かけてくる三人の女生徒。一人猫っぽい気ぐるみを着ている。パジャマなのかあれ？

ちなみに位置はというと一夏の後ろに私、左隣に篠ノ之。そして右隣に三人追加。

「いいハーレムね一夏。人気者。」

「人気者つつつてもパンダみたいな物だろ？そこまでいいもんでもないっでえ！？」

突然跳び上がり、膝をさらに机にぶつけたみたいでうずくまる一夏。何、何がおきたの

「ふん……私は先に行く。」

ああ、こいつか……

「ああ。また後でな。」

「人気者は辛いわね。」

篠ノ之さんが席を立ったので空いた席に私が座ることになった。

持っている輸血パックは未だ1/5程度しか減っていない。つくづく小食よね、私も……

「織斑君って、篠ノ之さんと仲がいいの？」

「お、同じ部屋だつて聞いたけど……」

女子から一夏に声がかかる。



「やった、私まだチャンスあるかも！」

「これは・・・いい感じにインスピレーションが沸いたわ！」

「」「仕上がったら頂戴!!」「」

周りの妙な団結力に乾杯。

そして最後、嫌な予感しかしないこと言ってなかった？

漸く超音波が治まり、耳から手を離す。

その直後、一夏が女子の集団に囲まれていた。何時の間に。

「ねえねえ織斑君！親密な関係ってどういうこと!？」

「私はどう!？守備範囲内!？」

「詳しく聞かせて！例えば夜のこととか！」

「その場に居合わせたかつたな！」

一夏に質問が殺到。

私は間違ったことは言っていない。

変革のための味方は私だけ。唯一の味方は親密な関係と言える。何もおかしいところはないわ。

「やかましいぞ！何時まで食っている！食事は迅速に効率良く！常識ぐらい身につける小娘共が！」

突然千冬の声が響き、一夏に殺到する女生徒連中の動きが止まる。助かったわね、一夏。

「私は一年の寮長だ！遅刻したらグラウンド十周させるぞ！」

「じゃ、私は先に行ってるわ。また教室で。」

「これより、再来週行なわれるクラス対抗戦に参加する代表者を決める。

クラス代表者とは、対抗戦だけでなく生徒会の会議や委員会への出席、まあクラス長のようなものだ。

自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

クラス長ねえ……千里の道も一歩から。まずはこのクラスの女子連中を見返すのもよさそうなものだけだ。

「はい！織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

お、まさかの他薦。これはチャンスよー夏。

「え！？俺！？」

……あ、チャンスってわかってないのね。女子ばかりの中でさらに浮くのが嫌なんでしょうが……すでに面白いほど浮いてるから問題ないわね。

「他にはいないか？いないのなら無投票当選だぞ。」

さて、このまますんなり通ればいいけど……無理でしょうね。あの雑魚……じゃなくてエリート（笑）がいるし。

「ちょ、ちょっと待った！俺はそんなの「納得がいきませんわ！」ほら来た。



「そのような選出は認められません！男が代表だなんていい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

「うっさいわよ雑魚。エリート（失笑）は黙って一夏の踏み台になりなさいな。」

「だから！わたくしは雑魚でもありませんしエリート（失笑）でもありませんわ！生粋の超エリートですわよ！」

「んなことむきになって言うから（失笑）が付くのよ。」

「ぬぐ・・・大体！こんな文化としても後進的な国で暮らさなければいけないだけでわたくしにとっては耐え難い苦痛で・・・！」

「イギリスだつて大したお国自慢ないだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ。」

「ここにすることを強制するのは少なくともこの場にはいないから先進的（爆笑）な国に帰りなさい。まあ雑魚が代表候補生の国だから雑魚ぞろいでしょうけど。」

「ぬっ・・・！貴方方！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「今のお前にはこの言葉がとってもよく似合うわよ。【お前が言うな】」

一夏とセシリアがにらみ合い、少しの静寂。

ああいうプライドが高い奴が煽られて、しかもここは力が正義のある意味）世紀末。

ある道といえは・・・

「決闘ですわ！」

「ああいいぜ。その方が手っ取り早い。」

「あと！そのレミリアさんも決闘してもらいますわ！わたくしを侮辱した罪は償ってもらいますわ！」

「随分な余裕ね。二対一であんたをボコれっの？」

「ふん。いいですわよ？わたくしのような超エリートならばたかが初心者二人、何のことはありませんもの。」

「・・・じゃあ一夏、どっちからやる？」

「・・・俺からだ。クラス決定の戦いなら全力でやるしかないだろ。」

「え、いいの織斑君。実質ハンデ無しだよ？」

「男は女より強いのは昔の話だしさ、スカーレットさんにちょっとやってもらおうよ。」

・・・連中、私をハンデ扱いかい。

「男が一度言ったことを覆せるかよ。・・・俺からだ。ハンデはなくていい。」

「えー、それは舐めすぎだよ・・・」

「まあ上等じゃない？雑魚からハンデをもらうなど主人公としては二流よ。」

「いや、主人公つつわれてもさ・・・」

「わたくしをこれほどまでに侮辱するとは・・・！覚悟してくださいまし！コテンパンに叩きのめしてあげますわ！」

「ああ上等だ」

「まあ精々頑張りなさい雑魚さん。」

「話は決まったな。それでは勝負は次の月曜、第三アリーナで行なう。織斑、オルコット、スカーレット各名はそれぞれ準備をしておくように。」

千冬の一言で決まった決闘日時。さて、細工するのも馬鹿らしいし  
正面から叩き潰してほしいところだね。一夏には。

Stages くババア帰れ、輸血パックくれるのは素直に礼を言っが出てく

一日二回投稿キター!!!

しかも感想地味に増えてるー!

前回の前後書きがないのは何故かって?

面倒だったから! (キリッ

あ、今回もずっとおぜう視点。

あと今回ちょっとだけグロ注意。注意するほどでもないけどグロ注意。

Stages　くババア帰れ、輸血パックくれるのは素直に礼を言っが出てく

決闘の日時云々が決まり、次の時間……のはずなんだけど、  
どうやらまだあるらしい。

「さて織斑。お前のISだが準備まで時間がかかるぞ。」

「……へ？」

「予備の機体がない。だから学園で専用機を用意するそつだ。」

これね。私の記憶によれば来るのは白式。個人的趣味からすれば紅  
くてもいいと思うのだけれど……

「え、専用機！？一年のこの時期に？」

「つまりそれって、政府からの支援が出るってこと？」

「いいなあ〜私も専用機ほしいなあ〜！」

何かあるたびに騒ぐわねここの愚民連中は……

「専用機があるって、そんなに凄いことなのか？」

「さあね。少なくともこのクラスでは私と雑魚だけみたいだけ。」

「雑魚ではありませんわ！」

何時の間にか目の前いたセシリアが叫びだした。つか授業中じゃな  
かったんかい。

「アンペア・アンケート、黒板見えないからどきなさいって。無闇  
に飛び出す雑魚は蹴散らされる運命よ。」

「セシリア・オルコットですわ！！最早わざとでしょうー！」

「勿論よ」

「~~~~!!!!!!」

最早声も出ないほど怒り狂いだしたセシリア。正直面白い。

「で、何の用よ突然」

「はっ……そうそう！大体専用機持ちのわたくしが訓練機の相手と戦うなんてフェアじゃありませんものね。専用機が来てよかったですわね。これで安心して戦えるかもしれませんわ！」

「雑魚、宝の持ち腐れって言葉、知ってる？」

「だから雑魚ではありませんわ！それに宝の持ち腐れって何ですの！？わたくしが専用機を使うに値しないと！？」

「あなたの實力は知らないけど少なくとも馬鹿に力与えた所為で面倒なことになったのは確かね。イギリスは人材不足なのねえ。代表候補がこんなしかないなんて。」

「いや、レミリア。それ以上言うと俺にとばっちりが……」

「よろしいですわ！そこまでおっしゃるのならお望み通りいくらでも叩きのめしてあげますわ！その人をさっさと倒した後に！」

ビシイ！と効果音が付きそうなほどに一夏を指差すセシリア。もう数cm近かったら刺さってるわね。

しかしまあ、こんな挑発に乗るなんてあっけないといふかなんといつか。

パチエに話術教えられててよかったわ。

パチエは本当が頭が良いお方。たまに見当違いなこと言い出すけど。

「話は終わったかオルコット。ならさっさと席に着け。授業中だ。

では山田先生、授業を。」

千冬に突っ込まれいそいそと戻るセシリア。



「やっぱり、クラスメイト同士仲良くしたいもんな！な、お前もそう思うだろ？」

「そうね、少なくとも私はそう思うわ。」

「うわあ！？・・・レミリアか。驚かさないでくれよ。」

こっそりと移動し、一夏の隣から話しかければこのように面白いほど反応する。

何だかんだでハーレム楽しんでるのね、一夏って。

「驚かすとは酷いわね。こちらら日光が苦手だから室内でも日傘を差さなきゃならないというのに。」

「いや、それきつと関係ないから・・・それで。篝・・・じゃなくて、篠ノ之さんはどうするんだ？」

「・・・私はいい」

「そんなこと言うなって！ほら、立て立て！」

一夏が篠ノ之さんの手を取り、引き上げる。

これは甲斐性があるのかないのか微妙なところね。ほんとに。

「おい！私は行かないと！」

「なんだよ歩きたくないのか？・・・おんぶしてほしいのか？」

あー馬鹿、それは逆効果・・・

「離せと言っている！でえい！」

手を引っ張ってからの胴体への突進。直撃。

「つつあ、つてえ・・・」

「一夏、今のは擁護できないわ。ああいう年頃の女子は異性から触られるのを極端に嫌がるから。」

「そうなのか・・・すまなかつた篝。あと、腕を上げたな。」

「べ、別にそういうわけではない！それにお前が弱くなったのでは



ないか！？こんなものは剣術のおまけだ。」

「え〜と……」

「やっぱり私……」

「遠慮しておくね……」

三馬鹿、退場。

執着心弱いわね〜。まさに一夏パンダ扱い。

「あーあ。連中どつか言っちゃった。どうする一夏？」

「ん〜……」

少しだけ強く篠ノ之さんを睨む一夏。迫力ねえ。

「な、何だ！？何か言いたいことがあるのか？」

「第」

「私を名前で呼ぶなど「飯食いに行くぞ！」

再度手を取る一夏。懲りないなこいつ。

「お、おい！いい加減に「黙ってついてこい！」

そのまま一夏は教室を出て行ってしまった。

さて、私もついて行くとしましょ。面白そうだし。

食堂には長蛇の列が。うわぁ長い。

そしてやっぱりすぐに見つかる一夏。これは確かにすぐ人だからができるわ。

「酷いわね一夏。私を置き去りにするなんて。」

「あ、ゴメンレミリア……って、昼飯もその輸血パックな

のか？」

「そうよ。言ったでしょこれ1パックで一日持つって。」

「いや、少食すぎだろつつうか血だけかよつつうか……」

「席は取っておくから心配しないでいいわよ。じゃ。」

列から離れ、手ごころな席を捜す(だが窓側は全力で避ける)。

っと、見つけた見つけた。半円形ソファー付き。だが窓側……力  
ーテン閉めておこう。

「あーいたいた！レミリアー！」

「おい叫ぶな！目立つだろうが！」

場所を取って1、2分すると、一夏と篠ノ之さんがこちらに向って  
くるのが見えた。

残念だけど、一夏がいる時点で十分目立ってるわよ。

「ところで一夏。あの雑魚に啖呵切ったところまでは素晴らしかつ  
たけど、勝算はあるの？」

「え？あ……レミリアがいつも雑魚雑魚いつてたから、  
そこまで考えてなかった……」

「雑魚つつうのは私目線からよ。一夏からみれば……そうね、2  
ボスぐらいにはあるんじゃない？」

「位置づけはよくわからんが、つまりは強敵ってことだよ……  
……箒、レミリア。俺にISのことについて教えてくれないか？俺、  
何もできずにセシリアに負けちまうかもしれないし。」

「私はパス。頑張れしなのなのなののさん」

「のが五つ多い！ 無闇に挑発に便乗するからだ。自業自得だ。」

「私の所為かよ……」

「そこをなんとか頼むよ！な！」

手を合わせてまで頼み込む一夏。さすがに私は教えるのは得意じゃ



課後剣道場に行くぞ。」

「え、何で「わかったな?」……はい」

弱っ。

その後特に面白いこともなく、放課後。

あの雑魚も勉強は真面目にやるみたいだ。私?やるわけないじゃない。ALL聞き流しよ聞き流し。

一応今現在、剣道場にて一夏と篠ノ之さんが対戦してるみたい何だけれど……

「っはあ、はあ、はあ……」

結果は一夏の惨敗。しまった、こいつ体力がないぞ。

「どういうことだ。」

「いやどういふことって言われても……」

「どうしてそこまで弱くなっている!」

一夏と篠ノ之さんの痴話喧嘩開始。

犬……咲夜でも食わないような痴話喧嘩を開始されたら私は蚊帳の外。

暇を潰す必要があるんだけど……

「何でいるのよ、紫」

「いや、なんとなく。」

私の真横に紫が座っていた。

この神出鬼没ババアが・・・

「何の用よ今度は」

「いいええ？面白い介入をしているレミリアちゃんに【お姉さんから】のプレゼントをと思ってるね。」

「何がお姉さんからよ年齢考えなさいババア」

「・・・誰がババアですって？」

「てめえだよ年取りすぎて耳遠くなったか？」

「よく言っわねこのロリ吸血鬼。うっうっ　しゃくやっ」

「何捏造してるのババア。都合が悪いと捏造だなんて天狗かあんた。」

「必死に捏造みたいにケチつけなくてもいいわよ。事實は事實。受け止めなさいな。」

「あんたこそ事實受け止めなさいよ。数千年生きててケバい上に冬眠までするのにババアじゃないわけがないでしょう？」

「「・・・」

「「・・・よし」

「「・・・上等」

「「てめえぶち殺す！！」

並んで正座していた状態からの一瞬のクロスカウンター。

私の拳は紫の顔面を砕き、

紫の拳は私の喉を吹っ飛ばす。

「おいおい、どうした八雲様？狙いが甘いんじゃないのお？喉狙ったって意味ないでしょうがぁ。」

私の喉に空いた風穴はすぐに埋まる。

何か視界の隅に信じられない表情をしている一夏達が見えたような気がしたけど気にすることは無い。

「それを言うならそちらこそ腕が鈍ったんじゃない？全盛期の貴女なら頭ごと吹っ飛ばせるでしょうに。」

起き上がる紫の顔面はあっさり再生されているが血まみれ。紫愛用の大陸服も血で汚れている。

「一夏。篠ノ之さん。少し端によった方がいいわよ。」

「その見知らぬ方。あまり近寄らぬ方が身のためですわ。」

私達の一言で目が覚めたように端による一夏達。いい子いい子。

私と紫は剣道場中心に向かい合って立つ。

この時点で戦いは始まっている。ルール無用の死合だからだ。

「神槍【スピア・ザ・グングニル】」

「廃線【ぶらり廃車下車の旅】」

私がグングニルを形成している間に私の前後に開いた巨大なスキマ。ぶらり廃車下車の旅。

ただ単純なスペルカード。そう

ただ電車という巨大なものをぶつけるだけのスペルカードだ。

「でええええりゃあああああ！！！！」

グングニルを思い切り振りかぶり、来るものに狙いを定める。

そして見えた瞬間にブン投げる！！！！

見えた電車に真っ向からグングニルが直撃。  
ガリガリと電車を削っていくグングニル。

いくら削られても出てくる電車。どちらが先に消えるか。  
と思った矢先、電車が出なくなるのと、グングニルが消えるのはほぼ同時。

所謂相撃ち。

「・・・傷み分けて奴？」

「スペルカードでは双方無傷。続けたいところだけど・・・無理そうね。」

紫が一瞬見たのは一夏と篠ノ之さん。

どうやら篠ノ之さんは気絶しているようだ。軟弱ねえ。

一夏は気絶しないのがやつとだったみたい。脆弱ねえ。

「無理ってわかったのならさっさと残骸片付けて帰れ帰れ。あんたの親戚つてのはまだ見つかってないから。」

「それなら心配後無用よ。場所がわかったの。正確にはわかってないんだけどね。」

「よ。」

「・・・はい？何だって？」

「・・・では、御機嫌よう・・・。」

紫がスキマに消えて行くと同時に、電車の残骸もスキマに飲まれて行く。あいつにしては律儀。

「・・・さて。すまないわね騒がしくして。旧友が尋ねてきたもんだからつい熱くなっちゃって。」

「あ・・・うん、それは仕方ないよな・・・？」

「ふう。いい運動もしたし。私は先に寮に戻るわ。じゃ。」

「ああ、また明日・・・？」





Stage 5 くババア帰れ、輸血パックくれるのは素直に礼を言っが出てく

・・・やっちまったぜ

これ、ある意味R-18Gじゃない？ある意味。

まあ・・・大丈夫？じゃないか。

最後の一夏が妙に冷静だったのは思考が追いついてなかったから。

(レミリアが知らない人と喧嘩しだした その喧嘩が迫力ありすぎて簿が気絶した 電車まで出てきたかと思ったらレミリアがそれをぶっ壊した 何事もなかったかのように終わりレミリアが寮に帰っていった あれ？レミアIS起動してなかったような・・・)

一夏の思考の移り変わり。

誰がああ状況で思考が追いつくんだろう・・・

次回(やっと)セシリア戦。

ちなみに、おぜうさまは【弾幕】は張れないけど【黄昏系スペカ】は使えます。

つか電車ぶっぱをグングニルぶっぱで迎撃とか・・・

幻想郷では常識に(ry

Stage 6 〱私は誇り高き吸血鬼であり変革の協力者。物語の最初で負け

今回でやっとセシリア戦。

セシリア終了のお知らせ？それは見てからの楽しみ、ということ  
で。

あ、ちょ、弾幕やめ、私ノーマルシューター（ピチューン

今回もやっぱりおせつさま視点。

というか何も記述無いときは基本におせつさま視点ってことでも  
いいんじゃない？これ。

Stage 6 ～私は誇り高き吸血鬼であり変革の協力者。物語の最初で負け

紫もあれ以降は出ずに穩便に決戦当日。

セシリアは毎日それなりに煽り、できるだけ全力を出させるようにしておいた。

え？どんな感じかって？  
こんな感じ。

~~~~~

紫と殺り合った日の夜。

寮の部屋で輸血パック（残り1/3）を啜っていると、顔を真っ赤にしたセシリアが戻ってきた。

「げっ！！・・・そういえば同室でしたわね・・・」

「そうよセシリア。次の月曜までボコられないように精々頑張るとね。」

「ぬっ・・・貴女こそ、訓練はしなくてもいいのですの？」

「私はセンスで戦うタイプなのよ。弾幕はスピードとセンス。常識ね」

「だからと言って、自分も敵も知らなければ勝てる戦も勝てませんわよ？余りわたくしを見下さないほうがいいのでは？」

「狗じゃあ私は倒せない。化け物を倒すのはいつだって人間よ。」

「な・・・なんのこと！？わたくしを狗と言うの！？」

「さて。貴女は人間か、それとも狗か。次の月曜で全てが決まるわ。」

「・・・」

「必死で戦わないと私どころか、一夏にすら負けてしまっわよ？物

語の序盤の主人公は弱いと相場が決まっけていてね。そんな今の一夏に倒されてしまえば・・・真正正銘の雑魚ね。ククク・・・」

「・・・叩き潰しますわ。貴女も、あの男も。」

「まあ、楽しみにしているわ。」

~~~~~

ちなみにここは第三アリーナの観客席。千冬に許可を取りISを起動して私はそこにいた。

通常ISと違い見掛けはただの服な幻想の巫女（イメージン・オブ・オラクル）は展開すればそれそのものが日傘の役割も果たす。どうやらエネルギーシールドとやらが害になる太陽光も防いでいるようだ。

アリーナ内に浮いている青い機体。あれがセシリアの機体【ブルー・ティアーズ】らしい。

視界に入れると拡大し、また透明な板が現れまたつらつらと文やら絵やらが現れる。ぶつちやけ邪魔。

「ねえねえれみー。その服何？」

突然背後から声がかけられる。

振り向くと、何かとよく目立つ布仏本音が立っていた。どうやら私を気に入ったらしく何かと話しかけてくる。

「これは私のISよ。日傘だと邪魔になるから千冬に許可を取って展開してるの。あとれみーて呼ぶな」

「へー。すごいんだねえ。特殊なISなんだねれみー。」

・・・もうこいつには何言っても聞かないだろう。多分。

「本音。貴女はこの勝負どちらが勝つと思う？」

「んー・・・せっしーの方がやっぱり強いと思うけど、わたしはお  
りむーを応援するよー。」

「懸命な判断ね。彼は私が選んだ主人公。あの程度は蹴散らしてほ  
しいわ。」

「へー。れみーはおりむーのこと好きなんだねえー。」

「好き・・・そうね。まあ信頼はしてるかもしれないわ。で  
も私には既に心に決めた人がいるの。よろしい？」

「はい。」

・・・なんとというか、子供を相手にしている気分。まあ私に比べれば  
全員子供なんだけど・・・

吸血鬼の年齢を人間換算すれば・・・いや、やめよう。

「っと。本音。一夏が出てきたわよ。」

ピットから飛び出した白式をまとう一夏。

鈍い鉛色のISを纏い、正直弱そう。

数分間双方動かなかったと思えば、突然セシリアが弾幕発生器（私  
命名）を構え一夏に向けて撃つ。

それが一夏に直撃し、戦闘が開始された。

数十分経ち、現状を言えば一夏の圧倒的不利。装甲はボロボロ。片やセシリアの機体は無傷。まあ剣一本に対し弾幕発生器がたくさん。剣から弾幕出したりできないのかしら？某庭師みたいに。

「おりむーピンチだよー……」

「まあ、まだ一次移行してないでしょうし。前奏が終わるまで待ってあげなさい。」

「はい。」

一夏が式神の攻撃を避け、一気に距離を詰める。

「近づいた!!」

「あの雑魚の弾幕薄いわね。あれじゃイージーともいえないわ」

「ええ〜？あれでも代表候補生なんだよ〜？」

「代表候補生だろうとなんだだろうと人間の限界って奴ね。」

「お〜。さすがれみー。断然余裕って奴だね〜。」

「勿論。私はレミリア・スカーレットだからね。」

「お〜……あ。」

「……え？」

ブルー・ティアーズのスカートアーマーの横が動き、一夏に向けて二発の弾が発射し一夏に直撃。

一夏が爆風に飲まれた。周りの観客席からも落胆の音が響く。

「あ……」

「……さて、前奏はここまで。輪舞曲ロンドはここからよ。」

「え……？」

爆風が晴れると、先ほどまで鉛色だった白式がその名の通りに真っ

白な機体となっていた。

破損した装甲も全て修復され、完全に回復していた。

右手に持つ剣からは光が発せられ、私でも神秘的と思える。

一夏はその剣を握りなおし、セシリアに向う。

式神たちの攻撃を物ともせず、一夏がセシリアの眼前まで接近。剣を振りかぶった瞬間

『試合終了！勝者、セシリア・オルコット！』

「「「「「へ？」「」「」」」」

観客席中から、なんともいえない気の抜けた声が出た。

「千冬！一体どういうことよあれは！」

ピットの扉を開けて叫ぶ私。

千冬は私ができることを予見していたように私に振り返った。

「あれは白式の単一能力（ワン・オフ・アビリティー）、零落白夜だ。自身のシールドエネルギーを消費しエネルギーを無効化する対エネルギー兵器だ。」

「へえ……で、エネルギー使いすぎて負けたと。」

「う……ごめん、レミリア」

「まあいいわ。あれは実質的な勝利よ。試合に負けて勝負に勝ったってね。」

「さて、次はお前だレミリア。用意はいいな？」

「勿論。」

千冬達の横を通り、カタパルトに足を乗せる。ISの足の大きさにあわせてあるため大分私の足には大きい。

「ブルー・ティアーズは連戦のためピットで補給中だ。先に出て待っている。ブルー・ティアーズがピットから出た時点で試合開始だ。では、言って来い。」

「一夏、よく見ておきなさい。強者の戦い方をね。レミアア・スカレット、セットスペルカード。」

カタパルトに足が固定され、少しだけ屈む。

「アタック！」

私の掛け声と共にカタパルトは一気に前に進み、私を放り投げる。体勢を立て直し中心部分に浮かぶ。あとはブルー・ティアーズを待つだけ……

お、来た来た。さつき一夏と激闘(?)を繰り広げたブルー・ティアーズ。

ご丁寧に私と同じ高度で止まる。

「御機嫌よう雑魚。一夏に後一步のところまで迫られてどんな気持ち? ねえねえどんな気持ち?」

「くっ……! 先ほどは一次移行に驚かされただけですわ! 貴女はそのようなことは無い! 貴女に勝ち目などありませんわ!」

「さつきあんだけ追い詰められておいてよく言う。言っておくけど、一夏に圧勝できるくらいじゃないと……私に傷一つつけることはできないわよ?」



「へ、減らず口をおお!!!」

セシリアが弾幕発生器を構え、撃つ。

まあただ早いだけの自機狙いのようなので少し横に動くだけであっさりと外れる。

「なっ!? あれだけ動きで!？」

「もう少し話させなさい。私の単一能力・・・と呼んでいいのかわからないけどね。【射撃がかなり当てにくくなる程度の能力】よ。」

「は、はあ?」

「簡潔にいきましょう。射撃じゃあ私は倒せないわよ?」

「なら! 試して差し上げますわ!」

ブルー・ティアーズから四体の式神が現れる。

私を囲むように展開された式神は私に対し一斉射撃を数度行なう。

私は低速で少しずつ移動し、偶に身を擦って避ける。

「何故・・・なぜ当たりませんか!？」

「弾幕が薄すぎるのよ。この程度の弾幕、イージーすぎて欠伸が出してしまうわ。」

イージーすぎても詰らないからハンデをつけてあげるわ。そうだ、私は二つしか武装を使わないことにしよう。」

「何処までもわたくしを舐めるつもりですわね・・・!」

「さてね。ほらほら、私はまだ一発も当たって無いわよ? こちらに残機は有り余ってるんだ、コンティニューぐらいさせてみなさいな?」

「くっ・・・!!」

口では勝てないと判断したかセシリアは黙りこくって再び式神たちを使い始める。

時折手に持つ弾幕器を織り成した攻撃をするが、同時攻撃はできないらしく隙が有り余っている。

「時符【ザ・ワールド】！タイムリミットは三秒。それ以内に私に直撃させてみなさい！」

「まだ、まだああああ！！！」

弾幕器からのレーザーが私の頭をすり抜ける。

「いち。」

式神達からのレーザーが四肢をすり抜ける。

「こーい。」

二つのミサイルが私の腋を通り抜ける。

「さん。時よ止まれ！！！」

周りが灰色になり、全ての時間が止まる。

時間を操る私の忠実なメイド、十六夜咲夜のスペルカード。

私に迫っていたレーザーも全て止まっている。

「神槍【スピア・ザ・グングニル】！」

掌にグングニルを形成し、振りかぶる。

「ふん!!!」  
思い切り投げ、私の手を離れた瞬間にグングニルも止まる。だが、これでいいのだ。

私が指定した時間は5秒。私がグングニルを形成、投げるまでで3秒。

残り2秒でセシリアの後ろに回り込み

「そして時は動き出す。」

腕を組み、上半身のみを若干後ろにそらして宣言すると、時は動き出し、世界は色彩を取り戻す。

それと同時にグングニルも動き出し

「え、消え」

セシリアは言い切ることもできずにグングニルに飲まれた。

『試合終了!勝者、レミリア・スカーレット!』  
ブザーが鳴り、私の勝利で試合は終わった。

「この馬鹿者が!!!」

グングニルが直撃し気絶したセシリアを背負ってピットに戻ると、  
またもや千冬に怒られた。何故に。

「何よ、勝ったんだからいいでしょ?」

「勝ったことには文句はない。だが！ブルー・ティアーズのダメー  
ジレベルはB！入試試験のときの二の舞だ！お前は加減というものは  
できるのか！それ以前に学習という言葉はないのか?!」

「そんなことを言ってもね。私は【二種類の武装で勝つ】とハンデ  
を付けたから。」

「全く・・・山田君、ブルー・ティアーズの修理を頼む。」

「は、はいい〜!」

山田先生はセシリアからブルー・ティアーズを回収し、いそいそと  
ピットから出て行った。

「はあ・・・これを持って本日のクラス代表戦及び模擬戦を  
終了する！学生は寮へ戻れ！」

・・・そしてスカレット、お前はオルコットと同室だったな。寮  
の部屋に運べ。いいな?」

「・・・りょかい。」

第三アリーナから寮までの道にも勿論日光は当たる。私は直撃はし  
ていないがシールドに当たったりエネルギーを思いつきり使ったり  
して結構ギリギリ。しかし直射日光喰らうわけにもいかなかったためI  
Sは起動したまま。本当に万能ねISって。

「う、ん・・・」

「あら、起きた」

「はい・・・!? ね、レミリアさん!？」

「何よ。こちらら千冬に大目玉喰らって機嫌が悪いから簡潔にお願  
い」

「な、何故わたくしを背負って・・・!？」

「私が気絶させちゃったから寮に運べって千冬がね。あー面倒・・・

「う……………」

「ま、これであんたがクラス代表ね、おめでとさん。」

「……………」

「まあ戻ったらとりあえずシャワーでも浴びなさいな。私は嫌いだけれどね、シャワー。」

「そう、ですわね……………」

顔は見えないけど、声が微妙に震えている。こいつプライド高そうだしボロ負けしたことが響いているんだろう。

「ま、雑魚なりには頑張ったってところ？」

「…………ひとつ、教えてくださりませんか？」

「何？」

「最後のあれは…………何が起こったのです？」

「私が時をとめて、その間にグングニル、あんたとぶち抜いた槍を投げた。それだけよ。」

「……………」

納得がいかないようで、セシリアは黙りこくってしまった。

私もセシリアも黙ったまま、寮に歩いて戻っていった。

Stage 6 ー私は誇り高き吸血鬼であり変革の協力者。物語の最初で負け

はい、セシリアフルボッコです。

ちなみにザ・ワールドのあの腕を組みの部分はぶつちやけた話ジョジョ立ちです。でもおぜうの身長じゃあジョジョ立ち映えな（ry

資料集その1でもありますが無防備な状態で3秒以上のものを発動されるとグングニルが確定します。

え？同じ秒数必要ならザ・ワールドいらないんじゃない？

それがそうでもない。

グングニルは見てから防御余裕だったりします。距離にも寄りませんが。

ザ・ワールドは5秒を使えば2秒で移動、3秒で裏回ってグングニルともできたり。

何にせよ距離に関係なく一瞬で着弾する投擲槍って何気に凄かったり？

なんにしても、未だスターボウブレイク・賢者の石・夢想封印は出番無し。

（出番来るのかな・・・？）

長々と失礼しましたm（| |）m

Stage 7 ーしかし、白式とかと比べると幻想の巫女って小さいわよね。T

久々の更新ー！

キーワードに超不定期更新って書いたから大丈夫！だと思っ！  
あ、すいませんExできないんです。

最後に謎の二人組が・・・？

Stage 7　しかし、白式とかと比べると幻想の巫女って小さいわよね。I

翌日。

私&一夏VSセシリアの死闘（笑）が繰り広げられたからか、教室は微妙に騒々しい状態だった。

「昨日の模擬戦すごかったよね〜！」

「織斑君代表候補生にすごい健闘してたよね〜。というかもうアレ殆ど勝ちだと思うな。」

「それに、スカーレットさんも圧倒的だったよね〜！」

あーもう。女三人寄れば姦しいとも言っけど、クラスの殆どが寄れば姦しい通り越して煩い。

「一夏。雑魚を蹴散らせないと、随分な体たらくよね。」

「う、返す言葉もないな・・・」

「勝ちが確定する寸前に時間切れのスペルブレイク。これは馬鹿にされても仕方が無いレベルよ。」

「うぐ、あれを見たら反論もできん・・・」

「まあそういうことよ。まずはとにかく修練を積む。そしてせなんとか程度は蹴散らせるようにしないと。目指すは対3機同時戦闘よ。」

「

「三機イ！？そりやどう考えても無理だろ！？」

「私のいたとこじゃ常識よ。」

「ああ・・・そう・・・つと次は外だったっけ。」

「日傘かISか・・・日傘でいいか。」

「じゃ、また後でな！」

いそいそと教室を出て行った一夏。



ISスーツにいちいち着替えるのって面倒そうねえ。ロクな機能も無いくせに準備にやたら時間がかかるとか、欠陥品もいいところねえ。まだ河童の方が面白いもの作れるかも。私も日傘を用意してやたら広いグラウンドに向った。

やたら広いグラウンド。その一角に整列するISスーツに身を包んだ生徒達、その最後尾に私は制服でしかも日傘を差すというこの上なく場違いな姿をしていた。

「ではこれより、ISの基本的な飛行訓練を実戦してもらおう。織斑、オルコット、スカーレット。ためしに飛んでみる」

「りょーかい。」

「わかりましたわ。」

私は適当に地を蹴って空を飛び、空中でISを展開してみる。日傘もISみたいに出世ればいいんだけどね。

・・・おお、意外といける。

とりあえず日傘は消しておいて・・・

そんなこと考えてる間にセシリアもISを展開していた。

「えーっと・・・」

「何をしている織斑！熟練のIS操縦者は展開まで一秒とかからんぞ！」

どうやら一夏はてこずっているようだ。

「来い、白式!!--」

「・・・どうやらできたようね。」

「こうして並ぶと、私のISが特殊というのがよくわかる。何より小さい。」

「よし、飛べ!!--」

「はい!!--」

千冬の掛け声と同時にセシリアが空に上がる。ノーモーションで飛べないのかしらね。」

「先に行くわよ一夏。」

私も宙に浮き、セシリアに向けて全速で突撃。

当てるつもりは無いけどこういう突進が一番早いと思っている。」

「そっぴゃ、修理あっさり終わったのね。」

「上空を高速(?)で飛ぶセシリアを捕捉、減速して後ろ向きに飛んで話しかける。」

「ええ、おかげさま・・・・・・え?」

「何よ」

「いや、後ろ向きでそのスピードが出せますの!!--?」

「そりゃだせるでしょう。このISの推力?てのは私自身だから。」

「貴女自身・・・ってことは!!--」

「あ、一夏?。こっちこっち。」

微妙にもたつきながら一夏がこちらに向ってくるのが見えた。飛ぶのってそんなに難しいもんかしらねえ？

「うお〜・・・」

「苦戦してるわねえ。」

「・・・・・・」

「自分の前方に角錐を形成するイメージ・・・あゝ、よくわかんねえ・・・」

「イメージは所詮イメージ。自分のやりやすい方法を模索するほうが建設的ですよ。」

いつのまにか一夏の真横を飛んでいたセシリア。

気づかなかったわ・・・

とりあえず私も一夏の横、セシリアの反対側の位置を取る。

「う〜ん・・・レミリアはどんな感じだ？」

「私のアドバイスは当てにならないわよ。何せ・・・人間業じゃないから。」

「は？それってどういう・・・」

『全員、急降下と完全停止をやってみせろ。』

一夏が聞こえなかった途端に千冬からの指示が。タイミング最悪ねえ。

「りよ、了解です！では、お先に！」

セシリアが急激に降下し、地上に着く直前に足から炎を出して止まる。

あの足から炎出すのって何の意味があるのかしらね。今まで疑問に思ったことないけど。

「うまいもんだなー……」

「急降下と完全停止……あーダメね、どういう活用かわからない。じゃ、お先に。」

頭を下に向け空を蹴り急降下。

私のちよつとした体術の一つ、【シーリングファイア】。

急速に地面に向かい、上手く着地……あ。

「着地じゃなかった……つと！」

気づいた時には遅く地面直前だったため、地面に手を着いてそのまま身体を縦回転させて体勢を整えて着地。危なかったあ……

「着地してどうする。完全停止をしる。」

やっぱり千冬からのお叱りが来た。ですよね……

直後、一夏も急降下を始めたらしく、思い切り地面に向つ。

……あれ？何かセシリアがやってたのと違うような……

「うおおおおおおあああああ！？」

白式、（ある意味）墜落。

停止できなかつたらしく一夏は地面に突撃。  
大きな音と大量の土煙が舞い上がった。

「一夏!？」

「織斑君!！」

土煙が晴れると、そこには大きな穴とその穴の中心で地面に頭が刺さった一夏がいた。

「あーあ・・・また景気よくやったわねえ」

「ぶはあ!あーいつてえく・・・死ぬかと思った!」

どうやら無事らしく、しのののさんやら山田先生やらが安著の息を吐く。

「馬鹿者、グラウンドに穴を空けてどうする。」

が、千冬は平常運転だった。

「あー・・・すみません。」

「情けないぞ一夏!私が教えてやったことをまだ覚えてっわっ!!」

突然セシリアがしのののさん突き飛ばして一夏まで走り寄る。

・・・しのさん、あんたに足りないのはデレよ、確実に

「だ、大丈夫ですか一夏さん!お怪我は無くて!？」

「ISには絶対防御つてあるんでしょ？ならいいんじゃない？失敗は成功の母とか言うらしいし。」

「まあ、一応大丈夫だが・・・って、一夏【さん】！？」

「それは良かったですわ。でも、念のため保健室に「保健室に行く必要があるのはあなたの頭だから安心しなさい雑魚。」雑魚ではありませんわ！！捻挫なりしているかもしれないでしょう！！」

む、セシリアの割りには妙に正論が。

「まあ、見るからに土汚れぐらいだし。大丈夫じゃない？」

「全くだ！ISを装備していて、怪我などするはずがない！」

さらにいつのまにか一夏の横に立っていたしのののさん。何？この学園の生徒は瞬間移動できるのばっかなわけ？

「あら篠ノ之さん？他人を気遣うのは当然のことですよ？」

「お前が言うか、この猫かぶりめ。」

「鬼の皮を被っているよりはマシですわ？」

「むむむむむ・・・」

「ぬぬぬぬぬ・・・」

「全く、馬鹿ばかりね。」

「何であんなに仲が悪いんだかな・・・」

「それが理解できたら私は貴方を尊敬するわ。」

「・・・？」

・・・こりゃ、望みは薄そうね。頑張れセシリアとしのののさん。

「夕方のIS学園前にて」

「ここがIS学園……」

「いやー、楽しみですおめいじね、鳳さん。」

「鳳じゃなくて鳳フアンよ。東風谷さん。」

「それは申し訳ありません。何分中国に関しては詳しくないので。」

「あつそ。私にとっては東風谷こそ謎に思えるけどね。」

「先祖から……いえ、親から譲り受けた苗字ですから仕方ありませんよ。」

「そりゃ私だつて同じよ。」

「ならば、私のことは名前で呼んでくださいな、鈴音すずねさん。」

「鈴音じゃなくて鈴音リンインよ、早苗さん。」

「……このやり取り、何回目でしたっけ。」

「私が覚えている限りでは41回目よ。」

「いやー、神に仕える身となるととても苦労が溜まりまして。物覚えが悪くなつてきています。」

「……あの連中を見ていると強ち否定もできないわ……」

「さて、そろそろ行きましようか、鳳鈴音おめいすずねさん。」

「鳳鈴音ファンリンインよ、東風谷早苗さん。」

Stage 7 ーしかし、白式とかと比べると幻想の巫女って小さいわよね。T

おおとせまね  
鳳鈴音と東風谷早苗・・・いったい何者なんだ・・・！

はい、セカンド幼馴染登場です。

アニメ準拠なので何か色々足りないと思うでしょうがお許しください！

原作買ってないんです！文字長々書いてあるのを見ると眠くなるんです！

あー、アニメはいい・・・

次回は一夏代表決定パーティー+部屋(+宣戦布告?)です！お楽しみ！

レミリア「ちなみに氷精はナニカサレタ状態で登場確定よ。二柱は不明。あとは・・・後々考えましょう。」



Stage8 結局一夏が代表？全く、女って奴はわからな・・・私も女か

はい今回、はっちゃけました。

やっちゃいました。

最後の最後に我慢できませんでした・・・

ここから(次回から)原作崩壊はっじまーるよー！

(あーやっちゃった・・・)

今回、最後だけ三人称視点。

Stage 8 結局一夏が代表？全く、女って奴はわからな・・・私も女か

「織斑くん、クラス代表決定おめでとう〜!!!」

ぱんぱんぱん。

クラッカーが響き、私や一夏に紙の束が大量に振ってくる。

夕食後の食堂で、私と一夏は状況が理解できずにいた。

いや待て、待て。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ。」

「ほんとほんと。」

「ラッキーだよなー。一組で。」

「ほんとほんと。」

いやまて、そこの顔してる奴、見たことないぞ。

「・・・で、何の茶番よセリア・ボイコット」

「セリア・オルコットですわ！」

何故一夏さんがクラス代表か。それはわたくしが辞退したからですわ。」

「うつわ・・・目的を考えるとありがたいけどタオカカに感謝したくねえ・・・」

「セリアですわ!!」

こほん。まあ一夏さんは確かに負けてしまいましたが、それはよく考えれば当然のこと。それにわたくしも少し大人気ないことを言うてしまったことを反省し、譲ることにいたしましたの。やはりIS操縦に必要なのは実戦の経験。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの。」

「いいこと言ったつもりなんでしょうけどほぼ幸運勝ちだった上にその後私にボロ負けしたこと忘れてほしくはないわね」  
「ぬぐつ……」

「まあでも、セシリアもいい判断だよー。」  
「やっぱり男子がいるんだから持ち上げないといけないよねー。」

「……人気者だな、一夏。」

一夏に不機嫌そうに吐き散らす篠ノ之さん。  
同室っていうアドバンテージががんが崩れて行く。面白い。

「そういう貴女は不人気者ね、しのさん。」  
「のが一つ少ない！大体、何故いつもいつもお前は一夏の傍にいるんだ！」

「悪い？貴女に私の居場所を制限できる権利はないと思うけど。」  
「ぐつ……」  
「まあまあレミリア。落ち着けて。箒もそんなに噛み付くことないだろ？クラスメートなんだし、なかよくなかよく！な！」

そついい満面の笑みを浮かべる一夏。  
随分と甘い変革者もいたものね。全てのISが敵つてことはこの場にいる連中全員が後々敵になる。  
情は戦いにとって一番邪魔なものよ。勿論この場で言えるわけもないけど。

「はいはい、新聞部です！話題の新入生、織斑一夏くとレミ

リア・スカーレットさんに特別インタビューをしに来ました！」

「帰れ」

「失礼しましたー……ってなんでやねーん!!」

「ずいといと寄ってきたかと思えば私の一言でUターン。そしてさらにUターンしつつの突っ込み。」

「随分と元気な新聞部ね。新聞に関わる連中はみんなこんなノリなのかしら。」

「どっかの鴉天狗みたいな。」

「あ、私二年生の射命丸薫子。副部長やってまーす。よろしく!あ、これ名刺。」

「……ん?今聞き覚えのある単語が……」

「ではでは織斑君!クラス代表になった感想をどうぞ!」

『一夏。私の言う事を繰り返して。』

「最近知ったプライベートチャンネルというものを使って一夏に話しかけてみる。」

「何か口クでもない気がした。てかそんな運命を見た。」

『決定戦に勝ってないのに代表になったのは正直言って不満です』

「えーと、代表決定戦で勝ってないのに代表になったのは正直言う」と不満です。」

「ふむふむ。」

『でもまあ、なってしまったものは仕方が無いので、クラス対抗戦は相手を叩き潰す覚悟でやるつもりです。以上』

「でも、なつてしまったのは仕方無いので、クラス対抗戦は相手を叩き潰……す覚悟でやるつもりです……」

「お、いい感じに捏造できそうなお答えいただきました」  
「捏造前提かいそのマスゴミ」

まさかの捏造前提でのインタビュー。外でも内でも情報に関するところも腐るか……

「ではでは、次に超新星その2、レミアア・スカーレットさん。なんでも代表候補生のISを打ち破ったとか!」

「ああ、そのセなんとかのISね。正直言つて雑魚だったわ。」

「セシリアですわ!」

「なんと、一年生とは言え代表候補生を雑魚扱い!これは暫く新聞のネタには困らない……!これは姉さんに進言せねば!」

「その姉さんの名前が激しく気になるんですけど。」

「ああ、姉さんの名前ですか。文つて言うんですけど。」

……は?

「いや待て待て待て待て、射命丸文だつて?マジなの、それ?」

「いくら私でも姉の名前まで捏造はしませんよ。なんですか、姉さんを知っているんですか?」

「……ちよつと聞いたことがあるだけよ。知り合いつてわけじゃあないわ」

……どういうこと?

紫が言うにはここに居るのは私と紫の遠い親戚だけのはず。

なのにあの天狗もいる?しかもこの世界に完全に適応した状態ですかアイツに妹なんていたの!?

「さて、セシリアちゃんは・・・いいや。面倒だし。じゃあ織斑君を中心に三人で並んで。写真取るから。」

「えっ?」

「へ?」

「は?」

上からセシリア、一夏、私。

全員同じ感情なのに出る言葉は違う。日本語って多彩ね、ほんと。

「注目の専用機持ちだもんね。スリーショットもいいかも。あ、体勢とかは好きにどうぞ。ふざけたりしなければ。」

とのことなので私は一夏の後ろに少しだけ浮く。

まあ、ばれないでしょう。

セシリアは一夏に握手を求めようとして言いきれない。めんどろくせえ。

「もういいや、撮るよー。35×51÷24は?」

「へ、え、えつと、2?」

「それじゃあないことは確かよ」

「正解は74.375でした〜!」

た、と同時に光るカメラ。

その瞬間、私たちの周りには一組の連中が集合していた。しなののののさんまで。

「な、何故全員入ってますの!?」

「まーまーまー。」

「セシリアやスカーレットさんだけ抜け駆けはするいでしょ。」

セシリアは不満たらたらのようなようだ。別にツーショットなわけでもないでしょうに……

「あれ……?」

「どうしたんですか射命丸先輩?」

なにやら不思議そうな顔の射命丸先輩（なんかあの天狗に敬称をつけてるみたいでムカツクわ。）に一夏が声をかける。

「いや……ちゃんと写真は取れたんだけど、何か足りないような……気のせいかな、うん!」

……私、でしょうね。

さて、亥の三つ（外では二十時と言っらしい）頃まで続いたパーティーが終わり。

私とセシリアは部屋に戻っていたがセシリアは興奮冷めやらぬ様子。

「セルビア、一つ聞きたいのだけど。」

「セシリアとちゃんと呼んでいただけるのでしたらどうぞ。」

「じゃあセシリア。あんた、一夏に惚れたでしょう?」

「なっ……? ……何故それが!??」

「わからないでか。」

本気で隠し通していたと思っっていたらしい。

このセシリア、もしかや天然なのかもしれない。

「で、どうなの？」

「・・・惚れている、のかどうかは未だよくわかりませんわ。ただ、あのような強い瞳。わたくしは見たことがありますの・・・」

「それで、一夏が気になっている、と。」

「ええ・・・わたくしはあの方が知りたいのです。」

「・・・それで、よく一夏という私にそれを話したと。」

「はい。聞けば、貴女は心に決めている人がいるのでしよう？なのでアドバイスなどをいただけたら・・・と。」

「まあ、いいけどね。一夏をほしがるなら一つ覚悟しなければなら  
ないわ。」

「・・・そ、それは・・・？」

「一夏と私以外の全てのIS操縦者を殺す・・・いや、IS全てを  
破壊する覚悟よ。」

「ッ!？」

セシリアの顔が急に険しいものになる。

まあ流石にそうだろう。今の自分の代表候補生という地位はISに  
よって築かれている。

そのISを全て破壊する覚悟をしろと言われて困惑しないのは千冬  
ぐらいだろう。多分。

「貴女達は・・・一体何を考えているのです。」

「変革よ。歪んだ時代を、運命を元に戻すの。私はそのためにここ  
にいる。」

「・・・その結果、たくさんの方が不幸になるのはずですわよ。」

「では逆に聞こう。ISができて不幸になる人がいなかったと言っ  
のかい？」

「・・・いいえ。」

「つまりはそういうことさ。変革には犠牲が伴う。篠ノ之束は男性



を犠牲にしてISという変革を行なった。ならば私たちはISと私  
たちを犠牲にして変革し直そう。その鍵が一夏よ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「さて、ここまで聞いてしまったからには貴女に選択権はもう無い。  
私たちの変革に、地獄行きの列車に、付き合ってもらうわ。」

「・・・・あまり納得はできませんが、一夏さんを知れるというのな  
ら。」

「Excellent。やはり才女は違うわね。じゃあ暫くはこの  
ことは伏せなさい。もし知れたら・・・・この学園が血の池地獄にな  
るやもしれないからねえ。」

「・・・・・・・・」

「じゃ、おやすみ。」

「おやすみ、なさいませ。」

私は寝転がり目を瞑ると、疲労が溜まっていたのかすぐに意識を落  
とした。

（某国、某所）

どことも知れない場所。

その場所に、二人の少女と一人の女性がいた。

そしてその周りには数体のISの残骸と操縦者【だったもの】やそ  
の他大量の人間が転がっている。

ある者は首を鋭利に切られ

ある者は地面に顔を叩きつけられたように潰れ

ある者は高温の物体で焼ききられたように真っ二つになっていた。

三人にISのような装甲は付けられていない。つまり、彼女らは生

身でISを破壊した、ということになる。

「・・・ふん、俺の剛拳の前にはISなど鉄屑も同然。」  
最も背の高い、黒い着物を着た女性が、まるで男のように低い声で  
呟く。

「Do not use the fist lady. Is  
not they use a sickle. (貴女は拳を使っ  
ていません。使ったのでは鎌でしょう。)」  
最も背の低い、背中から緑の羽を生やした少女がそれに応える。

「これは雑兵                   この程度では目的には程遠い」  
赤いワンピースを着、水晶のような形の赤い羽をした少女がノイズ  
交じりの声で語りかける。

「俺に通用する武芸者がいると願おうか。」

「Absolute death to one against  
her. (彼女に逆らうものには絶対的な死を。)」

「……………誰であろうと、私達を超えることなど不可  
能だ」

次の瞬間、彼女たちは消えていた。

その場に残ったのは、コアまで完全に破壊されたISと、人間の残  
骸だけだった。

Stage 8 結局一夏が代表？全く、女って奴はわからな・・・私も女か

はい、わかる人にはわかる三人です。やっちまいました。  
もう東方でもなんでもありません。

だが私は後悔はしない。反省は深くしておりますorz

ちなみに元ネタは

ラウ（北の拳）

ジェネラル（カイナックル）

ナインール（アーマーコア）

の三つ。

実は オウはバルバ スという案もあつたけどチートすぎてボツ。

えーと、次は早苗さんと鈴音<sup>すずね</sup>さん登場 + 鈴音さん戦かな・・・

Stage9 へ天狗に青巫女に・・・もう幻想郷なくなっただんじやないの？  
間空いてスイマセンでしたあ。  
まあ不定期更新とありますから、私は謝らない。  
すいませんでした。

出ないと思っていたら出てきた(射命丸話)

今回は鈴登場へ部屋まで。

あの宣言はありません。ほら、基本的にどこでもやってるし。

早苗・文のISは次に紹介でもいれときます。

Stage 9 天狗に青巫女に・・・もう幻想郷なくなっただんじやないの？

朝の教室。

すっかり一夏も溶け込み（まあ相変わらず目立ってるんだけど）、クラスメイトと談笑したり、それにセシリアが介入したりと妙に微笑ましい状況。

「あら、おはようございますレミリアさん。」

「ああセントア。おはよ。」

「セシリア、ですわ。」

予想外にも教室に入った私に最初に気づいたのはセシリアだったよ  
うだ。

セシリアと同室じゃないの？とか聞かないで。私朝に弱いんだから。  
朝起きれないんだから。

「そういえば、織斑君とスカーレットさんは聞いた？転校生の噂。」

「噂？」

「いや、聞いて無いな。」

一夏を囲む女子の一人から声がかかる。

・・・そういえば、クラスの中で一夏としののさんとセシリアと本  
音ぐらいしか名前覚えて無いわね・・・まあいいや。

「二組に転校生が二人きたらしいよ。片方は中国の代表候補生だと  
か！」

「大陸の・・・ねえ。」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら。」

「それはないから安心しなさい雑魚。」

「むぐ……」

私の一言であっさり看破されるセシリア。  
力こそが正義、いい時代よね。

「そうだ一夏さん。クラス代表戦に向けてより実戦的な訓練をいたしましょう。相手はこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせて頂きますわ。なにせ、専用機持ちですから。」

「その理屈だと私の方が適役じゃないの。強いし。」

「そういう問題ではありませんわ！レミリアさんのISは遠距離砲撃型ですよ。中距離射撃型のわたくしとの訓練も必要ではありませんこと？」

「別に遠距離型のつもりはないんだけどね……」

「……」

「一夏。しののののさんがこっち見てるわよ。」

「のが三つ多い！」

遠く（一つ机を跨いだ程度の距離だけど）からでも突っ込みを入れる篠ノ之さん。律儀ね。

どうやら声をかけられるのを待っていたようで、突っ込みを入れた後に席を立ち一夏の傍まで歩いてきた。

「あら、ISランクCの篠ノ之さん。どうかしましたの？」

「ランクは関係ないだろう！一夏は私が訓練する約束だ！」

「半ば無理やりなのにな」

「何か言ったか？」

「イエナニモ」

弱っ。

急激に縮こまる一夏を横目にまたもセシリアと篠ノ之さんとの小競り合い。まただよ（失笑）

「ま、まあまあ。専用機持ちがいるのは一組と四組だけだし、余裕だよ！」

「その情報、古いよ。」

「古いですねえ。もう少し未来に生きましようよ。」

女子の一人の必死のフォローも聞き覚えない声と聞き覚えある声にあっさりと碎かれる。

ん？聞き覚えある声………？

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから。」

「まあ正直私が代表になりたかったのですがこの幼女が聞かなくて……」

「同年だから。幼女じゃないからね私！」

教室のに立っていたのはよく知らない奴と、制服を着ているが、特徴的な緑髪と蛙&蛇の髪飾りをつけた巫女（風祝らしいが同じものじゃない？）、東風谷早苗だ。

「あなた、青巫女……！？」

「鈴………？お前、鈴か！？」

どうやらもう片方は一夏と面識があるようだ。ちゃんと読んでればよかったなあ……

「ふつ、そつよ。中国代表候補生、鳳鈴音。」  
フマシシイン

「その保護者、東風谷早苗。」

「何であんたが保護者なのよ！・・・今日は宣戦布告に来てわけ。」

「

突然の宣言に、静かになる一組の教室。

その静寂を破ったのは一夏の一言。

「鈴、何格好つけてるんだ？すっげえ似合わないぞ？」

「んなつ！？なんてこと言うのよアンタは！」

「ほら、無闇にポイント稼ごうとするから玉碎したじゃないですか。」

「

「早苗！あんたは余計なこと言わない！」

一夏の空気読めない能力が妙な空気を笑いに換えた。もはや一種の才能なんでしょう。うん。

「おい」

「何よ！」

スパーン。

鳳さんとやらの後ろにいた千冬の出席簿アタックが炸裂。

「いったあゝ・・・・・・げえ！？千冬さん！？」

「ほら鈴さん。余り調子に乗るから。」

「お前等、SHRの時間だ。さっさと教室に帰れ。」

鬼の一声早苗達だけではなく教室の連中も散っていく。

一応私も席についておく。



吸血鬼聴力最高。

「はい。ではでは。」

「は、はい・・・また後で来るからね！逃げないでよいち」

スパーン。

「さっさと戻れ」

「は、はいいい！！」

どうやら早苗達は戻っていったみたい。最後列からすれば音で判断するしかないという悲しい現実である。

「一夏、今のは誰だ！？知り合いか？えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係で」

バシンバシン！

しかしまあ頑丈な出席簿ね。慧音の頭にも負けてないんじゃない？

昼休み。一夏に食堂に行こうと誘おうとしたのだが

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

何か馬鹿二人が絡んできた。

「なんでだよ………」

「難癖つけて一夏をボコる気ね。おお、「わい」わい。」

「誰が！」

「一夏さんを！」

「苛めるって!?!?」「」

妙なコンビネーション。実はこいつら仲いいんじゃない？

「筈にはしよっちゅう打撃喰らってるけどな」

「何か言ったか？」

「イエ、ナンデモ……」

言語統制現場ってこんな感じなのね……

「聞こえたわ。言霊は取った。もう逃げられないわよ篠ノ之さん。」

「のが……いや、あっている。だからなんだ!?!?」

「一夏にしよっちゅう打撃を加えているんでしょう? おおヒステリックヒステリック。」

「ぬ……! あれは一夏を鍛えるために」

「打撃をしよっちゅう加えているのは否定しないのね。……清く正しい」

ネタはあがったので奴を呼ぶ。この世界(学校)にいるのは確定。

幻想郷のどこにいてもこう呼べば来る。

まあ誰も呼びたがらないんだけど。

「はいどうも! 三年二組清く正しい射命丸文です!」

ほら来た。

「来たわね天狗。面白いネタがあるわ。昼食ついでにどう？」

「あやややや。かのレミリア・スカーレットさんからのネタとは。薫子からも聞いていますよ。レミリアさんの活躍。」

「私は今はどうでもいいから。ほら一夏、行くわよ。」

「ま、まあまずはメシだろ。行こうぜ。」

「む……ま、まあお前がそういうのならいいだろう。」

「そ、そうですね。行って差し上げないこともないですよ。」

しなののさんははともかくなら来るなよペリリア。

と愚痴るわけにも私と天狗と一夏を先頭に、しなのののさん、セシリア、その他多数と大所帯で食堂に向った。

「待つてたわよ一夏！」

「邪魔。」

「邪魔ですなえ。一応公共の場ですからどいてくださいな。」

「とりあえずどいてくれ。食券出せないし普通に通行の邪魔だぞ。」

「う、うるさ〜い！わかってるわよそんなこと〜！」

さすがごとちびっ子（私ほどじゃないけど）が引いて行く。とりあえず私は納豆蕎麦でも……

「ほら、だから邪魔になるからやめておきましょうって言ったのに。」

「一夏。そっちも積もる話あるんでしょ。私も私でこいつと話があるから。よろしく。」

「あ、ああ……またな。」

天狗と早苗を引き連れつつ、手ごろな場所に座る。

私、天狗、青巫女・・・

こう考えると珍しいメンツね。

「で、聞きたいことは山ほどあるけど。」

「あやややや。まずはネタをお聞きしたいんですけどねえ。」

「篠ノ之箒が織斑一夏に日常的に理不尽な暴力を加えている。以上」

「あやややや！話題の織斑一夏君に！いいネタですねえ。薫子とも相談してみますよ。ご協力ありがとうございます。」

「それで。何でここにいるわけ？」

「何がですか？」

「何がですかじゃねえよ。何であんたらがこの外の世界にいるわけ？青巫女はともかく天狗。あんた妹なんていたの？」

「青巫女じゃありませんしそれ以前に巫女じゃなくて風祝です。」

「どっちでもいいわ」

「ああそうだ。一つ特ダネがあるんですよ。まだニュースにもなっていない特ダネが！」

「あんたの特ダネほど信用できないものもないわ」

「まあそう言わずに・・・最近、各国でISが無差別に破壊されている事件が多発していると鴉達から聞いています。」

「ISって400体ぐらいしかいないんでしょう？それがニュースにならないの？」

「ええなりません。なぜならそんなことを報道すれば国の威厳がガタ落ちしますから。」

国の威厳ねえ。道具に頼るからいつかは隙を突かれる。頼れるのはいつでも己の身一つよね。

「ふうん・・・で、それが得ダネ？」

「いえこれからです。その犯人ですが、鴉達の情報を元にすると、チルノさん、大妖精さん、小野塚小町さんだということがわかりました。」

「・・・・・・・・・・は？」

「・・・・・・・・・・へ？」

小野塚小町。これはまだ死神だからいい。多分寿命が何か来ていたんだろう。寿命十年二十年とか短すぎるけど。

だがチルノといえば、馬鹿なことでは有名な妖精である。人畜無害というわけでは無いが妖精としては桁違いの能力を持っている。まあ妖怪としては最低ランクだが。

大妖精もチルノほどではないとはいえ妖精の中では強者の内。だが妖怪としては以下略。

何より、何故この世界に連中がいるのか？そして何故ISSを破壊するののか？

疑問はこれにつきる。

「ですが、おかしいことも多々あるんですよ。」

「おかしいこと、ですか？」

「はい。チルノさんのトレードマークは所謂【青】ですよね？ですが、鴉たちが見たチルノさんは赤かった、と言っています。」

鴉って、色認識できたんだ・・・

「他にも、小町さんの声が異様に野太かったりとか、まあ私たちが知っている三人とは明らかに違っているという部分があるんです。」

「つまり、連中の姿をした別人、という可能性もあるかもしれない、

ってことね。」

「はい。」

「じゃあ青巫女。まさかあんた一人でこの世界に来たってわけじゃあないでしょう？あの神連中はいるの？」

「いるにはいます。しかし信仰が薄れきっている所為か迂闊に姿を現すことができません。」

「連中までいる・・・か。」

「じゃああんたら。夜、寮の1027番に来なさい。紫を踏まえて会議をする必要があるわね。」

「あやややや。了解しました。」

「八坂様や諏訪子様も賛成なされるでしょうし。いいですよ。」

「Good。まあ夜のお楽しみね。セシリアは・・・恐らく一夏に構ってるでしょうし。」

「あややややや。楽しみですね。」

「でも文さん立場三年生ですからあまりはしゃがないほうがいいですよ。」

「あやや、これは失敗。」

「どうでもいいわい・・・」

その後特筆することもなく、夜中。

私、天狗、青巫女の三人は昼の打ち合わせ通りに私とセシリアの部屋、1027号室に集まっていた。

セシリアは恐らく一夏の訓練だろう。天狗に煽らせたい。

「……いるんでしょ紫。出てきなさい。」

「いますわ。予想以上の事態ね、これは。」

声をかけないと出てこれないのかこのババアは。

「あやややや。お久しぶりですね八雲紫さん。」

「お久しぶり。この世界、随分とイレギュラーが多くなってきているわ。そろそろ世界の道が脱線するかもしれないわね。」

手に持つ扇子を口元を隠すように翳す紫。

こんなことをする時は相当あせっているときか何か企んでいるとき。恐らく前者だろう。

「それで、八雲さん。レミアさん。話とは？」

「……まず、私の目的から話さなければいけないわね。」

そして、私は天狗と青巫女にこの世界での経緯を全て話した。

私の目的、ISからの変革。その鍵が一夏であるということ。

紫の目的、紫の遠い親戚の捜索。

……あ、これぐらいしかなかった。

「ふむ……となると、あのチルノさんたちの同行も気になりますね。各国で無差別にISを破壊しています。鴉達によると既に40体は破壊されているでしょう。同時に搭乗者も完全に殺害されています。」

「だとしたら、連中の目的は【国に対する嫌がらせ】ではなく【I

「Sそのものの破壊」となるわね。」

「よかつたわねお嬢さん！味方が増えるわよ！」

「おいやめる馬鹿、それはある意味死亡フラグだから。」

「うーん……いまいち状況がよくわかりません。帰ったら八坂様達と相談してみましよう。」

「あ、じゃあついでにお嬢さんの企みの協力もしてもらいますわ。同じ幻想郷のよしみということもありましよう。」

「私は構いませんよ。天狗の情報収集力は天下一ですから。」

「諏訪子様方が賛成してくれるといいのですが……」

「世界を敵に回すんだからいいんじゃない？面白そうって理由でやりだしそうだけど。」

「話は纏まりましたわ。とりあえず、チルノ、大妖精、小野塚小町の三名との接触を試みましょう。私も一度幻想郷に戻り四季様に相談してきますわ。正直いきたくはありませんけど。」

「できたら連れて来てきなさいな。」

「期待はしないで頂戴ね。では御機嫌よう……」

紫がスキマに消え、話すことも無くなったり。

「じゃあ、私も寝るわ。近々あつちから来るでしょ。あんたらは知らないけど私のISはコアがよくわからないらしいし。」

「あややや、それならばご安心を。河童特性があります。」

「八坂様と諏訪子様を加護を受けておりますから。」

「Excellent。さて、そろそろセシリアも帰ってくるわ。そろそろ戻りなさい。」

「あやや。それもそうですね。では失礼しま。」

「戻りました……わ……」



最悪のタイミング。

天狗たちが出ようとした瞬間、セシリアと鉢合わせ。セシリアは状況がよくわかっていない様子。

「あやややや。同居人の方も来たみたいですのでこれで失礼。」  
「私も戻ります。ではおやすみなさい。」

青巫女と天狗が機転が利いて助かった。

うまくただの客人みたいに考えてくれそうだ。

「え〜と・・・今のかたがたは？それに片方転校生の方ではありませんでした？」

「まあね。ちよつとした知り合いだったから。」

「そ、そうですよ・・・」

うまく誤魔化せた。ちよろいもんね。

Stage9 天狗に青巫女に・・・もう幻想郷なくなったんじゃないの？  
なげえ。凄く長くてすいません。

早苗はともかく文は情報収集的にたまーに出ています。たまに薫子  
さんと一緒に出てきます。  
でも今後出番は暫くありません。

次は鈴戦・・・・の前に早苗と文の紹介かな。

設定資料集その2 ～天狗と早苗のIS～（前書き）

今回は文と早苗のIS紹介。

紹介したはいいけど文の出番があるかどうかともわからない。  
だって文三年なんだもん……

ちなみに、東方勢のISは基本的に無装甲。ノースキン

まあ東方は（黄昏を除いて）当たったら負けだし……

防御は甘え（キリッ

## 設定資料集その2 ～天狗と早苗のISS～

ISS名：天魔

搭乗者：射命丸文

コア：妖力の塊

待機形状：愛用の山伏帽子。

展開形状：私服（だが帽子がない）。

初期兵装  
フ  
レ  
セ  
ッ  
ト

特殊兵装【鎌鼬ベ어링】

文本人のスペルカードからの派生武装。

周囲に鎌鼬のバリアを展開。

バリアに振れると風に切り裂かれる。

近距離用というわけではなく銃弾も引き裂くことはできるが、ビーム兵器は防げない。

中々遠距離対応斬撃ビット【レイビーズバイト】

文の部下、犬走椋のスペルカードからの派生武装。

敵の上下に展開し、敵を追尾しながら一定感覚で噛み付くように突撃する。

噛み付きが成立するほどビットが増え、最終的には片側5体とかなったりする。

地味に展開し得。

特殊兵装【ハイドロカモフラージュ】  
文（というより天狗）の配下、河城にとりのスペルカードからの派  
生武装。

ぶっちゃけた話ステルス。

特殊兵装【ラピッドショット】

文のライバル、姫海棠はたてのスペルカードからの派生武装。  
相手の射撃を撮影し、そのまま相手に返す武装。  
まず相手の射撃の発生源と射撃そのものの両方を撮影する必要があ  
るため、大分面倒。

しかし生粋の記者である文にとっては楽勝物であり主な武装である。

拡張武装  
リコライザ

容量が無いため無し。

主にラピッドショット容量に食われている。

特殊能力：突風を操る程度の能力

文本人の能力をそのまま強化したもの。

追い風で自分を加速させたり向かい風で相手を減速させたりする。

特殊兵装もピーキーなものが多い。

また、自分に台風を付与し、只管突進するという荒業もできる。（

幻想風摩と名付けたらしい。）

射命丸文の専用機。

射撃戦では撮影して覚えつつステルス発動 幻想風摩が基本コンボ。  
元々視認するのも難しいほど速いのにステルスにする意味はあるの  
か？

あのステルスハイパーセンサー無効化するんです。

完全に見えないし突進早いので寧ろ偶然の事故に弱かったりする。  
ガチガチの近距離型の癖に妙に対射撃が強い。

IS名：非想天則

搭乗者名：東風谷早苗

コア：八坂神奈子及び洩矢諏訪子

待機形状：お気に入り入りの蛙と蛇の髪飾り。

展開形状：いつもの巫女服の背後に御柱、さらに諏訪子の帽子がの  
つかる。

本当は非想天則型にしたかったが二柱に大反対されたい。

フリセット  
初期兵装

特殊兵装【モーゼの奇跡】

早苗本人のスペルカードからの派生武装。

ロックした相手の頭上に自分を転送する。

そして真下の相手に重力加速した拳を加える。

カクゴハヨイカーオロカモノメー

特殊兵装【オールウェイズ冬眠できます】

早苗の仕える神の一人、洩矢諏訪子のスペルカードからの派生武装  
(?)。

一定時間無防備になるが、眠ることによってシールドエネルギーが回復す  
る。

だが数十秒はかかるので多対多または多対一用かもしれない。

### 中距離対応弾幕兵装【神の粥】

早苗の仕える神の一人、八坂神奈子のスペルカードからの派生武装。米粒のような弾幕を相手に向けてばら撒くが、米粒の見かけや大きさはフェイク。米粒の周りには砲弾ほどの隠し弾頭があるため、かなり避けにくい。拘束力は随一。

中、遠距離対応追尾型打撃ビット【エクспанデット・オンバシラ】  
早苗の仕える神の一人、八坂神奈子のスペルカードからの派生武装。背後の御柱を射出し突進させる。かなり硬い為相殺はまず無理。

### 拡張装備 リコライザ

近距離対応運試し兵装【乱れおみくじ連続引き】

早苗特性おみくじを5個連続で引く。連続引きとあるが別1個でもいい。

大吉、中吉、小吉、凶、大凶の全五種類。

小吉を最低威力として大に近づくほど威力が高まるが大凶の場合自分も巻き添えを食らう。

大吉ならそんなことはないが爆発が当たりにくい。

そもそも運試しなのでどれが出るかわからない。五個引いた挙句全部大凶だとダブルノックアウトもあり？

特殊能力：【奇跡がおきやすい程度の能力】

かなり曖昧な能力だが、何かと【奇跡的なこと】が起こる。

地上戦で相手がうっかり転んでしまったり、銃を撃っていたらジャムったり。

とにかく奇跡的なことが起きやすい。だが乱れおみくじには影響が出ない。

何か干渉しているのかもしれないが詳細不明。

東風谷早苗の専用機。

シールドエネルギー回復するが無防備になるオールウェイズ、  
自分を相手の真上に転送するモーゼの奇跡、

完全な運試し武装の乱れおみくじ、

見た目に反して物凄く当たりやすい神の粥と、

まともな武装がエクспанデットしかないという特殊すぎる機体。

また、コアが神奈子と諏訪子そのものなのでIS中にも会話が可能。  
寧ろこの機能が大きく前面に出て三人で戦っているようなもの。

このISの一番の強みかもしれない。



設定資料集その2 天狗と早苗のISS (後書き)

文達本人の説明かと思ったか？

ISSだよ！

はい、すいませんでした。

今回はまだ出ても無い二人のISS紹介。

前書きにもありましたが、文のISSは出番が来るかどうか不明。

文本人の出番がこれ以上あるかも不明。

こんな予定で大丈夫か？

(こんな作者より)一番いい作者を頼む。

次回、鈴戦。

ついにデデデデストーリーが来る？

Stage 10 くきつとおお、はやいはやいとかがお、こわいこわいとかが

鈴戦だと思ったか？

まだだよ！！

もう次回予告やめようかな・・・なんか次回予告通りに進みそうにないし・・・

ハッ！これが次回予告詐欺・・・！？

Stage 10 くきつとおお、はいはいとかおお、こわいこわいとかやっ

朝。生徒昇降口に張られた一枚の新聞。

文々。新聞とものすごく既視感を覚えるものだが、

内容はものすごく簡単（だが長い）で、分けるところとなる。

・注目の男子、織斑一夏特集 織斑一夏の部屋番号・同室者  
織斑一夏ハーレム競争度 本命篠ノ之箒 対抗セシリア・オルコッ  
ト 大穴布仏本音

- ・各年クラス代表戦注目カード
- ・三年生スカウト候補名簿

………最初の時点でいいのだろうか。

何気に部屋番号と同室者の名前まで書いてやがる……

あのマスゴミ、確かにあの話のことは書くなと言っただけど、別にいろいろ書きすぎでしょ……

地味に半分ぐらいまともなのがムカつくけど。

「あ、ようレミリア。」

そんな感じで新聞を見つめていると一夏が来たようだ。

「御機嫌よう一夏。人気者みたいね。新聞できてるみたいよ」

「ああ、あの射命丸先輩……の……」

一夏、絶句。

まあそりゃあそつでしょうね。

「いや、ハーレムって・・・まあこの状況がハーレムなのはある意味認めるがそんないもんじゃないんだぞ・・・？」

なんか愚痴りだした。

頑張れ一夏。精神的にも。

「まあいいじゃない一夏。『最終的には殺す相手かもしれないしさ。』」

『

途中からぶらいベーとなんとかを交えて一夏を慰めてみる。  
便利ねーこれ。

「よくないって・・・てかさんな実感わかねえよ・・・」

「まあまあ。とりあえず代表戦注目カードでも見て落ち着きなさい。  
一年の注目カードは・・・第一試合、一組代表 織斑一夏V  
S二組代表 鳳鈴音・・・ふむ、まずいわね。」

「まずいつて、何が？」

「あつちには早苗がいる。弾幕回避術、弾幕形成術にたけている連中ばっかだから・・・一夏！」

「は、はい!？」

「放課後、近距離戦闘の修練よ。三年の知り合いも呼んでおくから安心しなさい。」

ちなみにもちろん天狗のことである。

あいつもどちらかといえば肉弾戦闘向きである。超高速の。

「いや、安心できないし・・・てか、もう幕とかセシリアとかもいるぞ?」

「雑魚は引っ込ませるわ。」

「ああ・・・そうですか」

諦めたように頂垂れる一夏。  
私には生半可な理屈は通用しない、とわかってもらえたみたい。よ  
かったよかった。

さて、その後特に語ることも（本当に）なかったため放課後、第三  
アリーナ。

場にいるのは私、一夏、天狗の三人。

「あややややや。レミリアさん、私にも三年の仕事というものがあ  
るんですよ?」

「知らないわよそんなこと。大体あんたのことだから授業は投げ捨  
てるんでしょ?」

「あやや。これは一本とられましたなあ。」

「あー……え?」

どうやら三年の天狗がいることに戸惑っているらしい。  
まさか本当に来るとは思ってたっけの?

「さて。とりあえず天狗と……十秒戦闘維持しなさい。」

「十秒?いくらなんでもそれだけって……」

「あややや。レミリアさん、十秒とはまた気の長い。五秒で十分で  
すとも。」

あや、五秒なのに十分とはこれいかに。」

「知らんわ。じゃ、始めていいわよ。」

天狗と一夏もISを起動し、若干身構える。  
てか幻想郷の連中は揃ってISは装甲がないのね。まあ防御は甘えだから仕方ないっちゃ仕方ないんだろうけど。

「・・・では、行きます。」

す。と発音した瞬間、一夏は100mほどぶつとばされていた。スペルカードも使っていないしおそらくはそのままの突進だろう。

「では一瞬で終わらせて頂きます！竜巻【天孫降臨の道しるべ】！  
吹っ飛ばされた一夏の真後ろにいた天狗が竜巻を纏い、一夏に襲い掛かる。

反応が遅れた一夏は竜巻に飲まれ、切り裂かれながら上空へ舞い上がっていく。

「いやあ、やはり時代は速さですなあ。」

竜巻で舞い上がった一夏の上に飛び上がり

「突符【天狗のマクロバースト】」

天狗の足元から放たれた突風が一夏を地面に叩き付ける。  
さらに叩き付けた際に起きた風が一夏にさらに傷をつける。

「な・・・」

「ではフィニッシュです。突風【猿田彦の先導】！」

真上から真下に、重力と風の加速が追加された突進。

大分ダメージを受けた一夏に避けれるわけもなく・・・

「いやあ、少しハッスルしてしまいましたなあ！」

そっぴい頭を搔く天狗。

私たちの目前には完全にダウンしている一夏。  
何もできなかつたわね。本気で。

「やりすぎよ天狗。ISの武装は一切使っていないんでしょう？」  
「あやや、おわかりになれますか？いやあ、このISの武装では  
鎌鼬ベールリングが関の山。自分で出すしかないのですよ。まあこの  
ISには風を操る能力がついているようなので相乗効果が出ますけ  
どね。」

「いいわねえ。こちらら霊夢らしさが出たからか射撃が当たりにく  
いだけよ。」

「あややや。何をおっしゃいます。レミアアさんほどの方に射撃が  
当たらないのなら格闘戦に持ち込むしかない。しかしあなたの身体  
能力ならば楽勝でしょう。」

「・・・これまた息を吐くようにベタ褒めできるわね、あんたも。」  
「仕事ですから。」

「・・・はあ。一夏ー生きてるー？」

「な、なんとか・・・」

「とりあえず、これとまともに戦えるようにするわよ。そうすれば  
生半可なISはノロマも同然。」

「そりゃあ当然ですとも。天魔様の加護を受けた私を捉えるなど不  
可能！まさに最速！」

「やかましい。」

数分経ち、やっと回復した一夏が立ち上がる。

「な、なんとか回復してきた・・・よし、いける！」

「あやや。いい度胸です。度胸のいい人は好かれますからねえ。」

「つまり、射命丸先輩を目で追えればいいんだろ！？」

「それだけではありません。風や気配で追うのです。まあ私は風を

操りますので結果どうしても追うことはできません。まあハンドエとしてハイドロカモフラージュ、まあステルスは使わないでさしあげましょう。」

「ああ・・・やってやるさ！」

一夏が上空で天狗に弄られている中、私は背後にある気配を感じた。「何の用よ、雑魚共」

「だ、だれが雑魚だ！」

「そうですわ！わたくしが雑魚なわけがありませんわ！」

予想通り、しのののさんとセシリアだった。本当に挑発に弱いな、こいつら。

「雑魚を雑魚と言って何が悪い。で、何の用？一夏なら私たちが借りてるけど」

「それですわ！一夏さんはわたくしと練習をするはずだったのですわ！」

「そうだ！わたくしと練習をするはずだったのだ！」

「あら篠ノ之さん？耳が遠くなっただのではなくて？一夏さんはわたくしと練習するのですわよ？」

「お前こそ耳が遠くなっただんじゃないか？一夏はわたくしと練習をすると言っていた。」

なんか急に現れたと思ったたら突然二人で小競り合いを始めた。何がしたいのこいつら。

「まあ、文句があるなら上見てみなさい上。」

「上？」



上、頭上では一夏がなんだかよくわからない速いものに襲われて  
いる光景があった。

速いものとは当然天狗のことである。

自称幻想郷No.1の速度の女は伊達じゃないんでしょうね。きつ  
と。

「一夏さんと・・・あれは、だれ、ですの・・・？」

「速い・・・ここから目で追うことすらできない・・・!？」

しなののののさんとセシリアは天狗の速さに言葉も出ないようだ。  
いや出てるけど。

「私が独自のツテで呼んだのよ。なんかこの学園にいたからね。」

「だ、だれですの!？あんな操縦できる方なんて一年に見たことあ  
りませんわ!？」

「誰が一年つつつた？あいつは三年よ。」

「・・・え?」

「いや、三年。」

「三年の方に、知り合いがいるのですの!？」

「まあちよつとした新聞記者と購読者のな関係だけだね。」

「つまり、その三年に一夏の稽古を頼んだ、と？」

「まあ定期購読してるしそんぐらいのことやらせてもバチ当たらな  
いと思つてね。あーそこ危ないわよ」

「え?」

ズドーン。とセシリアたちの背後に何かが派手に墜落した。

「「……………え？」」

「いやー。なかなか筋はいいですね。まさか十数分で私を捉えてしまつとは。」

「一夏、生きてるんでしょね？IS使つても人間よ？」

「それは問題ありません。紛いなりにも三年ここにいますから。」

「……………え！？いつのまに!？」

先ほど上空で戦っていた天狗が私の真横にいるのが奇怪に思っているんでしょセシリア。

顔に出過ぎ。

「ああ、これはどうも。私三年二組新聞部部长射命丸文と申します。織斑一夏さんの幼馴染でさらに篠ノ之束博士の妹と名高い篠ノ之箒さんとイギリス代表候補生のセシリア・オルコットさん。お噂はかねがね。して、何の用でございましょうか？」

天狗は脚だけじゃなくて口も早いらしい。私にはできない。あの早口は。

「はっ、そ、そうだ！なぜ三年が一年の一夏に稽古なんかつけている！」

「それはこちらのレミリア・スカーレットさんに頼まれてしまったからです。古くからの購読者様の頼みとあらば受けるが人道、いや天狗道。それがなくても唯一の男性IS操縦者の織斑一夏さんと何かしらの関係を築きたいと考えるのはIS学園にいる生徒としては何年生でもそう思うものですよ？」

「け、結構ですわ！わたくしと、篠ノ之さんがいるのですもの！」

「たとえばの篠ノ之博士の妹さんとイギリスの代表候補性といえど

も一年生。知識だけではどうにもならないこともあるものです。それに確か篠ノ之箒さんのISランクはC。織斑一夏さんがいくら素人だとしてもISランクが低かったらむしろ自分の修練を考えなくてはならないのでは？あとセシリア・オルコットさんといえば見ましたよ、一年一組代表決定戦。織斑一夏さんにあと一步のところまで迫られていたではないですか。確かにギリギリ、拮抗した相手との修練は効果が高い。しかしずっと同じ相手では修練の意味もなし。私のIS、天魔は対射撃用の格闘戦機体です。聞くところによると織斑一夏さんはここのところずっとあなた方と特訓していたとか。少複数の拮抗した実力の相手よりは一人の大きく離れた相手のほうが効果は高いと私は考えますがね。」

「天狗、長い。」

「あやややや、これは失礼。」

若干熱中していたようで、指摘してみるとあっさり頭を下げる天狗。営業スマイルつてすごい。

「・・・あの、質問、いいのですの？」

「はいどうぞ。セシリア・オルコットさん。」

「先ほどから聞いているところどころ【天狗】という単語が出ているのですが、どういうことですか？」

「ああはいはい。天狗についてですね。私射命丸文は速いものに目がなくてですな。幼いころから風より速いといわれる天狗にとても憧れていたのですよ。そしてずっとあらゆる動きが速くなるように努めていたらいつのまにか立派に速くなっていったもので。いつのまにか私は自分を天狗と名乗ったりしていたのですよ。ちなみに私のISもそれにちなんで天魔と名付けました。」

「天狗、あんたそれ三年間ずっと言ってきたの？」

「ええ。人間に扮しなければならぬ身といっても天狗の性。どう

しても隠せないものもあるのですよ。』

セシリアたちも納得はいかないものの天狗の实力は認めざるを得ないらしい。

「あ、そうだ。一夏ー生きてるー？」

先ほど派手に墜落した場所にはいつぞやの授業のようにでかい穴が開いていた。

その中心にはボロボロの一夏が。やっぱりやりすぎたんじゃないの？

「あやややや、前言撤回しましょう。少しやりすぎたかもしれません。」

「ダメ天狗ね。」

「返す言葉ありませんよ。」

セシリアとしてのさんが一夏に駆け寄るも、一夏は気絶してるっぽく反応がない。吸血鬼の視力ってすごい。

「で。もう一度聞くけど一夏は次の対抗戦でどうなると思う？」

「鳳鈴音さんの乗機、甲龍は一応近距離格闘型です。私の速さを見慣れることができればおそらく余裕でしょう。」

「進行度合いは？」

「上々ですね。まぐれかもしれませんが数発剣が掠りました。」

「まあそれなりに期待しましょ。一夏はダウンしちゃったし。」

「ではこれで失礼します。薫子と次の新聞のテーマづくりをしなければならないので。」

ぱしゅん、という効果音を残し天狗が消えた。

天狗の中でも最速らしいあいつらしい。

とりあえずボコった詫びでもしないとね。とか考えながら、セシリ  
アと篠ノ之さんに運ばれる一夏を追った。

Stage10 くきつとおお、はやいはやいとかがおお、にわいにわいとかが

くまめちしき

東方勢は弾幕を張ることはできないが

【黄昏系スペルカードを使う】ことはできる。

さて、そろそろナンバーを出したいぜ・・・早くデデデデストロ  
ーイナンバーをBGMに作業したい・・・

Stage 11 　　これまた面倒なことになったわ。青巫女が使い物になればいい

鈴戦　侵入者襲来。

今回、奴が来ます。

あの伝説のイレギュラー嫌いのやつが………！

あと今回、視点切り替えが妙に多いです。注意。

Stage 11 〈これまた面倒なことになったわ。青巫女が使い物になればい

クラス対抗戦当日。

あれからほぼ毎日天狗に一夏を訓練させた（暇なのね、三年って。）結果。

正直私でも驚いた。

ただの人間である一夏が少し鍛錬するだけであの天狗を捉えられるようになったというのだ。ハイパーセンサーありだが。

まあ天狗と吸血鬼に鍛えられた人間がその辺の雑魚に負けるわけもないでしょう。私何もしてないけど。

ちなみに私は千冬の許可をとってIS起動中、観客席にいる。いちいち許可を取らなければならぬのが何とも面倒くさい。

そして、今の私はもう一つ、面倒事が残っていた。それは・・・

「いやーレミアさん。まさかあなたもこんなところにいるとは思いませんでした。結構人気なんですよ？ISって。この世界に来れたなんて幻想郷は違いますね。」

「ここどう考えても幻想郷じゃないからね、もうちょっとまわり見て考えなさい青巫女」

「ねーねーれみー。幻想郷ってなにー？れみーの故郷？」

「ある意味第二の故郷よ。あんまり深く聞かないで私もよくわかってないんだから」

そう、私の左右に位置取った青巫女と本音である。

ぶっちゃけうるさい。



「ところでレミリアさん。それがレミリアさんのISなんですか？  
霊夢さんの巫女服みたいですね。それになんでここでIS起動して  
るんですか？」

「青巫女、私が太陽に弱いもの知ってるでしょうに。それに霊夢の巫  
女服っぽいのは仕様よ仕様。」

「何で腋でてるのー？冷やしちゃうよー？」

「んなの私が聞きたいわよ、この服の設計者に聞きなさい。よく知  
らないけど」

両方が遠慮なく私に話しかけてくるため両方に対応する必要がある。  
しかも先ほどの会話で青巫女はどうやらこの世界を幻想郷の一部だ  
と考えているようだ。

こんな鉄っばい幻想郷があるかつつの。河童の仕業よそれ絶対。

そんなことを言ってる間に、一夏が出てきた。

一夏が相對するのは中国代表候補性鳳鈴音専用機、【甲龍】シエンロン。

全体的に紫・・・むらさき色を基調とし、左右に刺々しい部分が浮  
かんんでいるのが特徴的。あれそのものが武器よね。ガンと殴る感  
じで。

そういえば、中国って確か美鈴の故郷だとかなんだとか聞いたこと  
がある。

2500年の伝統だとか言ってたけど、十数年前の技術にあっさり  
飲み込まれる伝統（失笑）だったみたい。

美鈴が聞いたら泣きそうだ。

くこつから一夏視点く

これまで、セシリア・箒・射命丸先輩・レミリアとえらいメンツ）とは言ってもレミリアは見てるだけに等しかったが。）に訓練されてきた俺。

目の前の鈴にも、今は負ける気がしない。射命丸先輩との特訓の成果、今こそ出す時だ。

「今謝るなら、痛めつけるレベルを下げてあげてもいいわよ？」

鈴から通告が入る。

何やら誤解を与えてしまったようで、俺に対し何かと怒っている鈴。だが俺もそんな痛めつけられたいようなマゾではない。

「冗談。お前こそ、手加減してやるから本気でかかってこいよ！」  
「んなつ・・・言ってくれちゃってえ！」

鈴が背中から青竜刀を抜き、俺に迫る。

俺の脳裏に映るのは、訓練の時の射命丸先輩。

どんな距離でも一瞬で届くほどに速く迫り、俺を吹き飛ばす先輩。今でもハイパーセンサーがついても目で追うのがやっとだが、鈴のスピードならば・・・

「見える！」

俺に迫る青竜刀に横から雪片を差し込み、受け流す。

鈴のISの全容がわからない以上、油断は禁物。落ち着け、落ち着け俺。

「ふーん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。」

鈴はいまだ余裕綽々の様子。俺を見くびっている、とかじゃなくてまだ手があるってことなんだろう。

「けど……！」

鈴は左手にもう一本の剣を生成。

こちらは一本、あちらは二本。素人目に見ても不利なのは確定している。

「でりゃっ!!!!!!」

両手の剣を交互に叩き付ける鈴に対して、俺は防ぐことしかできず。

「確かに、一撃は重い……だが！」

入れ替える瞬間、鈴に向けて雪片式型を振り上げる！

「遅い！」

剣は鈴のスレスレのところを通った。

俺的には当たりのつもりだったのだが。つまりは鈴は予測していたことになる。

すごいな、代表候補生ってのは。

「どうしたよ鈴。ISってのは高機動戦闘してこそなんだろう？そんな鈍重じゃあゲームでも弱キャラだぜ？」

レミリアは基本的にISの訓練は見ているだけだった。理由は不明だがISとは別に教えてくれたことがある。それは心理戦の心得。こういう年齢の女子は何かと挑発に弱い（個人差あり）とのこと。心理戦で隙を作れば格上でも難なく倒せるとか。

まあそのためには少し突き所あれば挑発。そして常に余裕の表情、だとか。

確か鈴には禁止ワードみたいなのがあったが・・・なんだっけか・

「誰が、ノロマだあああああ!!」

どうやら考えている間にキレていたらしい鈴がさらに迫る。

怒り補正なのはわからんが、動きは速くなつたがまだ十分見えるし、攻撃は少し単調になっている。

心理戦すげえ。

「ほらどうした！俺を痛めつけるんじゃないのかよ!？」

「お望みとあらば、やってやるわよ!!」

鈴の両肩のパーツが開いたと思つた瞬間、俺は何か【打たれた】。

「・・・ツ、なんだあ!？」

一応身構えていたためダメージ（痛み）はあまり無かつたが、何をされたのかは一切わからない。

おお、こええこええ。

「今のはジャブだからね。」

そう鈴が言った途端、両肩のパーツが再度開く。まずい、と思い大きく動いて避けたが、確かに何かが通り過ぎた。だが何かはわからない。

「よく躲すじゃない。この龍砲は、砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに。」

おお、ちょうどよく鈴が教えてくれた。何をしたか教えてくれるなんて優しいじゃないか鈴。

「なーに言ってるんだ。砲弾はともかく砲身はその両肩のやつだろ？丸見えじゃねえか。」

「ちつがーう！砲身はこれじゃな・・・っと。」

流石に誘導には引っかからなかった。鈴も成長しているわけだ。胸以外。

「・・・今、なんか失礼なこと考えなかった？」

「いや。鈴も意外と単純じゃなくなってるみたいで驚いてるだけだ。」

「意外にって何よ意外にって!!」

「そのまんまの意味だよ。さ、そろそろ本気で行くぜ!」

「当たり前でしょ!」

高速で向かう鈴に対し、俺も同じように高速で向かう。俺の雪片式型と、鈴の青竜刀がぶつかろうとしたとき

激しい爆音をたてながら、何かが【墮ちた】。

「ここから再度レミリア視点」

「一夏が若干優勢、いや、互角の勝負が繰り広げられていたなか、何がアリーナに落ちた。いや、堕ちた……？」

「何が起こった……？」

「ここで作るとしたら、悪の怪人ですよ！きつと！」

「少し黙ってなさい青巫女。」

『試合中止！生徒は速やかに退避せよ！』

放送とともに、周りの生徒連中が一気に慌てだす。

それと同時に、目の前に大きく壁がせり出す。防護壁ってやつかしら。

「無粋な客よねえ……これじゃあ続きが見れないじゃないの。」

「正義のIS対謎の敵！これが見れないなんてそんなこと……！！！」

「だから少しは状況考えなさいよ青巫女。本音。先に……」  
逃げてたわね。」

いつの間にか私の右側を陣取っていた本音がいない。逃げるのはやつ。

「仕方ない……突き破るしかないわね。」

「この世界、幻想郷では常識に囚われる必要は一切ない！神奈子様、諏訪子様！行きますよ！」

青巫女もISを展開し、やる気満々のようだ。  
てかなんで誰も彼も私服（巫女服）なのよ。私だけ他人（霊夢）の  
じゃないの。

「神槍【スピア・ザ・グングニル】！」

「神奈子様！神祭【エクスペンデット・オンバシラ】！！」

私のグングニルと青巫女の御柱が壁にぶち当たるも、少し焦げる程  
度。

固っ！？

「いやー大変なことになってますねー。現場が見れなきゃ新聞にも  
できません。」

「天狗！あんたいつからいたのよ！」

「神祭、の辺りからですね。」

「なら手伝えよ！？」

「無意味ですよ。あらゆるISの攻撃を防ぐための防護壁ですから。  
どうにも壊せません。しかも、廊下への扉のシャッターが下りてい  
ます。実質閉じ込められていますね。」

「・・・天狗。一つ聞くわよ。」

「はい、どうぞ。」

「この防護壁って、そうとう固いのよね？」

「はい。どうやらそれなりに希少な素材らしく、全てのアーリーナの  
防護壁にするだけで精一杯だったそうです。」

「だったらさ、あっちの扉のシャッターは突き破れる・・・ってこ  
とよね？」

「・・・なるほど。レミリアさんも頭の回転が早い。」

ニヤリと私を見る天狗。

おそらく試していたのだろう。私らを。

「……つまり、どういふことですか？」

早苗は不合格っぽい。

「扉とか廊下のシャッター突き破りながらアリーナ内部を目指すってこと！いくわよ青巫女！」

「道案内はお任せください。伊達に三年生してませんから！」

〈一夏視点〉

突然落ちてきた何か。煙が晴れずそれも確認できないまま、十数秒が過ぎた。

ステージ中央に熱源 所属不明のISと断定

「所属不明のIS……？」

「一夏、早くピットに！」

「鈴を置いて一人で戻れるかっつもの！」

「何言ってるのよ！私の方が強いんだからね！！！」

「一人でできることなんて限られてるだろ！？素人だが、それなりにできるとは思ってるさ。」

「一夏……」

「ともかく、落ちてきた奴が何か確認しないと……ッ！？」

鈴と言い合いをしていると、さらに空からレーザーが下りた。



それは何かが墮ちた場所に入り、爆発した。

今の状況から考えられることは一つ。

墮ちてきたISが完全に破壊された、ということだ。

「嘘……一夏……今……！」

鈴の声が僅かに震えている。

ISは人が乗っていないければ動かない。

そして今、そのISがレーザーに当たり、爆発した。まず搭乗者は生き残れない。

目の前でそんな状況が起こり、少しだけ困惑しているのだろう。

「お、落ち着けよ鈴。とりあえず今は、レーザーの……」

上空からロックされています ISではありません 退避  
してください

「ISじゃないのに上空からロック？退避しろって……」

「ッ！一夏！上……！」

鈴が指差す方向を見る。

そこには

「力を持ちすぎるもの」

ISを纏わずに空を飛び

「秩序を破壊するもの」

見るからに危険そうな武器を持った

「プログラムには 不要だ

」

羽のある小さな女の子がいた。

Stage 11 　くこれまた面倒なことになったわ。青巫女が使い物になればいい

正直に言います。おぜうさまたちの出番が来るかどうかわかりませ  
ん。

あと無人機さん大した出番もなく退場。篠ノ之博士、お許しください  
い！

次回、？無双。

あれ、主人公ー夏だよね……………？

### 設定資料集その3 くナインボール・チルノく

ナインボール・チルノ

ISをただ破壊して周る三人組の一人。  
リーダーのようなもの。

背中には三対の赤い水晶のような羽が生えており、そこに武器が内蔵されていたりもする。

羽のサイズと武装のサイズが見るからに合っていない。

ISを破壊する理由は不明。

チルノの姿をしているが本人との関係も不明。

つまりは何もかも不明。

話すとなぜかノイズのようなものがかかる。

#### 武装

近距離用レーザーブレード\*2

フルアーマーでもない限り振ると出る光波でも真っ二つになるほどの高出力レーザーブレード。

両腕に装備。

近、中距離対応パルスガン\*2

連射力に優れるレーザー(?)兵器。

弾幕用かと思うべからず、一発一発が十分な火力を持っている。  
両腕に装備。

中距離対応レーザーライフル\*2

高出力のレーザーライフル。  
アリーナ上空のバリアを破壊するほどには協力。  
両中羽に内蔵。

近、中距離対応ガトリング\*1  
圧倒的弾幕を張るガトリング。  
パルスガンと同時にまくことも可能なため油断すると蜂の巣にされる。  
右の上羽に内蔵。

遠距離対応垂直降下型ミサイル\*8  
上空に発射した後拡散し、相手を追う高熱量ミサイル。  
最初に撃てばあとは自動なので撃ち得。  
左の上羽に内蔵。

遠距離対応グレネード\*2  
高火力高反動の典型的グレネード。  
爆薬ではなく粒子を含んでいるため、直撃すると危険。  
両下羽に内蔵。

プライマルアーマー  
ナインボール・チルノの周囲を緑色の粒子で囲む防護兵器。  
剣だろうと弾丸だろうとレーザーだろうと防ぐ。  
何度も当てられると粒子の充填のためにバリアが消える。

アサルトアーマー  
プライマルアーマーを全方位に解放し、一定範囲を消し去る。  
威力は絶大だがしばらくプライマルアーマーを張れなくなり、なおかつ周囲200mは草木一本生えなくなるほど汚染される。

備考：ISを装備せずに単独飛行が可能。  
他二名の行方は不明。

Stage 12 くあいつは結局何者なのよ。氷精なのかどうかも疑わしいく

今回、セカン党の方には謝らざるを得ないと思っています。

セカン党の皆様………すいませんでした。本当に。

Stage 12 くあいつは結局何者なのよ。氷精なのかどうかも疑わしいく

くしょっぱなから三人称視点。そんな計画で大丈夫か？く

突如現れた朱い少女、ナインボール・チルノ（以下チルノ）。

その姿を見て一夏と鈴は動けずにいた。

相手は敵。ロックされているためそれはすぐにわかる。

しかし、足が、体が竦んでいるのだ。

たとえば、目の前に突然熊が現れると一瞬身が竦み、動けなくなる。それと全く同じだ。

「 問う 篠ノ之束の所在地を知っているか 」

チルノが二人にノイズ混じりの声で話しかける。

少女特有の高い声にノイズが混じり、得体の知れない恐怖感が二人を襲う。

「 束さんの居所は…たぶん誰も知らない。自分で探せ。 」

「 そ、そうよ！大体何をするつもりなのよ！ 」

「 イレギュラー【篠ノ之束】の抹殺 　　そして全てのインフ

イニット・ストラトスおよびその搭乗者の排除 　　」

チルノは声色一つ変えず述べた。「篠ノ之束を抹殺し、全てのISとその操縦者を排除、つまり殺す」ということを。

「 束さんを抹殺……！？そんなこと、させるわけないだろ！ 」

「 大体、いきなりアリーナに入ってきてきて何のつもりよ！あんた何様



!?」

「…会話は終わりだ  
始  
」  
ターゲット二機確認  
排除開

突然一夏の視界からチルノが消える。

と同時に後ろからギエ、とひねり出したような悲鳴が鳴った。

「データ収集完了  
排除する  
」

「カ…ひゅ…」

一夏が振り向くと、そこには一瞬で近づいたのかチルノが鈴の首を片手で絞めつけていた。

尚且つもう片側の手に装備されたパルスガンが鈴の頭に照準を合わせており、抵抗を許さない。

「鈴を…離せよ!」

「…」

チルノに対し雪片を振り下ろそうとした一夏。

しかし、その雪片がチルノに当たることはなかった。

鈴を盾にしていたからである。

鈴も一夏もシールドエネルギーは残り僅か。そんな状態で鈴に剣が当たればとても生き残ることはできない。

「データ収集開始  
」

チルノは鈴を投げ捨てると、即座に一夏に接近し、両下羽からグレネードを展開、至近距離で一夏に打ち込んだ。

「ぐあ……ッ！」

一夏が吹き飛んだ先には既にチルノが待ち構えていた。キヤツチするように一夏の首を掴み。そして絞めていく。

「データ収集完了

排除開始

」

チルノが一夏を鈴と同じように投げ捨てる。それと同時に再度両下羽のグレネードを展開。一夏に向けて発射する。

「くっそお……！！！」

一夏は吹き飛ばされながら、なおかつ自分に迫るグレネードが見えた。

訓練によって鍛えられた動体視力。

それで自分の死が迫っていることがわかるのだ。

これほど恐ろしいことはない。

いくら身をよじろうとしても体は一切動かず、シールドエネルギー

もほぼ0に近い。

もはや、一夏にできることなど何も無いのだ。

「嘘だろ…嘘だろおおおお！！！！！！！」

叫んだとたん、目の前のグレネードが爆発した。

そして、今まで無表情だったチルノの顔が一瞬だけ困惑した。

そして、一夏の背中が何かにぶつかった。

振り向くと、息も切れきれの鈴が一夏を支えていた。

「げほ、けほっ…い、一夏、大丈夫!？」

「り、鈴!？お前こそ大丈夫なのか!？」

「大丈夫…とは言い難いわ。今の龍砲が最後よ。あとはもう双天牙月しか…」

「俺も元々雪片二型しかないし、今のシールドエネルギーじゃあ零落白夜も使えない。俺たち揃って満身創痍。対してあっちはほぼ無傷…：万事休す、か？」

「何言ってるのよ!あきらめちゃだめでしょ!？」

「とは言ってもな…」

「一夏あああああああ!?!?!?!」

突然、アリーナに響く声。

全員がその方向を見ると、出撃口には箒が立っていた。

「ほ、箒!？」

「一夏!男なら!そのような敵に勝てずに何とす…」

「ターゲット増加確認           データ照合           イレギュラー  
ターゲット篠ノ之束の肉親と断定           捕縛する           」

「まずい、箒!逃げろ!」

箒の声を聞いたチルノが一気に箒に接近する。

一夏が逃げるように叫ぶも、箒が反応する前にチルノは箒の眼前に到着していた。

「私を侮ったな           姿を現すとは           」

「あら？侮つたのはそちらじゃあないかしら？」

箒に伸ばされたチルノの手に紅い槍が突きつけられる。

その持ち主は巫女服型のISを纏ったレミリア・スカーレットだった。

「レミリア…！」

「どうもどうも織斑さんと鈴さん。これはまたフルボッコにされた  
ものですねえ。」

「早苗！どうしてここに！？」

「私が案内したのですよ。異常事態です。」

「射命丸先輩…」

一夏たちのそばにも射命丸文、東風谷早苗が到着した。

「…」

「御機嫌よう氷精。ただの最強バカのいたずら妖精が随分と派手に  
やっているわね。」

「データ照合…」

協力者と断定

「はあ？」

「お前たちは正式なインフィニット・ストラトスを使用していな  
い 故に戦う理由はない」

チルノが腕を下ろし、全員から距離を取る。

レミリア達は戦う気満々だったのだが、急に戦意が削がれる。

「…正式なISだったわね。あんたの目的は何？他にどんだけい  
るの？」

「全てのインフィニット・ストラトスの破壊及び全ての操縦者及び篠ノ之束の抹殺」

「違う。それは目的ではない、手段よ。何のためにそれをするか聞いているの。」

「私たちは修正者                   インフィニット・ストラトスにより世界は歪んだ」

私たちは歪みを排除する者                   」

「あなたのやり方は気に食わないけど、その目標には賛同するわ。で？5対1の状態でまだやるっての？」

「…排除失敗                   が                   」

チルノの両手に薄青いレーザーブレードが展開され、突然一夏に向かう。

レミリア・早苗・文の三人が一夏の前に立ちふさがる。

が、チルノは方向を急に換え、鈴の胴体にそのブレードを【突き刺した】。

「え……………」

エネルギーも枯渇しており、絶対防御が発動できなかった甲龍はその姿を消し、鈴は血を吐きながら地面に落下します。

「鈴……………リイイイイイン!!!!!!!!!!」

一夏が必死に追いかけて、なんとか鈴を抱き止める。



Stage 12 くあいつは結局何者なのよ。氷精なのかどうかも疑わしいく

はい、実質無双でした。

セカン党の皆様、お許しください！

一応先に言っておくと、ちゃんと鈴は生きてます。いやほんと。その先何があるかって…その辺、考えてませんけど。

次回、えーっと…なんだっけ？シャルトットとラウラさん？

何かラウラ戦でまた来そうでやだなあ？。

あ、チルノ達幻想狂（仮名）メンツ元を適当に募集します。

採用するのは1、2キャラでしょうけど。

アレンジ先はこちらで適当にやっちゃうので、とりあえず幻想郷メンバーでだれかトチ狂ってほしい人をコメントでお願いします。

ちなみに、今まで登場した人達＋霊夢は除外でお願いしますね？

Stage 12・5 歪ヲ断手切ルモノ (前書き)

さて、今回は番外としてナインボール・チルノ達側のお話です。  
弱グロ注意。

…弱じゃないかもしれないけど。

あ、ちなみに新メンバー二人はフィサリス&? 魅霊で。  
なぜかって？

他に凶悪キャラで探すと神キャラしか出ないからさ・・・Orz  
あとアマトとウズメエ…



Stage 12・5 〈歪ヲ断手切ルモノ〉

〈フランス 某所〉

「ジョイヤー!!!」

細い腕で扱えるのかと思えるほどの巨鎌を振るい、IS【ラファール・リヴァイヴ】を柄で殴り飛ばす女性、【小町】。吹き飛ばされたISは絶対防御も発動できないほど消耗していたため、ボキボキと肋骨が折れる音とともに壁に叩き付けられる。

「受けてみよ」

滑るように吹き飛ばされた先に鎌を構えながら移動し、小町はラファール・リヴァイヴをつかむ。

最早悲鳴すらも出せず、指一つ動かない。待つのは、絶対的な死。

「我が全霊の拳を……!!!」

小町が大鎌を高く振り上げ

「天に滅せい!!!!!!」

振り下ろされた大鎌は喉元に刺さり、そのまま大きく下に切り裂かれる。

胴体のみを縦に真っ二つにされた亡骸から噴き出る紅い血飛沫が小町の黒い着物をさらに赤黒く染めていく。

「これぞ天をも握る最強の拳……!!!」

鎌を高く揚げる小町。

その周りにはISだったもの、その操縦者だったものがただ転がっていた。

「イギリス 某所」

「……」

「フッフ……」

ある軍施設の中。

漆黒の導師服に身を包んだ無表情な女性【？魅霊】<sup>ハイメイリン</sup>と、紅？いドレスを纏い、妖艶な笑みを浮かべる女性【フィサリス】。

数機のISに囲まれる中、二人は一切危険と感じてもしいなかった。

「お前たち、何者だ!!」

ISを纏う一人が声を荒げるも、二人は一向に気にする拍子がない。

「…こんな形で再会でなんて、珍しいわ。」

「お前と会うことなどないと思いたかったのだがな」

「それはできないわ。私と貴女は表裏一体。離れたいのに離れたくない。近づきたくないのに近づきたい間柄なもの。ずっと一緒にいるし、ずっと離れ離れ。」

「…やはり、何度あってもお前のその知った風な物言いは好かぬ。」

「知っているわ。でも知っているだけ。私が変わえられることではないわ。私たちは舞台の上の登場人物。劇で殺戮を繰り返すだけの人形。窓から覗かれるだけの見世物でしかない。」

「しかし、私は今【此処にいる】。今此処で生きている。」  
「私も今ココニイル。今ココでイキテイル。」

「……いいだろう。このような数奇なことでも必然だと言うのなら。」

「私は今貴女と二人だけになる。二人で一つ。一つで二人。」

「遅れるなよ」

「そちらこそ。」

まさに一瞬の出来事だった。

やったことは何も難しくはない。？魅霊は手にワイヤーを出現させ、周りのISを全て首吊り状態に。

そしてフィサリスが空間を歪め、多数の空間の穴からレーザーをだし、全員を貫いた。

最早芸術とすら言える一瞬の内の殺劇。

死んだ者たちは全て、脳天に一つの穴が空いているだけだった。

「さあ、共闘した矢先だが、一手付き合ってもらおう。安心しろ、加減はしない。」

「それはうれしいわ。私も加減ができないから。」

数秒先には芸術ともいえる協力をしていた二人が、今は殺し合いをし始める。

これが、【夢幻の小窓の住人】による日常なのだ。

（某国 某所）

何処とも知れぬ場所。そこには四人の女がいた。

二人はISを纏い、もう二人は生身。

常識的に考えれば、生身の二人には勝ち目はないだろう。ISとは最強の兵器なのだから。

しかしどういうことか、ボロボロになっているのはISを纏った方なのだ。

「What is it? I noticed that fear Amateur?（どうした？怖気づいたのか素人？）」

「ナメ…るなあ!!!」

青のワンピースに緑の長髪、蝶のような羽を持つ【ジェネリス】の挑発に蜘蛛のようなISを纏った女性が向かうが、ジェネリスはその背後にレポート。その女性の腹に抱き着き

豪快にバツクドロップを決めた。

勢いがあり、それなりに重いISを身にまとい、さらにエネルギー消費により絶対防御もない。

その結果

グシャ

頭が地面に激突し、トマトのように無残に潰れる。

「I'm perfect fairy. And defeat

impossible。(私は完璧な妖精。敗北などありえない。

)

「あとは貴様のみ リーダーと思わしきターゲットも失踪

これで終わりだな」

ジェネリスの隣にたたずむのは、特徴的な紅いワンピース、そして水晶型の三対の羽。

そう、【ナインボール・チルノ】である。

「この私が…！この織む

ブルー・ティアーズをさらに蒼くしたような機体が、赤に染まる。言い切ることもできずに、【それ】はレーザーブレードで首を切り落とされた。

首から間欠泉のように噴き出る血。

つぶされた頭で地面が赤く染まっていく。

「排除完了 【ネスト】に帰還する」

「All right. People of my destiny. (かしこまりました。私の運命のひと。)」

この日だけで20以上のISが破壊され、その搭乗者もすべて殺されていったという。

証拠は一切残っておらず、何者によるものかも不明。

少しずつ、少しずつIS学園外のISが破壊されていく。  
彼女らの目的。IS全ての排除。  
それが叶う時はまだ遠い。

## Stage 12・5 〈歪ヲ断手切ルモノ〉（後書き）

正直に言います。

アニメ以降の部分はウィキペディアを参考にしています。だから情報量が少ない〃なんかいろいろおかしいでしょう。主に最後。

その辺はご了承ください。まだ一巻しか買ってないんです。

そして、小町・ジェネリス・ヘイちゃん・フィサ子の紹介は追々。今回は小町 or ジェネリス紹介でさらにその次で一巻終了になるかも。

ちなみに、DIE妖精ことジェネリスですが、このジェネリスって名前は即興です。何かレミリア互換のジェネリアとかいたような…まあ、その辺は川、一、く、何、気にすることはないといひじつじつ。

では、また。

## 設定資料集その4 〈小町・ジエネリス〉

小町

ISを破壊して周る団体（現在五人）の一人。

女性なのにやたら声が野太い。「ジョイヤー！」は気合を入れる際の掛け声のようなものだが、妙に連呼する。

自分より大きな大鎌【黒王】を使い敵をなぎ倒す。

自分の力をやたら【拳】と言っているがどう考えても【鎌】。

そこはどうしても譲れないらしい。

なお、小町の拳（鎌）の技は総称して死斗<sup>デッドれいけん</sup>霊拳と呼ぶらしい。

特殊技能

ブースト

あらゆる攻撃行動をキャンセルし前方に高速移動する。

キャンセルしてすぐにまた攻撃行動をすれば高速移動することはない。

滑るように移動するため若干シユール。

無制限に使えるわけではないが使い方が適格なため妙に強力。

距離を操る程度の能力

その名の通り距離を操る。

1mmの距離を1kmに感じさせたり、1kmを1mmのように進むこともできる。

そのため、小町の視界に入ればそれは大鎌の射程範囲に入ったと同じになる。



## 技術

### 死斗剛掌破

人魂を二個配置することでその間に熱線を出現させる技。

ふつとばし 設置 ブースト 設置で直撃する。

### 死斗羅裂拳

鎌の柄の中心部分を持ち回転させて鎌鼬を発生させ、最後に鎌を持ち替えて振り上げ、相手を打ち上げる技。  
どこからどう見ても【拳】ではない。

### 死斗天将雷撃

鎌を振り上げ、柄の部分を叩き付ける技。

何故か打ち下ろす技なのに当たった相手は打ち上がる。

## 釵

相手の足先を鎌の柄先で押しつぶし、同時に距離を操ることで身動きを取れなくする技。

一瞬の間隙あらば剛拳（鎌）で容赦なくフルボッコにされるだろう。

### メオシミスラナーイ

### バニシングストライク

ジョイヤー！の掛け声と共に鎌の柄で相手を薙ぎ払う。基本的に相手は地面に平行に吹き飛ぶのでブーストで追いかけて追撃を食らわせる。

### ワンチャンアレバカテルウー

秘孔新血愁

空中にいる敵をマント（何故か何度も復活する）で包んで、鎌で薙ぎ払う。

このマントやたら丈夫でグレネードを打ち込まれても大丈夫という優れもの。

でも鎌で薙ぎ払われるとバラバラになる。

夢想転生

極限の哀しみを背負うことによりあらゆる攻撃を7回まで無効化する。決して誤字ではない。

基本的に発動するときの哀しみは【それ、拳じゃなくて鎌だよね】と言われたとき。

死斗滅天把

「天に滅せい！！」でおなじみの死斗霊拳奥義。

相手をつかみ、謎の威圧で動けなくなった後、鎌を大きく振り上げ、

「天に滅せい！」の掛け声を共に振り下ろす。

相手は死ぬ。

相手の身長にもよるが胴体のみ縦に真っ二つは珍しくない光景。

ジエネリス

ISを破壊して周る団体の一人。

通称尖兵。

英語でしか喋らない。

チルノに心酔しており、チルノを私の運命のひとつと呼ぶ。（ただし英語で）  
攻撃は非常にシンプルだが、シンプル故えげつない。  
スライディングから突然投げたり投げたと思ったら逆に投げられていたということもよくある話。  
しんぷるいずべすと。

実は空中の敵には微妙に弱い。

## 特殊技能

### テレポート

短距離ならば無制限に一瞬のテレポートが可能。しかも連続で出せる上テレポートとテレポートの間はほぼない。

さらにいうと、テレポートはジェネリスにとって歩くも同然であり、それによって起こる疲労も皆無。

弱点が挙げるとならば、空中にワープすることができない。

## 技

### バックドロップ

テレポートで敵の背後に回り込み、バックドロップを決める。

### 衝撃波

ジェネリスと同じ姿をした（緑色のオーラを纏っているが）衝撃波を正面、斜め上、真上に各3way、計9体放つ。

出す際の間がほぼなく、銃弾もかき消すので出し得。

実は空中の相手にはこれしか対応技がなかったりする。

Stage 13 くありえないなんてことはありえない。幻想郷にこそふさわしい  
久々の更新です。

ずっとインスピレーションモチベーション云々の問題でかけずに  
ました・・・

こんな作者で大丈夫か？

一番いい作品を頼む。

誰かこんなじゃなくてもっと面白いものを書いてくださらないだ  
ろつか・・・(チラッ

今回、視点がよく変わるので注意してください。

Stage 13 ありえないなんてことはありえない。幻想郷にこそふさわ

「……」

千冬は自室で一人、パソコンの画面と対面していた。

画面に映るのは、ニンボール・チルノVS一夏と鈴の戦闘。

「あ のとき、IS反応は一夏たち以外にはなかった……となると

画面の映像を止め、近場の電話を取る。

『はい！ちーちゃん！みんなのアイドル東ちゃんだよー！』

「やかましい。…聞きたいことがある。お前は、IS無で人型が単独飛行できると思うか？」

『ん？まず無理だと思うよー。…あ、でも少しは例外があると思う。』

「例外、だと？」

『そー！この東さんに嫉妬したかなんだかわかんないけど、ISを只管壊して周ってるのがいるみたいなんだー！ひどいよね！』

「……何？」

『ISを壊して周ってるの。コアや搭乗者ごとね。いつくんや篝ちゃんも巻き込まれないか心配だよ……』

「…東、おそらくお前が言っているそいつが今日、このIS学園に来た。一夏もそれに巻き込まれている。」

『まじ！？この東さんもそれは予想できなかった……』

「一応そいつの映像は取れた。解析してみるが…どうす『超特急で行くよ！いつくんをけがさせるなんて許さないんだからね！明日にでも着くよ！』…そうか」

『そうそうちーちゃん！せっかく東さんが行くんだから愛の抱擁を

「じゃあな」

言いたいことは言い終えたのでさっさと受話器を置く千冬。  
心底面倒くさいと思っっている分まともに話せただけでも十分なんだ  
ろう。

「……………あれは…何だ……………修正者だと…？」

千冬をつぶやきは、誰にも聞こえることなく消え去った。

【クラス対抗戦第一試合、織斑一夏VS鳳鈴音の試合途中に降って  
きた一機と一体。

一機、ISの方はもう片方の一体による修復不可能なほどの残骸と  
化した。

もう一体。こちらが問題である。

ISを墜落させた張本人と思われる。

紅いワンピースに水晶型の三対の羽と特徴的な外見をし、さらに特  
徴的なのは【生身で空中を飛ぶことができる】ことである。

IS無で飛べるこれを人間とは到底思えない。

今回はこの存在について記者が取材したことを以下に記そう。

また、この存在が自らを【修正者】と呼んだため以下修正者と呼称  
する。

この修正者、織斑一夏と鳳鈴音が束になっても傷一つつけることが  
できなかった。

織斑一夏は未だ初心者としてまだいいだろう。

だが、一年の代表候補生では全く歯が立たないということがわかっ

た。  
さらにこの修正者の来襲により、中華人民共和国代表候補生鳳鈴音が負傷。  
少なくとも一ヶ月絶対安静という診断がなされた。  
鳳鈴音とは幼馴染であったと情報がある織斑一夏だが、鳳鈴音を負傷させた責任感からか落ち込みだし、口数も少なくなったとの情報も。

修正者達（本人が仲間がいるような発言をしていたため複数形とする）の目的は【篠ノ之東の抹殺】【全てのISの破壊】【全てのIS操縦者の抹消】の三つ。

そして、【修正者】という言葉から、ISという存在に対抗して作られた人造生物ではないかと推測される。

修正者のこれ以上の情報は一切無し。

多くのISが存在するIS学園がおそらく【修正者】達の最終目標となるだろう。

つまりは、【修正者】VS【IS学園】の全面戦争の危険性もある。詳しく調査を進める予定。】

「……つと。こんな感じかな。」

ハイテクな部屋とは似つかわしくなく用紙にペンと今の時代からすれば激しくローテクな方法で新聞を書く私、新聞部部長射命丸文。ただいま妹の射命丸薫子と共に新聞の推敲中です。

「ちょっと待って姉さん。一応私もあの場にいたけど思いつきり逃

げたから全然知らない身だけどさ、ここまで書いていいの？」「何言ってるの薫子。権力何かに屈したらマスメディアの名が泣くわよ？情報はあらゆる武器より強し。情報をつかさどる私たち新聞部こそこの学校の最高権力者なのよ。実質的に。」

「いや、その理屈は若干おかしいとは思うけど…捏造とかしないの？」

「しょうがないのよ。私もその場にいたからね。捏造を少しミスったら殺されるわ…」

「…そ、そう。頑張れ姉さん。」

「うん、頑張る…」

妹の慰めが心に染みる……

さつて、あとは……

「邪魔するよ」

突然、扉が蹴り開けられる。それ自動ドアですからね、そんな蹴り開けるもんじゃないですから。

まあこのお方に指図はできないんですけどね。

そんな生徒会長、更識楯無様。事実上現在の最強IS操縦者。

「あやややや、これはこれは生徒会長の更識様じゃありませんか。こんな新聞部へ何の御用で？」

「いつも思うけど姉さんも切り替え速いよね…」

「記者の常識ですよ薫子。」

「んー、まあ用つつうかまあ用なんだけどね。例の一年のクラス対抗戦に乱入してきた奴。あいつについて知ってることってあるの？何か一年にも二人知ってそうなのがいたけど口が堅くてさ。」





電気をつける気にもならないほどのようだ。  
おおナイーブナイーブ。

「いちか。ああ、いたいた。」

部屋の隅で体育座りをしている一夏を発見。本当に落ち込むとこんな感じになるのね。初めて知ったわ。

「レミリア……」

「あ……なんてったってけ、あいつ「鳳鈴音」ああそれぞれ。何とか生きてたらしいじゃない。」

「でも、俺は鈴を助けられなかった。鈴に大けがさせて……！」

「……一夏。少し勘違いをしているみたいだから言っておくわよ。」

【私は別にそいつが生きていようが死んでいようがどうでもいい】  
のよ。」

「…………！」

一夏が顔を上げ私をにらむ。

吸血鬼は夜目が効くから涙目になっているのがよく見える。

「一夏はあの赤いのが憎いでしょうけどよく考えなさい。あいつと私たちの利害、一致してるのよ。」

「…………」

「まあ、【全てのIS搭乗者の抹消】は少し困るけど【篠ノ之東の抹殺】は私はどうでもいいけど、【全てのISの破壊】は私たちの目的と一致するのよ。ISからの変革とは、ISを抹消すること。つまり何が言いたいかって言えば……私たちとあいつは同類よ。」

「……嘘、だろ？」

「大マジよ。」

「だって、あいつは鈴を……」

「いつかは私たちも戦うことになるわね」

「……」

「そうね、何時かは言っておかないといけなかったから今話しましょう。私をさ。」

少しだけ服を脱いで、隠していた羽を広げる。

久々に風があたって少しだけ肌寒い。

暗い部屋でも一夏には見えているらしい。

「それ…羽、なのか…？」

「羽よ。私は人間じゃあない、吸血鬼だからね。」

「……」

「改めて自己紹介するわ。私はレミア・スカーレット。誇り高きヴラド・ツェペシユの末裔にしてスカーレット家当主。ついでに運命を操る能力を持っているわ。」

「……それで、俺に運命を見たって言ったのか」

「ええ。しかし私はまだ幼く、故に運命を直接操ることはできない。しかし見ることによりその後の運命を変えることはできる。貴方は、私に味方をするか、世界に味方するか、自分に味方するか、それとも奴等に味方するか。」

「……」

「貴方の運命は貴方が決めなさい。貴方にはその権利がある。イレギュラーの貴方には、私の所有する運命から離れる権利がある。さあ、決めなさい織斑一夏。【貴方の運命】を！」

「あ…レミリアさん。」

部屋を出ると、セシリアと篠ノ之さんが未だ立っていた。会話は少しだけ聞いていたようで若干二人の表情は暗い。

「聞いていたみたいね。セシリアは前から見せたから知っているでしょう?。」

「…夢だとは、思っていたのですけど。」

「正直、今でも信じたくはない」

「セシリア・オルコット。篠ノ之箒。私が気に入っている一つのフリーズを貴女達に送りましょう。」

【ありえないなんてことは、ありえないのよ。】

Stage 13 くありえないなんてことはありえない。幻想郷にこそふさわ

東さん登場フラグ発生。

そして一夏が何かダーク方面に落ちかけてます。

次はやっとシャル&ラウラ……の前に一夏弱覚醒。

こんなgggdで大丈夫か？本当に。

Stage 14 一夏の友人ねえ。私を見たときの態度が若干気になったけど

はい、次回予告詐欺すいませんでしたアアアアア！

もう次回予告いらないんじゃないかな…？

さて、林間学校までに鈴が回復するかどうか…それ以前に山田先生の本気とかどうしよう…

カンガエテナカッター！

Stage 14 一夏の友人ねえ。私を見たときの態度が若干気になったけど

翌日、SHR。

「さて、明日から一年生のみなさんにも外出許可が降ります。IS学園の外に出て、お買い物ものとかも楽しんでください。でも！勉強を怠ってはいけませんよ?!わかりましたね?」

「「「「.....」」」」

毎日恒例、山田先生ガンスルーはともかく、今までIS学園の外っ  
ていけなかったのね。無駄に広いから忘れてたわ、若干。

「.....」

一夏の表情を盗み見ると、まだ引きずっているのか暗いながらも、  
何かを決心したかのようにしている。

一夏なりの【運命】が決まったんでしょう。後々聞くとしましょう。

【昼休み 寮1027号室】

「さて...確か明日は休みだったわね。こう休みがあると休み明けを  
考えちゃってダルいわ.....」

「まあまあ。そんなダルいことを二年とちょっと感じ続けている私  
のことを考えてくださいな。」

最早完全に妖怪のたまり場と化している1027号室（私とセシリアの部屋）。

今回の出席者は私、天狗、紫、暇なのね紫

「さて。早速この世界の【流れ】が変わってしまったのは知ってるわ。あの氷精っぽい奴のことも藍が調べてくれているわ。あまり芳しくはないのだけどね。」

「てか、アレは結局氷精本人？別人？」

「……結論から言えば別人よ。本物は霧の湖でいつも通り遊んでたわ。」

「ああ…そう。」

一気に脱力。

今まで危機感バリバリだったのに突然気が抜けるところも脱力感を感じるものか。

「では紫さん。アレは【何】ですか？」

「そうねえ……例えるならば、世界の修正力がオーバーフローした拳句暴走したわね。」

「うん、意味がわからないわ」

「わかりやすく説明しましょう。もともとISという存在そのものがイレギュラーだけど、修正力のおかげでなんとかこの世界は成り立っていたわ。そこに私たちが介入したことにより修正力が過剰反応しちゃって、私たちのような姿を取って暴れだした、と推測しているわ。」

「その理屈で行くと、少なくとも三年前から奴等がいた、ということになりますね。」

「そうなるわ。まあ、お嬢さんの目的はISからの変革だからちよ



うどいいんじゃない？ほら、ISの破壊も目的なんですよ連中。」  
「残念だけど、連中の目的には【操縦者の排除】つてもものも追加されてんのよ。一夏が殺されでもしたらそれこそ本当に連中と同じ手段をとるしかないでしょ。もっとスマートにやらないと。」

「っと、そろそろ時間ですよ、レミリアさん。」

天狗に言われ、時計を確認すると、昼休み終わりの5分前だった。時間に厳しいわねこの天狗。

「じゃ、私たちはまだ授業あるから。」

「これにて。」

そそくさと部屋を出たが、その時には天狗は消えていたため私は一人寂しく教室へ向かった。

その後、面白いことが【一切】なかったため、時間は一気に進み翌日曜日。

早朝（といっても朝8時。私にとっては早朝。）から一夏が出掛けるようで、また眠ろつとする目を擦りながら一夏に無理矢理ついていくことにした。

どうやって起きたかって？

セシリアが無駄に早起きでついでに起こされてるのよ、ほぼ毎日。

「あー、眠い…一夏、こんな朝早くからどこ行くのよ……」  
「もう8時だけだな。これから行くのは俺の友達の家。そのあと病院。」

「病院ねえ…態々見舞に行くなんて甘ちゃんねえ一夏も。」

「悪いけど、目を擦りながら言われても迫力はぜんっぜんないぞ。本当に。」

「やかましいわ……」

隣で笑う一夏を少し睨んでみるも効果は無い。

今の私は本当に眠そうな表情なんだろう…。 実際眠いし。

そんな感じにしばらく歩くと、【五反田食堂】と書かれた棒(?)  
つばいものが見えた。

一夏が「あったあった。」と言っている辺りあれが目的地なんだろう。

「…一夏、準備中って書いてあるけど。」

「気にすんな。目的は飯じゃないしな。」

準備中と書いてある板をよそに一夏が扉を開け、さっさと中に入っていく。

私もそれに続くと、IS学園と同じ時代とは思えないような風景があった。

古そうな木でできたテーブルやら、畳やら、座布団やら。

本当に同じ時代はこれは。幻想郷もこんな感じじゃない？

「一夏、誰もいないみたいだけど？」

「今は多分裏で店の準備中なんだろう。ほら、表に準備中って書いて

あつたし。」

「ああ、そう…」

そのあとも一夏の後に続いて行くと、一つの部屋にたどり着いた。

「…一応他人の家よね。あつさり進んでて忘れかけてたけど」

「ああ。弾、入るぞー。」

扉を開けるとそこは実に質素な部屋。

IS学園と同じ時代とは以下略。

「お…？よう、一夏じゃねえか。久しぶり。」

「ああ、久しぶり弾。元気にしてるか？」

「たりめーだろ。お前こそ一人でハーレム満喫してんだろ？」

「満喫なんかできるわけねーだろバカ。」

その部屋の中にいた人と語りだす一夏。

私の存在忘れてるでしょこいつ。

「一夏。私のこと忘れてない？」

「…あ、ごめん。」

本当に忘れてたよこいつ。

一夏がごめんごめんという横、弾という人が口をパクパクしと開け閉めしている。金魚か。

「ああ弾、こいつは「一夏…ちょっと、こつち来い…」ああおい、弾！？」

一夏が突然引つ張られ、二人揃って部屋の隅でしゃがみこんだ。何

あれ。

とりあえず私も部屋に入り、適当にベッドに腰掛けることにする。

「おい、お前あの子の知り合いか!？」

「クラスメート。付いてきたんだよ、半ば無理矢理。」

「そうじゃねえよ!お前、あれが誰だかわかってんのか!？」

「その二人、陰口はもう少し聞こえないように話さない。」

もしかして聞こえないと思っていたのだろうか？

吸血鬼の聴力じゃなくても丸聞こえだったし。

「は、ハハハ…あ、俺は五反田弾。よろしく。」

「それ、もつと最初にやりなさいよ…レミリア・スカーレットよ。」

ごまかすように自己紹介されたが、されてしまったものは仕方なく私も自己紹介することにする。

が、私が自己紹介すると一瞬弾が固まった。「やっぱりな…」とつぶやいていたが聞かなかったことにしよう。

その後、一夏と弾が二人で何やらゲームを始めたようだ。

ゲームぐらい幻想郷にだってあるわよ。PCエンとか。

まあ、二人用見たいなので、私はその辺に転がっていたり本棚に積まれている（入れてあるではない、積まれている、である。）漫画を読み耽っていた。

突然ガンツ!という音とともに扉が蹴り開けられる。

扉は蹴り開けるものという常識ができそうで怖い。

「お兄い、お昼できたよ。さっさと食べに…」

扉を蹴り開けた誰だか知らない人、フリーズ。

この世界の人間は本当に固まることが多いわね。どついうことなんですよ。

「い、一夏さん！？と誰！？」

「よう蘭、久しぶり。邪魔してる。」

「私はあまり気にしなくていいわよ、一夏の付添だから」

「一夏さんの付添って!？」

蘭つて人、暴走。

若干面白い。

「蘭お前なあ、ノックぐらいしろよ。恥知らずな女だと思われ」

視線一閃。弾、一瞬にして沈黙。弱っ。

「で、その恥知らずな女。何の用よ」

「誰が恥知らずな女よ!……お兄い、お昼できたから。一夏さんもどうです？お昼まだでしょう？下で待ってますね。」

ぱたん、と扉が閉じ静寂が訪れた。

…今、恐ろしいほどの三段変化を見た。

私、弾、一夏の順の反応なんだろうけど一夏に対してだけ敬語にするほどの切り替えの速さ。人間の女は恐ろしい。

「…しかしアレだな、蘭とも三年間ぐらいの付き合いになるけど、まだ俺に心を開いてくれてないんだなあ…」

「お前「あんたは何を言っているんだ」」

弾と一夏について行きながら一階に下りると、どうやらさっきの恥知らずな女こと蘭とやらが昼食準備をしていた。

それを見て弾が「うげ」と漏らしていた。どうしても妹に勝てない兄（姉）の気持ちはわかる。私なら特に。

「…なに？何か問題でもあるの？あるならお兄いひとり外で食べてもいいんだけど？」

「聞いたか二人とも…今の優しさにあふれた言葉。泣けてきちまうぜ…」

「ロクでもない恥知らずな女を妹にもって不幸ね弾。私にも妹はいるけどそれはもう恐ろしくて…」

「恥知らずな女じゃない！いつまで引つ張るのよ！」

涙をぬぐう弾の肩に手を置く私。

正直弾が座ってなかったら肩に手が届かなかったかもしれない。

私たちの前に置かれているのは弾曰く「売れ残った定食」らしい。

…定食って何？

とりあえずもくもくと食べる中、私の他三人は実になぎやかだった。

「蘭さあ」

「は、はひ！？」

「着替えたんだな。どっか出掛けるのか？」

「あー、いえ、その、これは、ですねっ！？」

見るからに動揺している蘭。面白い。

「一夏に恥知らずな部分を見られてついに恥を知ったんでしょ。ねえ弾。」

「ついに恥を知ったか。兄として妹が恥を知ったことほど嬉しいことはいででででで!!!」

アイアンクロー炸裂。

やっぱり恥知らずだった。恋する乙女が恋している相手の前で荒ぶってどうすんのやら。

「でよう一夏。鈴は大丈夫なのか？」

その後普通に昼食を取っていると、突然弾が呟く。

いつの間にあいつのこと教えてたのね。口外していいのだろうか。

「いつ回復するかはわかんないし、少なくとも一ヶ月は絶対安静。」

「応命の危険性はないってさ。」

「そりゃーよかった。こんな若くときから友達が殺されたなんて聞いたら捻くれちゃう。」

「まあ、生きていてくれてよかったよ。」

「…一夏さんとお兄い、よくそんな話題で話しながらご飯食べますね。」

「恥を知らない女はこれだから困る。グロい話題じゃなけりゃあ食事普通にできるものよ。」

「恥を知らない関係ないでしょ！てかずっと気になってたけど、あ

んだと一夏さんってどんな関係よ!」

「聞きたいの?」

「……え?」

「本当に聞きたいの?私と一夏のあーんな関係やこーんな関係を。本当に話していいのかしら?」

「う、うづうづ……」

あ、今私すっごく悪い顔してるきつと。紫みたいに悪い顔してる、きつと。

「あんなことやこんなことって……特に覚えがないけどな……」

「まあ気にしちゃ駄目よ。」

「……レミリアさん、だったっけ。IS学園、一夏さんとクラスメイトだとか。」

「そうね。」

「……決めた!私も来年、IS学園を受験する!」

「!?!お、お前、何を言ってる」

ビュッ                      ガン。

この宣言に、真っ先に反応した弾の顔面におたま直撃。弾は倒れた。

「え、受験するって……なんで?蘭の学校ってエスカレーター式で大学まで出れてさらに超ネームバリューのあるところだろ?」

「まあ、自殺願望があるって考えていいんじゃない?」

「大丈夫です。私の成績なら楽勝です。」

私の話聞いちゃいねえ。

「ま、私は別にかまわないけど……ISはスポーツじゃなくて兵器。」



殺し合いに参加したいだなんて酔狂な奴ね。」

「おいおい……」

「まあ私は忠告しかしないわ。私は別にあんたのことを気に入ってはいないからね。あとごちそうさま。一夏、そろそろ病院に行かないと時間が足りなくならない？」

「……あ！やべー！！」

一夏が時計を見、突然慌てだして一気に食べる。一気に食べると健康に悪いらしいわよー。美鈴が言った。

そんな感じに一夏もあっさり食べ終わり、席を立つ。

「じゃ、鈴のお見舞い行かなきゃいけないから、じゃあな！」

「五反田蘭。貴女の運命、楽しみにしているわよ。」

そそくさと扉を開け、食堂から出ていく。その後再度後ろで弾の悲鳴のような声がしたが気にしてはいけないのかもしれない。

「……で、病院、行くの？」

「ああ。ちゃんと鈴に言わないとな。【守れなくてゴメン】って。」

「甘ちゃんね。それが貴方の決めた答えかしら？」

「それについては、病院で！行くぞ！」

突然走り出した一夏。驚かせるつもりだったのでしようけど

「私から逃げられると思わないことね！！」

一夏に追いつこうと、私は思いきり地を蹴った。



Stage 14 一夏の友人ねえ。私を見たときの態度が若干気になったけど

おぜうさまは本当に煽りがうまいお方……

今回は五反田食堂。

弾と蘭って何かG DEATERとかに出てきそつな髪してるなー  
とか考えたのは私だけでいい。

次回、おぜうと一夏の鈴お見舞い編。

(原作で何か病院っぽいところであっけな……まだ二巻までしか買っ  
てないんだよな……)

Stage 15 くそれが一夏の答ならば、私は運命の悪魔として手伝おう。

今回は色々な都合上で短めです。

そしてついに一夏の【運命】<sup>こたえ</sup>が定まりました。

ここから原作ブレイク始まるかも・・・始まらないかもしれない。

Stage 15 　それが一夏の答ならば、私は運命の悪魔として手伝おう。

五反田食堂を出た私と一夏は、鳳鈴音が入院中らしい国立の病院（永遠亭のようなものかと思っただがそんなことはなかった。紅魔館より大きいんじゃない？）にいた。以外と近くにあつて若干驚いたわ。紅魔館より広そうなここだと正直迷いかねないため私はずっと一夏の後に続いていた。

「……広いし白いし、病院つてのは殺風景ね。全部紅くすればいいんじゃない？」

「病院つてのはそんなもんだよ…レミリアは病院つてのは行ったことないのか？」

誰に向けたものでもない私の呟きに一夏はわざわざ返してきた。女心以外は気が利くとはよくいったものね。

「種族柄ね。そういった病気とは無縁…つてわけじゃあないけどそもそも生きる時代が違つたからね。」

「つくづくよくわからんな……」

「人間は異種族に対し本能的に理解したがないもんよ。」

では妖怪や魔女はどうなのか？そんな哲学染みた考えは即座に投げ捨てる。そういうのは我が親愛なる友人が考えることだ。

「つと、あつたあつた。鳳鈴音つと……」

無機質な扉の横には鳳鈴音と書かれた板が張られていた。

一夏もそれを確認し、ノックしてから扉を開ける。

「鈴は……」

「まあ、あいつが来てから未だ数日しか経ってないわ。目を覚ませつてのが無茶な方よ。」

鈴音はさらに無機質なベッドに横たわり、何かいろいろと線に繋がれていた。

永遠亭にはあんまり行ったことがないからよく知らない。

「……鈴……」

当然一夏の言葉にこたえられるわけもなく、部屋には機械の一つが鳴らす音だけが暫く響いていた。

「……帰ろう、レミリア。」

ふと、一夏がそう呟いた。

「……ええ。」

私は、ただ二文字でそれに答えた。

もう夕方ともいえる時間帯。私と一夏はIS学園に続くモノレール（紫の出す電車的一种らしい。）に乗っていた。

IS学園に続くものだけありさらには時間帯も合わさって、客は私たち以外には見当たらない。

「……なら、レミリア。一昨日、俺に聞いたよな。『私に味方するか、世界に味方するか、自分に味方するか、それとも奴等に味方するか』って。」

静寂を破ったのは一夏だった。その声や表情は、かなり真剣なもの。

「……ええ。答えは出たのね。」

「俺は千冬姉みたいにすごい才能があるわけじゃない。今はISを使えるだけってだけのただの男だ。俺が助けられる人なんていないかもしれない。」

「……」

「でも、俺には守りたい人がいる。だから俺は、【俺が守りたい人に味方する】。それが俺の答えだ。」

「…及第点、ね。あんたらみたいなお人一人にできることなど高が知れている。だから守れるもののみを守る……うん、面白い答えよ。」

「

「一夏。織斑千冬と篠ノ之束は歴史に完全に名を遺した。ISを生み出した罪でね。世界に变革を齎したのが篠ノ之束と織斑千冬の罪。その罪は、その後釜たる織斑一夏や篠ノ之箒によって再び世界を変えることではか償えない。せっかくだから、あんたも便乗して歴史に名を残しちゃいなさいよ。女尊男卑を終わらせた英雄、ってね。」

「とんでもない考えだ…折角で歴史に名を残すって…」

「（人間目線で）長く生きるとそういう感覚になるもんよ。」

ため息をつく一夏に対して私はしてやっつたりのニヤケ顔。

セシリアほどではないが私もそれなりにプライドは高い。

まあだからなんだというわけでもないのだけど。

一夏の答え、【俺が守りたい人に味方する】。

その言葉の裏の意味を、一夏は本当にわかっているのだろうか。それとも、それを覚悟した上で言い放ったのか。

【守りたい人に味方する】

それは逆に言えば守りたい人以外はどうなってもいいと同じことだ。一夏のことだ、その守りたい人の範囲はとても広いのだろう。

私としては、一夏にはその守りたい人は精々数人にしてほしいものだ。

奴、チルノは私を協力者と言った。

だが、チルノは鳳鈴音を負傷させた。

それでも、一夏がチルノに味方するだろうか。

私は、その時一夏に加担できるだろうか。

……私の目には、一つの運命が見えた。

IS学園を舞台に、チルノ対IS学園の戦争が行われていた。

そして、そのどちらに私や一夏がいるか。

それだけは、いくら視ても見えることはなかった。



Stage 15 くそれが一夏の答ならば、私は運命の悪魔として手伝おう。

鈴暫く戦線離脱。セカン党の皆様、お許しください！（何回目だっけこれ）

暫く鈴のポジションには早苗が来ると思います。

えーと…次なんだっけ。

いや次回予告をすると高確率で詐欺になるからやめておこう。

次回、シャル&ラウラ登場！

Stage 16 〱 転校生って、一つ二つのクラスに集中するものなの？〱 (前)

今回はシャル&ラウラ初登場。

色々試行錯誤した結果アニメと原作が混ざった感じに。(今更)

ブラックラビツ党の皆様、お許しください！

何かシャルロツ党の人以外にずっと謝っているような…

Stage 16 〱 転校生って、一つ二つのクラスに集中するものなの？

次の日の朝。

教室が妙に騒がしい。

何かあったとすれば朝食時か昨日の夕食。私は眠かったので輸血パック（O型。不味い）を啜ったり納豆ご飯をかき込んだりしてさっさと眠っていた。

私がセシリアより早く寝るのは意外と珍しいことだったりする。

「ねえ、聞いた聞いた？あの噂。」

「何？新聞に書いてあったこの学園に人間じゃない何か潜伏してるって噂？」

「違う違う。なんと今月のトーナメントで勝つと…！」

「織斑君と付き合えるらしいよ〜！」

「ほんと〜!？」

「マージー!？」

「……篠ノ之さん。あの言葉、聞かれていたようですよ。」

「……くっ……」

「何、何があったの。吐き出しなさいしのなんとかさん」

私は何か知っているようだったセシリアと篠ノ之さんに聞くことにした。

実は私たちって人脈狭かったりするんじゃない…？

「……トーナメントで私が優勝したら、付き合ってもらおう、と一夏に宣言しただけだ。」

「そういうことはあまり人目のないところで言うべきですね。現に

寮なんてどこに耳があるかわからないところで宣言してしまったあまりにこんな出来事になってしまったのですから。」

「セシリアの割には正論ね。で、この惨状か…そういうのは本人に了承とれよ、と言いたくなるわ。」

「わたくしの割に、ってどういふことですか……」

「おはよう。みんな何で盛り上がってるんだ？」

「「「「なんでもないよ！！」「」「」」

一夏が登場した途端にこの団結力。

実際は超当事者なのにこの扱いの一夏…面白い……

「席に着け。ホームルームを始めるぞ。」

と、千冬が来た。

「今日から本格的な実践訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着で構わんだろう。」

「いやよくないでしょ。ISスーツのいらぬ身としては奇怪極まりないんだけど」

「知るか。忘れるものが悪い。」

「「「もつともで……」」

一夏を見ると、ほんのり顔を赤らめている。あ、絶対想像したなこいつ。

「では山田先生、ホームルームを。」

「は、はい！ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二人です！」

「……」

「……ええええええつ！？」「……」

クラス中が大絶叫。

てか、何で分散させないのだろう……。一夏補正？唯一の男性補正。恐ろしい。

とかなんとか思ってるうちに、教室のドアが開く。

「失礼します。」「……」

入ってきた転校生を見て、ざわめいていた教室が静まった。何故か。

転校生の片方、男子服を着ていたからだ。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いと思いますが、みなさんよろしくおねがいします。」

クラスの生徒ほぼ全てがあっけにとられていた。

【ISは女性にしか使えない】この定説を破ったものが一夏の他にいたからだ。

「お、男……」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて、本国より転入を」

にこりと笑顔を浮かべてだれかの呟きに答えるシャルル。  
私にはできない。私にはあんな笑顔はできない。割と本気で。

「きゃ……」

「はい？」

「……きゃあああああ！」「」「」

入学式の日以来の大音量。

とっさに耳を防いだだけ学習していたというもの。

「男子！しかも二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「これは！禁断の三角関係ができるかも！」

「……協力は惜しまないわよ！」「」

毎度毎度微妙によくわからないのも混じっている。

このクラスの女子は色々とたくましいな。

いや、ほとんど女子か。

「あー騒ぐな。静かにしろ。」

面倒臭そうに千冬がぼやく。毎度毎度大変ね千冬って。きっと胃薬とか持ってるわ。きつと。

「……」

そんなクラス中がにぎわう間、もう一人の転校生は腕を組んだままじっとしていた。

「静粛にしる！…ラウラ、挨拶をしる」  
「はい、教官」

突然佇まいを直し、千冬に敬礼（メイドたちに美鈴が教えていた。読んで字の如くとか言ってたわね）しだす転校生、ラウラに対しクラス中が茫然としていた、一体感あるわねこのクラス。

「ここでは教官と呼ぶな。私は既に教官ではないしここではお前も一般生徒だ。織斑先生と呼べ。」

「了解しました、教官」  
「ったく……」

また頭を抱える千冬。やっぱり胃薬飲んでそうよね。イメージだけど。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

「……」  
「……」  
「……」

クラス中がさらに沈黙。続く言葉待ちのようだが、どうやらそれ以上話す気はないようだ。

「あ、あの、以上ですか？」

沈黙に耐え切れなくなった山田先生が声をかける。

「以上だ」

が、玉砕。山田先生、本当に弄られ役ね…

「！貴様が……！」

突然一夏をにらみ、つかつかと一夏に近づくと

バシン！

「！？」

突然、一夏を殴った。いや、ひっぱたいた？

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか！」  
あの人の弟…千冬、何やらかしたの。どんな問題児育てたのよ本当に。

「い、つきなり何しやがる！」

「ふん……」

一夏が声を荒げるも、どこ吹く風。

完全に無視してその先の空いた席に座ろうとするが、【何か】に妨害される。

私のグングニルだ。

「…貴様、何のつもりだ」

「別に。ただ初対面の相手に個人的感情で暴力を振るうような奴にちよつとした既視感と不快感を抱いただけよ。」

「個人的感情だと……」

「個人的感情ではないと？千冬と一夏はまごう事なき姉弟。義姉弟ならともかく血の繋がった関係を認めないってのは些か無理がある



と思うけど?」

「小娘が……!」

「対する相手の実力もわからない奴が言うことかしら? 雑魚。」

「……ふん!」

私のグングニルを無理矢理退かし、空いた席に着いたラウラ。

ふと見ると退かした腕が機械っぽくなっている。

…ああ、そうやってグングニルを退かしたわけ。

「スカーレット、織斑先生と呼べ。さて、ではホーミングを終わる、各人はすぐに着替えて第二グラウンドへ移動。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散!」

解散の指示の後、シャルルは即座に一夏に連れられて行った。

私は特に着替える必要もないので同じく着替える必要のない人物、東風谷早苗でも拉致するとしましょう。

とか考えながら二組の教室を除くと、特徴的な緑髪と蛙と蛇の【ダサイ】髪飾りの早苗がいた。

他の連中が着替える中、自分だけ着替える必要がないのが若干気まぐずいんだろう。私もそんなこと感じた。

「青巫女!。グラウンド行くわよ!。」

「…あ、レミリアさん!今行きます!」

ISの訓練施設だけあってえらく広い第二グラウンド。流石に着替える必要の云々を考えると私と青巫女が一番乗りになってしまうのは自明の理。

日傘をさすのが面倒だったので私は既にISを展開しておいた。  
え？規則？規則（常識）は投げ捨てるものって青巫女も言ってるじやない。

「レミアさん。時に神奈子様と諏訪子様がどこにいるかはわかりますか？」

「…いるの？」

『何だい失敬な小娘だねえ。ここにいるっての。』

『ケーロケロケロ。所詮神奈子の存在感なんてそんなもんだ。』

突然聞こえた微妙に聞いたことのある声。  
確かに青巫女が仕える神\*2の声だ。

「…で、どこにいるって？」

「あー…ここです。」

そついい早苗が指差すのは、自身の髪飾り。

……つまり

「…堕ちたもんね。」

『言わないで、自分でも情けない姿だとは思ってるんだ…』

『神奈子つたらなっさけなーい。』

『やかましいわ諏訪子！あんたも同じような姿じゃないかい！』

「あの…お二方、あまり私の頭の近くで騒がないください…」

『ごめんなさい』

神二人よええ。

その後続々と生徒達が来たが、一夏とシャルルが来たのは最後だった。  
何やってたんだろっ……

Stage 16 転校生って、一つ二つのクラスに集中するものなの？ (後

前回と違いキリが悪いですが今回はここまで。

次……セシリアVS山田先生。

早苗が参加するかどうかは不明。

あと、暫くラウラさんはおぜつさまに弄られることになります。

おぜつさまは本当に煽りの上手いお方……

Stage 17 くバカガエルとボケガエルは紙一重く（前書き）

今回、早苗回と言っても過言ではないでしょう。  
そんな感じですよ。

暫く早苗の出番が多くなるでしょう……

てかあの実習の時のほんさんどこにいたんだろう……

## Stage 17 くバカガエルとポケガエルは紙一重く

「これより実習を開始する！」

「……はい！」

物凄く広い第二グラウンドの一角。生徒一同、列を成していた。私はIS（巫女服）、青巫女は制服と妙に場違いだが仕方ない。ISスーツが必要ないのだから。わざわざ好き好んでボディラインを晒すというのも淑女のやることではないだろう。こんな腋巫女服着といて何言ってるんだとかはやめて。言わないで。

「くっつ…何かとうとすぐにバシバシと人の頭を……！」

「…一夏のせいだ一夏のせいだ一夏のせいだ……」

後ろの方でしなのさんとセシリアが痛そうに呟いていた。

授業が始まる直前、一夏と私語をしていたという理由ではたかれたのだ。

軍事施設って恐ろしい。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力があふれんばかりの十代女子もいることだしな。オルコット！あと東風谷！」

「え、私も……！？」

『いやー噂には聞いていたけど確かに暴君だねえ』

『神奈子の言えることじゃないけどねー』

「何か言ったか東風谷？」

「いえ、何も言っていない……」

頭に付いてる神二匹のおかげで青巫女はかなり苦勞しているようだ。千冬の眼力は誰であろうと即座にひるませることができらしい（一夏談）。

「専用機持ちはすぐにはじめられるからだ。いいから前にでろ」

「これも全部一夏さんのせいですわ……」

「神奈子様、諏訪子様、あまりはしゃがないように……」

『あーあー聞こえない聞こえない』 『聞こえない聞こえないケーク。』

はたから見ても殴りたくなる神二匹。当事者の青巫女からすれば相当なのかもしれない。殴っていいんじゃない？

「お前から少しはやる気を出せ。」

奴からのポイントを稼

げるやもしれんぞ？」

後半、小声だけど……千冬にとっては一夏は生徒連中のやる気製造用……不憫ね、一夏。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「ふっふっふ……この東風谷早苗。ヒーローらしくかつこよく勝ってみせましょう！」

『一体誰と戦っているんだい早苗』 『お前だろロリ先祖』

あいつらにぎやかで若干羨ましい。いや羨ましくない。あの神二匹はいらない。

「それで、お相手はどちらに？わたくしは東風谷さんとも構いま

せんが…」

『ほう、言ってくれるな小娘。神の力を見せてやるうではないか』

『今更カリスマぶつても遅いよ神奈子』

「…すいません、家の神様方が…」

「…先ほどからの声、貴女からだったのですね。」

「まあ、うちの神様です…今はこのざまですけど」

『言わないでくれよ早苗！』

『カリスマブレイク速っ。最速じゃない最速。数秒でブレイクしたし。』

「少し黙れバカ共。対戦相手は…」

キイイイイイ…

上から…何の音？こつちを何か降り…墮ちてくる？

あの先にいるのって…！

「一夏あああ！…！」

即座に飛び出し、一夏を拾って空中に退避。

落ちてきた物体はそのまま地面に落下。

そのままいたら一夏は押しつぶされてもう年若い少女には見せられないような絵になっていたでしょう。

一夏じゃなかったら見てみたかった。

「一夏ー、とりあえず白式出してくれない？この体勢若干キツインだけど…」

「あ、ああごめん。」

一夏も白式を出して着地。結局何が落ちてきたわけ？



「いたたたた……」

… 山田先生だったようだ。どうして上から落ちてきたの。

「と、言うわけで対戦相手は山田先生だ。山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。射撃制度は高いぞ。」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」

候補生止まりなのはその性格のせいなんじゃないか？と一瞬思ったけど言わないでおこう。千冬に怒られそうだし。

「さて小娘共、いつまで惚けている。さっさと始めるぞ」

「え？あの、二対一ですよ？」

『正確に言えば四対一だけどねー』

「安心しろ。今のお前たちなら…東風谷は少し持ちこたえられそうだがオルコットはすぐに負ける。」

負ける、しかも青巫女以下と断言されてセシリアはやる気がさらに増えたようだ。挑発に弱いなあ。

そういえば試験官を倒したとか言ってたけど、それも山田先生だったんだろっか？

ただの高速自機狙いだけなのに何故勝てないのだろうか。むむむ。

「では、はじめ…！」

号令と共にセシリアと青巫女が飛び上がり、続いて山田先生を追うように上がっていった。

「手加減はしませんわ!」

「よろしく願いますね。」

『神の前に跪かせてやるうではないか。』

『神奈子、遅い遅い。』

「……い、行きます!」

相変わらず微妙に迫力がない山田先生だ。

セシリアのブルー・ティアーズから放たれたブルー・ティアーズ（ややこしいってレベルじゃないわね）のレーザーから戦闘が開始された。一夏の時とは違ってあっさり回避されてるけど。

「デユノア。山田先生が使っているISの解説をして見せる」

千冬はおそらく結果はわかりきっていると聞いたげにシャルルに説明を求める。

「は、はい。山田先生が使われているISはデユノア社製【ラファール・リヴァイヴ】です。第二世代開発最後の機体ですが、そのスペックは「長い。機体で知っておく必要なことなんて長所と短所と特徴でしょ？だったらそれだけでいいじゃん。ねえ千冬?」

「口をはさむなスカートレット。それと、織斑先生と呼べ」

「えーっと……長所は高い汎用性と豊富な後付装備。器用貧乏とも言われがちですが、マルチロール・チェンジ操縦も簡易なのでカバールしやすく、操縦者をあまり選ばずに多様性役割切り替えを両立しています。」

「……苦労。さて、そろそろどちらかは落ちるぞ。」

セシリアはブルー・ティアーズ（ビットの方）を展開、攻撃中には本体はほぼ無防備。山田先生はその展開タイミングを読んだのか、

ブルー・ティアーズが離れた途端にグレネード（爆弾の一種らしい）をセシリアに撃ちこんだ。もちろん直撃。  
千冬の横数mのところに墜落。

「ほう：山田先生に対しここまで持つか。」

千冬が言ったのはおそらく青巫女のこと。

青巫女はいまだ山田先生と激闘（？）を繰り広げていた。

互いに弾幕（山田先生の方は弾幕つつうかただの自機狙いだけど）を張り、青巫女が追いつめられると山田先生の真上に自身を転送し切り返し。

山田先生が追いつめられるとグレネードを撃ちこんでそれを大きく避けたところを切り返し。一進一退の攻防って見ててつまらない。

「正直見ててつまらないわ。千冬、増援って建前で暴れていい？」

「織斑先生だ。その申し出は却下する、これ以上実演で時間を使つてられん。」

青巫女が何度目かの転送を開始し、山田先生の真上に現れ豪快に踵を振り下げる。

山田先生はそれを紙一重で躲し、完全に空を切った青巫女に対しグレネードを構え

どがーん。

先ほどセシリアが墜落した場所に青巫女も墜落。生きてるか、青巫女。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の実力は理解できただろう。」

以後は敬意をもって接するように。」

「でも私に一撃でぶっ壊されてなかったっけ……」

「スカーレット、余計な口をはさむな。」

「いやー、驚きましたね。モーゼの奇跡を読まれてしまうとは。」

『早苗はばかばか使いすぎなんだよ。もっと私を使ってよね!』

『ハッ、使つと無防備になる奴しか使えないロリガエルが何言ってる。』

『ハア? 詐欺判定と棒飛ばすしか能がないババアがなに言ってるのさ。さぎはいけないとおもいまーす!』

『あんだと?』 『お? やるか?』

「お二方…あまり騒がないでください。捨てますよ」

『すいませんでした』

「はあ…まさかこのわたくしが連敗を記すとは……」

青巫女とセシリアも戻ってきていたようだ。

「というか神二匹だけ弱いよ。権力が巫女>>>>神になつてない?」

「さて、専用機持ちは織斑、オルコット、デユノア、ポーデヴィツヒ、スカーレット、東風谷だな。では八人グループになつて実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやれ。スカーレットと東風谷は同じ班だ。リーダーはどちらか片方がやれ。ISを使つての決定は禁ずる。では、分れる」

千冬が言い終わる途端、一夏とシャルルの二人の周りにその他大勢、集結。ひどい人気だ。

「馬鹿共が…出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番は先ほど言ったリーダーの順だ。次もたつくようなことがあれば、専用機もち以外全員ISを背負ってグラウンド100周させるからな！」

千冬の発言力の高さもあつてか、先ほどまで完全に2グループになつていたその他大勢は即座に、さらに綺麗に5グループになった。…なんだろう、この表現し辛いイライラ感は。

「最初からそうしろ馬鹿共が…」

そうため息を漏らす千冬。苦勞人ね。

「ねえねえれみー。」

ん、聞き覚えのある声とあだ名…

「あら、本音じゃない。」

「そーだよー。すっかり人気者だねえれみー。」

「…あの、レミリアさん、その方は？」

「ああ、ウチのクラスの変人代表布仏本音。一夏曰くのほほんさん。」

「変人じゃないよーお。」

周りもそれなりににぎやかみたい。本当に軍事養成施設（早苗談）かここは。

「ではみなさん！これから訓練機を一班一体取りに来てください。数は【打鉄】三機と【ラファール・リヴァイヴ】が二機です。好きな方を班で決めてくださいね。あ、早いもの勝ちですよー！」

「青巫女！ラファリヴァ持ってきなさい！超特急で！」

「了解です！！！」

『早苗がノリノリだあ……』

『非想天測はロボット分少ないからねえ…早苗も不満だったんだろ  
うん。』

『…神奈子、何か突然罪悪感に襲われたよ』

『奇遇だね諏訪子、私もだよ……』

賑やかしくラファールリヴァイヴを取りに行った青巫女（とその他  
二匹）。

私は、この実習に嫌な予感を感じ取っていた。

…いや、いつもなんだけどぞ。

Stage 17 くバカガエルとポケガエルは紙一重く（後書き）

早苗さんロボット好きらしいので非想天測（腋巫女服＋ZUN帽＋オンバシラ）は内心不満なようです。

次回、実習風景……の前に一話、チルノ達側を。時系列、面倒くさいことになりますけどね。

（次回予告詐欺にならないようにしよう……）

Stage 17・5 歪ヲ消シ去ルモノと生ニ出スモノ (前書き)

今回はチルノ側と束さん+。

ヘイチヤンは本当に携帯殺しなお方… (環境依存文字的な意味で)

決意する一夏たち、猛威を振るうチルノたち、暗躍する束さんたち。

この三グループがどう動くか…もちろん私にもわかりません (え



Stage 17・5 歪ヲ消シ去ルモノと生ミ出スモノ

〔某国 某所〕

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「フフフ……………」

薄暗い会議室。

そこに五人の少女（には見えないのが一人いるが）はいた。

氷結の熾天使こと【ナインボール・チルノ】。

最強の尖兵こと【ジエネリス】。

世紀末死神こと【小町】。

死の鬼灯こと【フィサリス】。

漆？暗殺者こと【？魅霊】。

一人ひとりが国家代表をも大きく上回るほどの実力者達。

彼女らの目的は一つ、【全てのISの排除】。

ISという現代最強兵器を排除する場合、通常ならば一致団結する  
のが常識だが

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

「……フフ」

この場に約一名、フィサリスの薄ら笑いの他に言葉はない。それどころかニンポール・チルノ以外の全員が殺気をむき出しにしている。

協調性のかけらもない集団である。

「……私を保護してくれたことは礼を言うが、私は私が戦いたいと思う相手としか戦う気はない。雑兵などと戦っても仕方がないのでな」

「私は誰でも構わないわ。誰かが望む劇の登場人物として私はただ殺すだけ。ねえ魅霊。」

「……フン、お前に同意するのは気に食わないがな」

無表情と怪しげな微笑。対照的な魅霊とフィサリスが声を出す。

この二人、イギリスにてIS部隊を壊滅させた後、互いに戦っていて、互いに戦闘不能になったところをチルノに発見、回収された。

「……うぬら、彼奴がうぬらを拾わなければ今頃イギリスの実験台にされたであろう。つまり、命を助けられたわけだ。わかるな？」  
「そのぐらいは承知している。そしてチルノとやらが私やフィサリスより強いこともな。助けられたという義によって行動しろ、とならば拒否する。」

小町の威圧感豊富な言葉も気にせず無表情な魅霊。

5人いる中で3人が無表情。嫌な空間である。

「現在、フランス・イギリスが壊滅

目下の目標はアメリカ

カ・ドイツ・ロシア」

「Are considered worthy to be called if they representatives of the strong?」(国家代表ならば強者と呼ぶに相応しいと考えるか?)」

ずっと黙っていたチルノ、ジェネリスが口を開く。

「ならば日本国のIS学園。次の偵察はこの小町が往かせてもらう。」

「4日前からIS学園にはイレギュラーターゲット、篠ノ之束の生体反応が確認されている。しかしIS学園の攻略は単体では不可。自生命を最優先とせよ。」

「ふん、この拳王小町に油断など生ぜぬわ!」

「貴様「あなたのは拳ではなく鎌じゃないの?」だろう」「

「……ぐすん」

若干涙目になりながら小町は暗い部屋から出て行った。

ぐすん、だけ女性の声ということから、通常時の野太い声は意識してやっているのだろう。

「……私はドイツIS部隊【シュバルツェ・ハーゼ】に対し攻撃を仕掛ける。魅霊・フィサリス。フランス、デュノア社を完全に壊滅させる。以上だ。」

「……I? (...私は?)」

「貴様は陸上戦闘でない限りISに勝つことは難しい。待機している。」

「……Agreed (...了解しました)」

ジェネリスはチルノに一例すると、残像を残して消え去る。

そしてチルノも席を立ち、部屋を出て行った。

残されたのは、魅霊とフィサリスの二人。

「……行くか」

「ええ。物語の台本は彼女の手にある……」

「私は、それに抗おう。私は生きているからだ。今、ここに。」

「足掻いても、物語は変わらないというのに……」

「だとしても、だ。」

「……フフフ。」

魅霊がフィサリスの手を取った瞬間、二人は？い液体のようなものになり、床に落ちるように消えた。

～ I S 学園 地下～

「  
」

I S 学園の深い地下。教員等限られた人物にのみ侵入を許された場所にいたのは、まるで童話のような姿の女性、【篠ノ之束】と紫のドレス姿の女性、【マエリベリー・ハーン】、通称メリー。

二人は数日前から I S 学園に到着（千冬の目の前に突然現れた。また何かロクでもないものを開発したんだろう、と千冬は片づけていたが）。その後ずっと地下にいる。

二人の前にあるのはクラス対抗戦の折、残骸となって落ちてきた I S のようなもの。

そして、その際に現れたチルノの映像だった。

「…あの、東さん。何か成果はできました？」  
「もっちゃん この天才東さんにわからないことはないのだよ」  
「そうですか…ではあれは、いつたい？」  
「うん、あれはね……」  
「じくじ……」

「よくわかんない！」

東の一言に、メリーは大幅にずっこけた。そう、それはもう盛大に「わかんないって…わからないことはないって言ったばかりじゃないですか!？」

「メリーちゃん、状況つてのはコンマ秒単位で変わってくるんだよ？数秒前なくても今はあるのさ」

「は、はあ……（この天災は……）」

「少なくとも、ISではない何かつてのはわかるよ。完全に生身だね。あの羽っぱいのどうなってるんだろ…分解して調べてみたいけど……」

「命狙われてるんですからもうちょっと危機感持ちましょうよ……」  
「いやいや！この東さんが見つかることも、命を奪われることもありえなっしんぐ！」

「でもゴーレムもこのありさまですよ？」

「のーぷろぶれ！既にゴーレムの三号機もできてるからね！」

「…あの、これ一号機ですよ？二号機はどうしたんですか？」

「……」

「……」

「さあ、篝ちゃん専用ISの開発も終わらせなきゃいけないし帰るー！」

「はあ…わかりました。」

束がメリーの腕に抱き着き、メリーが壁に向かって歩き出す。

メリーが壁にぶつかる瞬間、二人の姿は消え去った。

暗い部屋には、【よくわかんなかった！ごめんねちーちゃん】と書かれた紙が残されていた。

Stage 17・5 歪ヲ消シ去ルモノと生ミ出スモノ (後書き)

チルノ達の二つ名はチルノとジエネリス以外は即興。

個人的には世紀末死神が気に入っていたりしています。

次回こそ、実習風景。(あのISの二人が班長で大丈夫か…?)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1322t/>

---

インフィニット・ストラトス ~運命の悪魔と変革者(いちか)~

2011年6月15日17時24分発行